
安藤さんはB型でした（改訂版）

條ひろみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

安藤さんはB型でした（改訂版）

【Nコード】

N2902H

【作者名】

條ひろみ

【あらすじ】

「安藤さんはB型でした」の改訂版です。

一時間以上亜季に会わなかったら

「ねえ亜季、おなか空いたよね？」

チワワみたいに目をくりくりさせて私の目を覗き込むこいつは栗山淳、二十歳。私と同じ大学の同じ学年で、今は学校が終わっていつものデート中。要するに彼氏だ。この四月で私たちは三年になった。

「うんまあ空いたと言われれば空いたような……」

「何が食べたい？」

目はチワワ並みに黒目全開でツブラだが、180センチと背は高いので、身体はゴールデンレトリバー？ まあ何というかでっかいペットみたいな感じ。

「んゝそうだな、強いて言えば……餃子？」

「餃子！ よおし分かった！ 今ケータイでめっちゃ美味しい餃子のお店探すから待ってて！」

自分で言うのも何だけど、淳は私にゾッコンだ。私のためなら大抵何でも言うことを聞く。そして気持ちを汲み取りすぎてこのように空回ったりもするのも毎度のこと。

「いいよ別に。どっかその辺で」

「ダメダメ！ せっかくの亜季との食事なんだから、妥協なんて出れないよ！ 待っててね〜」お、ここなんてどう？ 『ハクシヨン大魔神餃子』。魔法のランプに入ってる特製ダレは一度食べたらヤミツキだって！」

今日は特に記念日というわけじゃく普段のデートなので妥協して下さい、という気持ちは届かず仕舞い。

「んん？ どこそれ」

「新宿。新宿のねえ……」

「ええ！新宿？ ここ大宮だよ？」

「で、でもさ、最近テレビでもヒコマロが絶賛してたって……」

「やーだ、もう疲れた。動きたくない」

さすがに付き合いきれん。

「そ、そう？ じゃあちよつと休憩する？」

「休憩？ ってどこで？」

「そりゃ休憩といえば……ね？」

チワワが発情した瞬間でした。

「バカ！ 淳いつつもエッチすることばっか考えてんでしょ！ もう帰る！」

「じよ、冗談だってば。あ、じゃあさ、あそこのラーメン屋にしようよ。ね、ほら看板にも『当店手作りオリジナル特製巨大餃子』って書いてあるし」

「……いいけど」

「じゃあ決まり！」

「でも食べたらずぐ帰るからね」

「ええ！せつかく久しぶりに会ったんだから、もう少し一緒にいようよ」

「昨日も会ったし明日も学校で会いますけど？」

「オレの中では一時間以上亜季に会わなかったら久しぶりなの！」

何言っただか、と呟きながらもニヤけてしまった。ホント、可愛
いやッ。

「本当に帰っちゃうの？」って

淳とはこんな感じで、私たちは学校でも公認の仲良しカップルで通っている。

淳は優しい。チワワのクセにすぐに発情するけど。一秒だって離れたくないってよく言ってるけど、大袈裟でもなんでも無いんだろう。学校でも可能な限りずくずくっつくついてくるし。

デートの帰り際なんて大変だ。握った手を離そうとしないんだから。バイバイって言って改札に向かおうとするとすぐに私の手を取って「本当に帰っちゃうの？」って。

お陰で何度終電逃しそうになったことやら。たださえ可愛いチワワアイズがさらにウルウルしてきて、そんな瞳で見詰められると未だにキュンと来ちゃう。

でも最近、何だろう、私の事は死ぬほど好きだって言ってくれるし優しいし我儘言っても怒らないし特に不満は無いんだけど、うん、何ていうかちょっと物足りない？

何てね、こんなこと言ったらバチが当たるよね。せつかくこんなに自分の事を好きでいてくれる人が傍にいるんだから。うんうんそうだそうだ。というわけでとりあえずコンビニ寄ってこーっと。

あ！ イチゴ大福の新しいのが出てる！ ええっ生クリーム&生キヤラメル入り！？ こここれは買っしかないでしょ！

「お会計百五十円になります」

いつもの店員さんだ。何気にちよつとカッコイイんだよね。

「ありがとうございます」

早速イチゴ大福ちゃんを……ん？　なんか入ってる。手紙？　何だろう。

『こんにちは。安藤亮介つています。初めまして……じゃないですよ。いつもお菓子を買ってくれてありがとう。っていつでも別にオレの店じゃないからあんまり関係ないんだけど。』

自分が店にいるときは一日一回は必ずキミを見かけます。ずっと気になっていたので思い切つてアドレス渡します。メールくれたら嬉しいです。アドレスは………』

ぷぷつ汚い字だなあ。これって要はナンパ、だよな。凄いモテそうな顔してるのに手紙なんて意外とシャイなんだなあ。直接声掛ければいいのに。あ、仕事中にナンパはまずいか。イタリア人じゃないもんね。

でも「気になってるコ」に渡すんならもうちよつと丁寧に書きなさいよね。さて、どうしよつかなく。これ渡されてすぐメールするのよね、がつついてるって思われるのも嫌だし。しばらく様子見の方向で。あ、淳からメールだ。

『愛しの亜季へ。明日どこ行く？』

『明日はダメ。バイト』

『ええ！？　だって水曜日だよ、休みじゃないの？』

『人が足りないから出る事になったの』

『そんな~~~~もうやめろよな~~~~居酒屋なんて.....』

『ふうん.....じゃあ淳がお小遣いくれてデート代も全部奢ってくれるのね？　だったら辞めてもいいよ』

あれ、返って来なくなっちゃった。しょうがないな。

「もしもし？　いいでしょ、学校で会えるんだし」

「うん.....分かった」

ふふ、へこんでる、可愛い。い。

「じゃあね、また明日」

「あ、亜季！　待って！」

「何？」

「大好きだよ」

「.....私も。じゃあお休み」

「うん、お休み」

盛ったチワワが抱きついて

安藤さんにアドレスを渡されてから三日間、私はコンビニに行くのをやめてみた。理由は……男心を焦らしたい女心が芽を出したから。そろそろ頃合だろう。いるかな……あ、いたいた。わわわスッゴイこっち見てる。とりあえず普通に買い物しようっと。

「ありがとうございました……」

うつわめっちゃテンション低っ！ 仕方ないなあ。私は店を出て歩きながら携帯を取り出した。

『安藤さんこんにちは。私が行くといつもいるので顔は知ってましたよ。でもまさか手紙渡されるなんてビックリ！ これってナンパですよね？』

さてさて、何て返ってくるか……わ、もう来た！ 仕事中じゃないの？

『よかった！全然連絡無いからもうダメだと思った。アドレス渡してからぱったり来なくなっちゃったし。さっきもほぼシカトだし（笑）　そうです！　100%ナンパです！　で、お名前聞いてもいいかな？』

『そうでしたね、自己紹介がまだでしたね。上村亜季、大学生です。安藤さん、どうせ色んな女の子に手紙渡してるんでしょ？　で、引っ掛かったらラッキー！　みたいな（笑）』

ノリが軽いもんね。きつとあちこちに釣り糸垂らしてるに決まっている。あれ？　返事が無い。やば、ちょっと調子に乗りすぎた？　怒

っちゃったかな……まあいいか。こんなんで怒るくらいならその程度の男ってことで。とりあえず駅へ向かおう。今日は、いや今日も淳とデートだ。

「亜季……！ ゴメン待った？」

「待った。三時間」

「まじで……そんなにオレのこと待っててくれたの？」

「待つわけないじゃない。三秒が限界。だいたい淳のクセにこの私を待たせるってどういうこと！？」

「ご、ゴメン、グループでやる課題が長引いちゃって……」

「へ……私より課題の方が大事なんだそうなんだ。だったら学校戻って思う存分やってきなよ。私帰るから」

「待って待って！ ゴメンゴメン！」

「知ってるでしょ！？ 私待たされるのホント嫌いなんだから！」

「ごめんなさいって！ この通り！ 機嫌直して」

「本当に反省してるの！？」

「してますしてます」

「何でもいうこと聞く？」

「聞きます聞きます」

「じゃあね……」

私はバカ淳の耳を引っ張って口を寄せた。

「いてて、な、何？」

「そのコンビニでエッチな本買ってきて」

「え？」

「あ、ただ買うだけじゃ詰まんないから、そうだな……読みながら買って」

「ええ！？」

「立ち読みしながらレジに並んでさ、『こここれハナチもんです

よね?』って興奮気味に店員さんに見せて」

「ええええ!?! そんなこと……」

「じゃあ帰ろっかな」

「ただただって店員女の子だよ?」

「あつたりまえでしょ! 男の店員じゃ面白くも何ともないじゃない!」

「そんな〜それは勘弁して……今日ゴハン奢るから」

「ヤダ」

「じゃあさ、前から欲しいって言ってたワンピース買ってあげるから。ね? ね?」

「ヤダ! やんないんなら帰ろ。じゃね!」

「わ、分かった分かりましたやりますやりますよ……」

「ホント!? さすが淳!」

私は首に手を回して後ろから抱きついた。淳は俯いて、コンビニでエロ本なんか買ったことないのに……と呻いている。

「ほら、さっさと行く! 私も他人の振りして後から行くから」

十分後。

「あ~~~~っはっはっはっは!」

「ちよつと亜季笑いすぎだつて」

腹を抱えて転げまわる私を、道行く人が怪訝な顔で見ている。しかし呼吸困難寸前の私はそれどころではない。

「ただだつてさ、あの店員のコの顔見た? 明らかに変態見るような視線で、眉間にしわ寄せてあっはっはっは周りのお客さんもドン引きだし!」

「うつ、酷いよ亜季……もうあのコンビニ行けない」

「あゝ面白かった！　じゃあ何か食べよっか」

淳を苛めて大笑いした私はすっかり気分爽快だ。対照的に淳はまだ俯いたまま。

「ほらゝもう許してあげるから。大丈夫だよ、いちいち客の顔なんか覚えてないって！」

それでもまだへこんでる。

「しょうがないなあ、じゃあさ、ゴハン食べたら……ホテル行く？
「え？え？え？ホントに？」

発情スイッチオン。

「いいよ。淳の勇氣に免じて」

「ややややったゝゝ！　亜季愛してる！」

盛ったチワワが抱きついて顔を近付けてきた。

「ちよ、やめ……みんな見てるって、調子に乗るな！」

「ごめん、怒った？」

あああ……この謝ってる顔とかスッゴイ可愛いんだよね。あと困らせたときの顔、もう最高！　あの顔見たくてついつい苛めちゃうのであった。

別に浮気とかじゃないからね！

「美味しかったね〜このタイカレー」

「か、辛い……」

「辛いけど美味しかったね〜」

淳は辛さで顔面から汗を噴き出している。会計のとき、タイ人のおばちゃんが、顔面から汗を噴き出し、悶える淳を見て「カ〜ワイソ〜」って言ったのには笑えた。この人そのうち口から火を噴くんじやないか？

「ほら、しっかりしなさいよ！」

「だってサラダまであんなに辛いなんて」

「だらしないな、じゃあもう帰る？」

「ななな何言ってたんだよ！ かかか帰らない帰らない！ これからでしょこれからでしょ！」

性欲は激辛にも打ち勝つのだ。

「目が血走ってるう淳コワ〜い。お、メールだ」

「誰誰？ 誰から？」

携帯を覗こうとする淳の顔面に突っ張りをかますと口がタコになった。

「うるさいな……あ」

「『あ』って何！？ 今『あ』って言ったよね！？」

「やかましい！ 沙耶からだよ！」

こういうところは鋭いんだから。

「ホントに？ 見せて見せて」

「な〜んでお前にメール見せなきゃならんのじゃ！」

「日本海溝より深い愛で結ばれたオレと亜季の間に隠し事はないはず」

「ハイハイハイハイ勝手に言ってる」

メールは安藤さんからだった。でも淳が傍にいるときに見る勇気がない。約束通りホテルに行ったけど、安藤さんのメールが気になって集中できなかった。不完全燃焼。エッチの後はいつにも増して私とのしばしの別れを寂しがる淳。そのせいでまた終電逃すところだった。危ない危ない。全く淳のヤツ。

「今仕事終わりました。何か、誤解してるみたいだね。こんなことするのは亜季ちゃんが初めてです。他の誰にもしたことはありません。亜季ちゃんが本気で可愛いと思ったから。もし会ってくれるのであればメール下さい。今日中にメールがなければもう二度とメールしないし、声もかけません。しつこくする気はないので」

今日中！？ あ！ もう日付変わってる！ やっぱ早く返信しなきゃ……

「もう時間切れ……ですか？」

「時間切れ……じゃないよ！ よかった。もう諦めてた」

「ごめんなさい。出かけててメール気付かなくて。今帰ってきました」

「じゃあ会ってくれて事でもいいのかな？」

「いいですよ。いつにしますか？」

「明日の六時くらいなら空いてるけど」

『あゝ明日はバイトなんですよね……』

『そっか。明日が無理だと来週かな。じゃあまた連絡するね』

『あ！ ちょっと待って下さい。もしかすると大丈夫かも』

私は「お願い！ 明日誰か交代してください！」というメールをバイト仲間に一斉送信した。ほどなく一つ年下の男の子から「いいですよ！ 亜季さんのためならいつでも代わります！」という返事。んゝ可愛い後輩くん。どっきゅんハートマーク×3が効いたかな。

『安藤さん、まだ起きてますか？』

『うん、メール待ってた』

『明日大丈夫です！ バイト代わってもらったんで』

『いいの？ そんなわざわざ』

『いいんです。どうせ半分辞めようと思ってるバイトなんで（笑）』

『そっか。それなら安心した（笑）。じゃあ明日の六時で！ 場所は……』

遂に安藤さんと二人で会う日が来た。あ、別に浮気とかじゃないからね！ 友達増やすだけだなんだから。一瞬淳の顔が頭をよぎる。

昨日の夜は不完全燃焼の身体と安藤さんに会えるわくわく感であまり眠れなかった。寝不足の不機嫌さと少々の後ろめたさを解消するために学校では淳に八つ当たりまくって、講義が終わると一人さっさと校舎を後にした。

待ち合わせ場所の池袋にある、落書きされまくりで可哀想な「いけふくろう」の前には既に安藤さんが腕組をして立っていた。コンピ二の制服姿を見慣れた私の目に、ジーンズ姿の安藤さんは新鮮でいっつにも増してカッコよく見えた。

「こんにちは、待ちました？」

安藤さんは黙って私を見詰めたまま固まっている。もしや人違い？

やっぱ面倒くさいから直球投げてみよ

「どうしたんですか？ 安藤さんですよ？」

「うん。安藤です。いやさ、つい見とれちゃって」

「なぐに言ってるんですか」

「いやまじで。ほら、店だとお客さんの顔をそんなにジューっと見るわけにいかないからさ。間近で見ると本当に可愛いんだね」

「よく言われます！ なぐんてね。それよりどこ行きます？」

「近くにさ、凄え餃子の美味い店があるんだよね」

「私餃子大好き！」

「本当？ じゃあ決まりってことで」

安藤さんも餃子好きと分かると私のテンションはさらにアップした。私たちは駅構内の地下道を、自宅へ向かうサラリーマンの波を掻き分けて通り抜け、池袋の西口に出た。

目指すお店は芸術劇場の裏の、大通りに面したビルの地下にあった。「中華料理万里の長城」。扉を開けると中は二十人も入れば一杯になりそうな狭いお店だった。

「小さい店だけど、安い割に本格的で何頼んでも美味しいんだよね。」

あ、それとね」

安藤さんは急に声を潜めて、向かいに座る私の方に身体を伸ばしてきた。周りは仕事帰りのサラリーマンばかりだ。

「店員が中国人みたいなんだけど、ちょっと態度悪いんだよね。でも……」

「その分は味で帳消し？」

「その通り！」

そう言った途端に、頼んだ生ビールのジョッキを、中国お姉さんは左手をポケットに突っ込んだままハイヨーと言って少し乱暴にテーブルに置いた。その勢いでジョッキから泡が溢れ出る。私と安藤さんは目配せをして笑った。餃子は時間がかかるだろうから先に乾杯しようとしたら、もう運ばれてきた。

「鍋アツツイカラネー」

中国お姉さんは素っ気無く言っ去っていった。行儀よく並んだ餃子は熱々の黒い鉄板の上で油の粒を跳ね上げ、食欲をそそる音と香ばしい匂いを存分に撒き散らしている。

「わくスッゴイ！ 鉄鍋ごと出てくるんだ！ しかも四角い餃子だ」

私の喜びように、安藤さんも嬉しそうだった。

「じゃあ乾杯しますか」

「何に？」

「そりゃあもちろん……この美味しそうな餃子に！」

「あはははなにそれ」。じゃあ餃子に乾杯！」

皮はパリパリ、餡にもしっかり味が付いていて、何も付けなくても充分だった。今まで食べた餃子の中で一番美味しい。

「ところで安藤さんていくつですか？」

まあありきたりなところから聞いてみよう。

「いくつに見える？」

「んんんそうだな……二十四とか？」

「すげえ、当たり前！」

「ホントに！？ やったね！」

「亜季ちゃんは学生って言ったよね？ とすると十九かハタチとか？」

「ジュークです」

「おっとまだ未成年じゃないですか……」

「そうですよ〜ピッチピチのティーンエイジャーです」

「ピチピチって……今どき言うかあ？」

「安藤さん彼女は？」

「やっぱ面倒くさいから直球投げてみよ。私のイメージでは本命無しの遊びで三人てとこかな。しかし返ってきた答えは。」

「あのなあ彼女いたら亜季ちゃん誘わないって」

「へ〜凄いモテそうなのに」

「あ〜それよく言われるけど。大きなお世話だっつーの。現実は厳しいんだ！」

「まあ確かにコンビニじゃ出会いは期待できなさそうだしね。」

「で？ 亜季ちゃんは？ いるの？ 彼氏」

「……いないですよ」

「対するここちらは本命一人の遊びなし。思わず嘘をついた。」

「へ〜凄いモテそうなのに」

「あ〜真似しないでくださいよ〜」

「ハハハでもさ、ホントにいないの？」

「いませんよ」

「そつか、じゃあオレ、立候補しちゃおうかな」

「でも応募者は殺到してますよ」。ちなみに面接は随時行っております」

私はにつこり微笑んで丁寧にお辞儀をしてみせた。

「何だ、やっぱりモテるんじゃない」

「そうですよ、倍率高いですから！」

安藤さんとは食事をしただけで二時間ほどで別れたけど、凄く楽しい時間だった。男の人と二人っきりであんなに楽しい時間を過ごすのは随分久しぶりのことだった。

はつきりいつて、ちょっとヤバいかも。顔は結構好みのタイプだし、何といっても声が直球ど真ん中どストライク。それに見た目よりずつと誠実そうだ。彼女がいないというのも多分本当なんだろうな。

ほろ酔い気分の良い気分で電車に乗っていると、バッグの中で携帯が点滅しているのに気付いた。

『今日は会ってくれてありがとう！ 楽しかった。また会ってくれるかな？ 倍率高くても採用されるように頑張るよ（笑） じゃあお休み』

憧れのSMクイーンに会えた

しかしそれからちょっとした事件が起きた。あの日から安藤さんが消えたのだ。もう三日もコンビニに来ていない。毎日通うコンビニだ。今まで二日以上続けて休みだった事はなかったはず。

病気で寝込んでるとか、それとも交通事故で入院とか……まさか避けられてる？ 私と会った直後というのがより不安を掻き立てる。

今日もお店に来てみたものの、どうしてもいいか分からず、自動ドアの前で行ったり来たり。店員さんに聞いてみるか？ でもそれは恥ずかしいかも。安藤さんとはまだそんなに親しいわけではないし。それにこれから淳と会う約束だ。私は頭の中の不安の霧を追い払うように、早歩きで浦和駅へ向かった。

いつもの待ち合わせ場所の浦和駅前に淳はまだ来ていなかった。私は携帯を開く。とりあえず安藤さんにメールだけでもしておこう。

『最近バイト休んでるみたいですけど、何かあったんですか？ ちよつと心配だったのでメールしてみました。ではでは』

「亜季！」

背後から大声で不意を突かれた。危うく携帯を落としそうになる。

「どうしたの？ そんなに驚いて」

「いきなり後ろから声かけるからでしょ！」

「それよりさ、今誰にメールしてたの？」

「あゝお前ってヤツは〜！ また盗み見たな！」

「そんな、内容までは分からないよ。バイトがどうとかつて」
「やっぱり見てるんじゃない！ もう許さん！」

「ご、ごめん、そんなつもりじゃなかったんだけど……」

「淳」

「ハイ」

「そういえば五分遅刻だよな」

「え」

「遅刻した上にメールを盗み見た。これはかなりの重罪だな」

「亜季、誤解だ」

「弁解の余地なし！ さて、どうしてくれようか……お、淳、あそこにさ、一人で立ってる女の人がいるでしょ」

「う、うん。凄く綺麗な人だね」

私の本能は考えるよりも先に平手打ちの指令を下した。

「いってーそんないきなり殴らなくても……」

長いストレートの黒髪に、涼しげで整った顔立ちの、立ち姿も美しいその人は、薄い黒のストッキングに包まれた長くほっそりとした脚を短めのタイトスカートから惜しげもなくさらけ出し、チャコールグレーのスーツが良く似合う、360度隙の無い美人だった。

しかしいくらイイオンナが近くにいたとしても、男は愛する自分の彼女の前であからさまに別の女を褒めてはいけない。これ基本。

「おっとその前に、そのコンビニでエロ本買ってきて」

「ええまた！？」

「今度は普通に買ってきていいから。早く早く！」

「普通だつて恥ずかしいのに……あ！ あの店員、この前の女の子だよ！」

「淳の事なんて覚えてるわけないでしょ！ さつさと行け！」

私はグズる淳の背中を蹴り飛ばす。その背中に追加注文。

「あ、なるべくエグいやツね！ できればSMとかの！」

ちよつと声が大きかったか。私の発言に通行人が振り返った。

「買ってきました。やっぱり凄い変な目で見られたよ……絶対覚えてるって」

落ち込む淳を無視し、私はページをめくる。

「どれどれ……うわあスゴイやらしーよくこんなの平気な顔して買えるね。信じらんないドヘンターイ。まあいいや。じゃあこれにサイン貰ってきて」

「はい？」

「そうだな……あ、ここここ！ このページがいい！ この両手両足縛られて有り得ないポーズしてる写真。ここに書いて貰って」

「サインで、誰に？」

「だ〜から、あの綺麗な人に」

「はいい！？ ちよちよつと待ってよ、あの人、本人じゃないよね？」

「うん違うよ。全然関係ない。そんなの見れば分かるじゃん」

「本人ならまだしも、無関係の人にそれはちよつと……」

「淳バツカじゃないの？ こういうのはね、自信たっぷりになればいいの！ いい？ 『ボクずっと前からあなたの大ファンなんです！ いつも慰めてくれてありがとうございます！ ああ、まさかこんな場所で憧れの人に出会えるなんて……神様って本当にいるんですね、夢みたいです！ あ、そうだ、これ……このページ、ボクの

一番のお気に入りのこの写真にサインして下さい！　お願いします！
！　これからも頑張ってください！』　ってやるの。オ　ワ　カ　リ？」
「そんなの無茶だって……」

「ふうんできないんだ。デートに遅刻して私のメールを盗み見ることはできてもサインは貰ってこれないんだ。そうなんだ……　分かった。もういいや」

「え、いいの？」

「うん、淳とはサヨナラするから」

私はくるりと踵を返し、淳から遠ざかる。三歩歩いて振り返り、

「じゃあね淳、今までそれなりに楽しかったよ！　サヨナラ〜！」

と投げキッス。すると駆け寄る淳に腕を掴まれた。

「まままま待つて待つてよ亜季！　やるやるやるから、お願いだからサヨナラなんて言わないで」

「ホント！？　さ〜すが淳！」

「うつつ何でこんなことばかり……」

「ほら、泣くな！　自業自得でしょ！　　憧れのSMクイーンに会えたんだから、もっと歓喜の表情して！」

もう私に会いたくないから？

三分後。

「あゝっはっはっはっはッバツカじゃないの!? わら、わら、笑い死にする……あっはっはっはっはっはっはっは」

「いっつゝバッグの角で思いっ切り殴られた」

「あ、淳あんた何やってんの！？ か、軽く犯罪だよそれ？」

「ああ、せっかくの工口本がびりびりに……高かったのに」

「あっはっはっはっ……げほげほっ、うゝあゝまじで死ぬかと思
った」

「ビドいよ亜季……」

「あゝあ、今までで一番面白かった」

「もうこれで許してくれる？」

「うんうん許す許す。淳ってホント面白いね。ん、どうしたの？
 おーい、淳く〜ん」

両拳を握り締め、俯いたまま淳は眉間に皺を寄せている。

「あのさ亜季、オレのこと本当に好き？」

「どしたのいきなり」

「だってさ、いっつもこんなことばかりさせて……」

キタキタキタ超ド級のへこみ顔！ 堪ら～ん！ キュン死にノックアウト寸前の私は両手で淳の顔を挟み、背伸びをする。

「え、うわ、亜季ちよ……」

「淳のこと大好きだよ！ 分かった？」

「分かったけど……みんな見てるよ」

「何よ／＼せつかくキスしてあげたのに不満なの!？」

「不満じゃないです! 不満じゃないからもう一回!」

「あ、こら、調子に乗るな!」

淳とは相変わらずの日々を送っているが、安藤さんからの連絡はまだない。コンビ二にも現れない。電話も繋がらない。さすがに心配なので私は意を決してお店の人に聞いてみることにした。レジにいた白髪交じりで背が低く、縁なし眼鏡のおじさんに声をかけた。店長だった。

「安藤? ああ、彼なら辞めたよ。一週間くらい前に」

ええ!?! 辞めたってそんな……

「あ、あの連絡つかないですか? メールも電話も繋がらないんです」

「うゝん特に用はないから連絡はしてないけど。君、友達?」

「はい、そうです」

「だったら直接家に行ってみれば?」

「住所知らないんです。あの、教えて頂けませんか?」

「でもなあ、辞めたとはいえ知らない人に従業員の住所教えるつてのもなあ。昨今は個人情報に厳しいからねえ。赤の他人に教えたことが分かったら……」

「お願いします! 私、安藤さんがいないと困るんです!」

私は見ず知らずのおじさん相手に懇願した。中学生の頃お母さんにお小遣いアップをお願いするよりも、高校に入って携帯持たせてくれるようにお父さんに拝み倒したときよりも真剣に人にものを頼んだ瞬間だった。

私のあまりの勢いに店長さんは、渋々ながら「全く安藤のヤツ、こんな可愛い彼女放つたらかしにして……」と呟き、住所を書いたメモをくれた。

私は浦和駅へ急ぐと改札を走り抜けるように通過し、階段を二つ飛ばして駆け上がり、ジャストタイミングでホームに滑り込んできた京浜東北線大宮行きに乗り込んだ。

安藤さんの家は、さいたま新都心駅から歩いて十分くらい行つたところにあつた。コーポサंकチュアリ。神聖な名前とは裏腹に、錆びて赤茶けた鉄の外階段を持つ、木造二階建ての古いアパートだ。ここの201号室が安藤さんの部屋らしい。

階段を上り扉の前に立つ。表札に名前はない。いるかな……緊張でチャイムがなかなか押せない。好きな男の子の家にバレンタインのチョコを渡しに来た女子中学生の気分だ。

振り返り、通りを見下ろすと散歩中のビーグルと目が合った。そしてワン！という声に背中を押されて私はようやくチャイムを鳴らした。目を閉じて待つ。深呼吸を一つ。やっぱり留守かな、と帰ろうとしたとき扉が開いた。

「はいどなた……って亜季ちゃん！？ どうしてここに……」

「バカバカ！ 心配したんだよ！」

安藤さんの顔を見るなり私は抱きついた。不安と緊張が解けて、目に涙が溢れ出した。

「ごめんごめん、言うのすっかり忘れてた。立ち話もなんだから、

とりあえず……どうぞ」

安藤さんは私を部屋へ入れてくれた。和室の狭い部屋は、散らかっているわけでも、きちんと片付けられているわけでもない。たくさんのCDが収められている棚が目についた。床には読みかけの音楽雑誌が何冊か落ちていた。

「メールも電話も全然繋がらないし……ヒック」

「お金なくってさ、今、携帯止められてて」

「お店にも来ないから……ヒック、安藤さんもう死んじゃったのになって……」

「こらこら勝手に殺すな」

「でも何で辞めちゃったの？ もう私に会いたくないから？」

「……そう」

「！　そ、そうなんだ……」

「何てね、うそうそ。あ、でもある意味本当かな」

「どういうこと？」

「実はさ、亜季ちゃんに手紙渡そうと思った時点でもう辞めるつもりだったんだ。だってさ、亜季ちゃんがメールくれなかったら凄く気まずいし。まあ、結果的には会ってくれたから良かったんだけど」

「そうだよ、辞めちゃったらすぐに会いに行けないよ」

「んーそれでも今の状況で仕事中に來られても、やっぱり恥ずかしいな」

照れくさそうにそう言った安藤さんが可愛い。私はそれを見て少し笑った。

「手紙貰ったときも思ってたんだけど、安藤さんて」

「何？」

「顔の割りにシャイなんだね」

「顔の割り？ オレってどんな顔？」

「いいのいいの！ でも良かった、また会えて」

涙は過ぎ去り、私の頭の中の霧はすっかり晴れたのだ。そして気が付いた。安藤さんに対して敬語を使っていない自分に。

「っかしちゃえばよかった

「亜季ちゃん、会いに来てくれたお礼にご馳走しようか」

「ホントに！？ 何食べに行くの？」

「ん〜じゃなくって何か作るよ。オレの手料理でよければ」

「ええ！？ 安藤さん料理するの！？ スッゴイ意外！」

「そう？ だって外食ばかりじゃお金かかってしょうがないですよ。何がいい？」

「何でもいいよ！ 安藤さんの得意料理で」

「オッケー。じゃあちよつと買い物してくるから待ってて」

「あ、あ、私も行く」

既にスニーカーを履き終えて玄関を開けた安藤さんの後を急いで追いかけた。向かった先は駅前のイトーヨーカドーだった。

「わあ！ スーパーなんて久しぶりだな」

「亜季ちゃん料理は？」

「しようしよと思うてるんだけど、お母さんがいるとどうしてもね」

「分かる分かる。親がいると結局頼っちゃうよね」

「でも作れないってわけじゃないからね。念のため」

「はいはい、じゃそういうことにしておこうか」

「あゝ信じてないな〜！ で、何作ってくれるの？」

「亜季ちゃん嫌いなものとかある？」

「ん〜特にないかな」

「いいね、好き嫌いなく何でも食べるってのはいいことだ」

「ふふ、安藤さんてお父さんみたい…… あ、この魚可愛い！」

「え？ どれどれ……これ？ これ、鰯だよ」

「へえ、これが鰯か〜目がぱっちりしてるんだね」

「結構大きいし、しかも安いな。よし、じゃあ今日は鰻のたたき丼にしよう！」

男の人と二人でスーパーに買い物なんて初めての経験だった。淳とはもちろん行った事ないし。ちよっとした新婚気分。新鮮な野菜と新鮮な魚に囲まれて気持ちも新鮮で、浮かれてはしゃぎ回る子供の気持ちが良い分かった。

部屋に戻ると安藤さんは台所に立ち、手際よく鰻を捌いていく。あつという間に三枚に分かれた。皮を剥かれた身は、ぴかぴか銀色に光ってとても綺麗だった。残った背骨は唐揚げとなった。手馴れた動作で出汁を取り、味噌汁を作る。胡瓜で浅漬けを作る。

本当は家で包丁すら握らない私にとって、その光景は驚きの連続だった。家の中で、母親以外の、しかも自分と大して歳の変わらない若い男の人が料理をする姿。それほど手が込んでいるわけではないけれど、そのどれもが美味しくて、ただただ感動した。

「ご馳走さまでした！ ああ美味しかった」

「どういたしまして」

「まさか安藤さんの手料理が食べられるとは思わなかったな」

「オレだって、こんなに早く亜季ちゃんにゴハン作ることになるなんて予想外だった」

「こんなに早く？ ってことはいずれ作る予定だったの？」

「ま、そういう状況になったらいいなってね。未来日記に書いてある」

「あはははな〜に〜未来日記って。でも……もうなっちゃったね。そういう状況に」

あ、まずいぞこれは。この感覚は……落ちる一歩手前だ。しかも自

分から飛び込もうとしている。でももう止められないかも。

「そ、そうだね……あゝっとさゝて、あ、ほら亜季ちゃんそろそろ帰らないと」

「ええゝもうちょっと……」

といいながらも引き止めてくれた安藤さんに感謝しつつ、しかしこの状況で一緒に飛び込んでくれないことに不満も抱きつつ。

「ダメダメ！ 電車なくなっちゃうよ！ 明日も学校だろ？ ほらほら駅まで送るから」

亮介のバカ……初めて下の名前を呟いた。

四月も中旬に差し掛かり、桜はすっかり散ってしまったが、夜ともなるとまだ肌寒い日が続く。隣をくっついて歩きたいし、手も握りたい。でも我慢。でも繋ぎたい……と思っているうちに駅に着いてしまった。この勝負、お預け。

「じゃあ、ご馳走様でした」

「いえいえ、こちらこそわざわざ来てくれてありがとう。嬉しかった」

挨拶がよそよそしく聞こえて、ちょっとムッとしたので意地悪する事にした。

「安藤さん」

「ん？」

「あの、あのね……」

伏し目がちに、いじらしい顔で俯いてみる。

「な、何？」

やった、思った通り、動揺してる顔だ。

「早く……」

ここで額を安藤さんの胸に触れるか触れないくらいまで近付ける。
で、上目遣いにじっと見詰めて。

「早く携帯のお金払ってね！」

「あ？ あああ、う、うん、明日……明日払うよ」

私を抱きしめようと、上げかけた両腕が行き場を失って、安藤さんは、やる気のないヒップホッパーみたいな変なポーズになっている。

「じゃあおやすみなさい！」

「おやすみ」

電車に乗って腰を下ろす。安藤さんのちよつとびっくりした顔で思
い出し笑い。まさかあんな顔で携帯のお金のこと言われるなんて思
わなかっただろうな。でも。自分で仕掛けといてなんだけど、いつ
そのことキスして欲しかったな……ついかしちゃえばよかった。手
も繋いじゃえばよかった。

あゝでもホント凄いなゝあんなに料理が上手だったとは。それにし
ても部屋で二人つきりなのにあっさり帰されてしまった。料理は手
際がいいけど女の子には手が遅い……か。早く携帯繋がるといいな。

あ、そういえば携帯……電池切れてる。

家に帰って充電し電源を入れた途端、大変な事が起きた。淳から着信とメールの嵐だ。しまった、今日も会っ約束してたんだった。これはマズいぞ……うわ……どうしょ、完全に本気で忘れてた。待てよ待てよ待てよ……落ち着け落ち着け……考えろ考えろ……淳だよね、淳でしょ、淳だから……お、閃いた！これで行こう。これしかない。

本当は帰したくなかった

「あ、亜季！ 一体どこで何して……」

「もしもし淳！？ アンタどこ行ってたのよ！」

「え」

「時間になっても全っ然現れないし、待たされるの大嫌いだって何度言ったら分かるの！」

「いやでも今日はちゃんと十分前にはいたんだけど……」

「十分前！？ 冗談やめてよね！ 三十分待ったんだからね、この私が！」

「で、でもいつものところにいなかったよね？」

「はあ？ いつものところって何言ってるの！？ 今日欲しいバッグがあるからデパートの前って言ったでしょ！」

「え、聞いてないよ」

「ひっど〜い！ 私のことなんてどうでもいいんでしょ！」

「そそそそんなことないよ」

「ど〜せエツチなことばかり考えてて聞いてなかったに決まってる！」

「そんなことないってば。で、でもさ、それなら電話……そうだよ電話！ 電話が全然繋がらなかったけど……」

「電池切れたのよ、悪い！？」

「い、いえ、で、でも……」

「何よ、淳のクセに口答えする気！？」

「口答えなんてそんな……で、でもさ、何で今日に限ってデパートで待ち合わせなの？」

「だ〜か〜ら言ったでしょ！？ 欲しいバッグがあるって！」

「そうだとってもさ、駅で待ち合わせてから行けば……」

「うるさいうるさい！ もう知らない、淳のバカ！」

ふう、これで何とかなるだろ。淳じゃなかったら絶対に通用しない手だな。それにしても本当は怒ってないのにキレた振りするのってとっても疲れるのね。エネルギーを使い果たし、ベッドでうとうとし始めると携帯が鳴った。

『亜季、ごめんなさい。まさかデパートで待ち合わせだと思わなかったから……この通り誤るので機嫌直して下さい』

やだ〜淳ったら信じたんだ、作戦成功！ それにしても淳はちつとも悪くないのに謝ってくるなんてカ〜ワ〜イ〜イ！ でもここですぐに許したらかえって怪しまれるから、しばらく無視するか……お、また来た。

『亜季、もう寝ちゃった？ まだ怒ってる……よね。本当にごめんなさい。明日学校で怒ってる亜季を見たくないの、お願いだから機嫌直して……そして、大好きです』

いや〜〜ん！ 淳のバカバカバカバカ〜〜ホント可愛いんだから！ 許す許す！ 許しちゃう！ って悪いの私なんだけどね。

『まだ怒って……ないよ！ 淳のこと好きだよ、私も。おやすみ』

昨日は淳にちよつとひどいことをしてしまったので、今日は出血大サービス！ しようと思ってたけど学校終わってすぐにバイトだった。でもさすがに今日は一回も淳に怒らなかつたな。こんなこと初めてかも。

バイトが終わって家に帰る途中携帯を見ると、メールが来てた。安藤さんだ！ やった、携帯使えるようになったんだ！

『携帯使えるようになりました（笑）ご迷惑おかけしました。昨日は来てくれて本当にありがとう。驚いたけど嬉しかった。あの部屋で、誰かと一緒に食事をするのは本当に久し振りで、とっても楽しかった。あのとき……』

あれ？ 途中で切れてる。

『やったね！ ケータイ復活オメデトウ！ そして昨日はご馳走様でした。本当に美味しかったです。うちのお母さんより美味しいかも（笑）。スーパーでのお買い物も楽しかった。まさか安藤さんが料理上手とは思いませんでした。で、あのとき……何ですか？』
『あのとき……本当は帰したくなかった』

どつき〜ん。心臓の音が聞こえ始めた。帰したくなかった帰したくなかった帰したくなかった……そのとき手の中の携帯が歌い出した。

「も、もしもし……安藤さん？」
「うん、ごめんね、どうしても亜季ちゃんの声が聞きたくなっちゃって」

安藤さんの声が震えている。心臓の音まで聞こえてきそう。きっと私と同じくらい鼓動が速くなってるんだろ？

「あ、あのさ、また……会えるかな」
「も、もちろん！ またご馳走して欲しいな！」
「うん、そうだね。じゃあ、もう遅いから切るね」
「また、連絡下さい」
「分かった。連絡する。お休み」

「お休みなさい」

電話を切った後しばらくは動悸が治まらなかった。さっきの感じからして告白されるかと思っちゃった。でももしそうだとしたら、私、何て答えたんだろう？

次の日は、昨日の余韻で講義にも友人との会話にも集中できなかった。あれだけの短い会話だったけど、あんなにドキドキしたのはいつ以来だろうか。

隣にいたのはやっぱり彼氏？

「ねえ亜季……亜季？ 聞いてる？」

誰かが私を呼んでいる気がする。

「亜季ったら！」

「ん〜な〜に〜？」

「どうしたんだよ、ボーっとしちゃって。具合でも悪いの？」

あ、チワワだ。

「え？ そ、そんなことないよ。いつもと変わらずラブリーでキュートな亜季ちゃんです」

「ちゃん！？ しかも何そのぶりっ子ポーズ！ 絶対に何かあったはずだ」

ち、犬だけに嗅覚が鋭いな。あ、私がいつもと違い過ぎるのか。

「うるさいな〜何にもないったらないの！ さ〜て今日のお昼は何にしようかな〜」

「まあいいや。ねえ、今日さ、学校終わったらライブ行かない？」

「ライブ？ ってリサイタル？」

「リサ……うん、まあそうだね。オレの友達の兄貴がやってるバンドなんだけどね」

「ふうん。何系？ ビジュアル系？」

「実はよく知らないんだけど、ビジュアルじゃないと思う」

「死人が出そうな感じ？」

「え、何それ」

「だからさ、スッゴイ激しくってシャウトしまくって頭ガンガンに振って盛り上がってくると客席にギター投げたりドラム壊したり火噴いたり」

「いやゝゝさすがにそこまでではないと思うけど……」

「どうしよかな」

「行こうよ、せっかくチケットもあるんだし」

「え？ あるの？ チケット」

「うん、くれたよ」

「そうか、あるのか、てことは無料か……じゃあ行くか」

学校が終わると私と淳は北浦和のライブハウスへと向かった。思えば淳とコンサートの類に行ったことはない。私も淳も「ポップのヒット曲を人並に聞く程度で、それほど音楽に興味がなかったのだ」。

「へえ、ライブハウスなんて初めて来たけど……暗さといい狭さといい予想通りね」

「オレも初めて。何か独特の感じだね」

タバコの煙がもうもうとしている。やっぱりロックは不健康じゃないと良い曲ができないのだろうか。

「普通の人も入れるんだね」

「ん？ どういう意味？」

「私さあ、ライブハウスって麻薬やってる人じゃないと入れないんだと思ってた。昔読んだ『トイ』って漫画がそんな感じだったから」

「どういうイメージだよ」

「お客さん結構入ってるね。その人プロなの？」

「うん、一応プロみたい。地元で活動してるだけで、まだ全然有名じゃないって言ってたけど……あ、出てきた」

「こんにちはゝゝゝ！ どうも、ビーグルスです！ 今日は来てく

れてありがとうっ！」

と叫んだボーカルの人を見て、驚きのあまり私も叫びそうになった。何で安藤さんが歌ってるの!?

「いやあ盛り上がったね！」

「そ、そうね」

「歌もなかなか上手かったし」

「そ、そうね」

「メロディも聞きやすくてオレ結構好きかも。ファンになっちゃおうかな」友達の兄貴だから今のうちに仲良くしておけばブレイクして全国デビューしたときに……ふふふ」

「そ、そうね」

ライブは確かに良かったが、半分も耳に入らなかった。とにかく今はそれどころではない。淳の言葉は頭の上を通過するばかりだ。

「ねえどうしたの？ さっきからおかしいよ？」

「ちよつと……お腹痛くなっちゃった」

「え？ 本当？ 大丈夫？ 下痢？ 変なものを食べた？ ちよつと休憩する？」

「うんちよつと休憩……するかバカ！ 今日はずもう帰る、じゃね」

私は痛くも痒くもないお腹を押さえつつ、足早に淳と別れた。あゝびっくりしたあゝびっくりした。安藤さん、私に気付いたかな……

どうしよう。言うべきか、黙っているべきか。あ、メール、安藤さんから!？ ……じゃなかった、淳だ。

『お腹大丈夫？ 今日は無理しないでゆっくり休んでね』

とりあえずお風呂にでも入って落ち着こう。暗かったしお客さんも
それなりにいたからきつと気付いてないよね。うんそうだそうに決
まってる……げ。

『驚いた。まさかライブに来てくれるなんて。隣にいたのはやっぱり
彼氏？』

夕張メロン食べる？

完全にバレてるじゃないか。何て返そうかな……わわわ電話かかってきちゃった。

「も、もしもし」

「亜季ちゃん？ さっきはびっくりして歌詞飛んじったよ」

「安藤さん……バンドやってたんだね」

「隠してたわけじゃないんだけどね、そのうち話そうと思ってたんだ。まだまだ全然売れてないしさ、もう少し形になってから言おうかなって」

「そうなんだ……凄く驚いた」

「だよ。で、あのさ、一緒にいた人ってやつぱり……」

「あ！ 友達です！ 大学の。そうそう、彼、安藤さんの弟の友達で、それでチケット貰ったって……」

「そうなんだ。亜季ちゃん浩介と同じ大学なんだね。そっか、世間は狭いね」

まだ疑われてるかもしれない。まずい。このままじゃ安藤さんが私から離れていく。私はすぐに会わなくちゃいけない気がした。

「ねえ安藤さん、明日会えないかな」

「明日？ 明日か……昼間なら大丈夫だけど」

「夜は、何か用事？」

「ああ、バイト」

「え？ もう新しいところ見つけたの？」

「もうって、コンビ二辞めてから結構経つよ？ つーか辞める前に決めてたし」

「そっか、そりゃそうだね。で、何してるの？」

「居酒屋。ほら、オレ料理好きだからさ、厨房の仕事がやりたかったんだよね」

「そうだよ、あんなに料理出来るんだからすぐに料理長！」

「あははは」

「じゃあ仕事は夜とか、夜中？」

「五時から十二時くらいまでかな。だからバイト始まるまでならいいよ。それより亜季ちゃん学校じゃないの？」

「あ、明日はね、休講になったの。教授が体調悪くて休んでるんだって」

また嘘。私は安藤さんに嘘ばかりついている気がする。でも、仕方がない。それもこれも全部安藤さんに会ったためだから。

朝。淳に対してアリバイ作りのメール。

『具合悪いから今日学校休む』

『ええ〜！？ 昨日の腹痛まだ治ってないんだ。大丈夫？ お見舞いに行こうか？ 夕張メロン食べる？』

『やめてまじで』

『でも亜季が学校休むなんて……病院に行った方がいいよ』
『うん、そうする。じゃあ授業頑張って』

これでよし。淳のヤツ、まさか本当に夕張メロン持って来る気じゃないだろうな……いや、アイツならやりかねん。ここは一つ念のため。

『大好きな淳に弱つてるところ見せたくないから……だから……来たら殺す』あと、ダルいからもうメールしないでね』

これなら安心だろう。でも家はいつも通り出ないとお母さんに怪しまれるからな。お昼に会う約束だけど、まだ八時半。どうするか。安藤さん、多分寝てるよね、ロッカーは基本夜行性だもんね。でもやることないしな……いきなり会いに行っちゃったりして。

あああ遂に来てしまった。身体が勝手に足が無意識に前進。どうしよう、いきなり押しかけたりするのって、やっぱり迷惑かな。でも安藤さんはこの扉のすぐ向こうにいるんだし。

堂々巡りを繰り返していると、勢いよく玄関が開いた。危うく顔面を打ちそうになる。私の思いが通じたのか？　しかし部屋から出てきたのは安藤さんではなかった。

イケイケゴーゴーサイケデリック

「おい優子、待てよ！」

「じゃあね！ もう二度と連絡してこないでよ！ ん？ 誰、アンタ」

目の前に現れたのは、マツチが十本乗りそうな睫毛に濃い目のメイクがバツチリで、長い髪がくるくるんで、尋常じゃないフレアのジーンズを穿いた七十年代風イケイケゴーゴーサイケデリックファッションで、いかにもロックンローラーが連れていそうな（偏見）派手な感じの女だった。

「何でオレがお前なんか…… あ、亜季ちゃん！？ 何で……」

「亜季？ ああ、アンタが亮介の浮気相手ね。こんなヤツのどこがいいんだか！ 金は無いしアレも下手くそでしょ？」

チビＴへそ出しパンツ見セルックのナイスバディに圧倒されて口も利けないでいる私を見下ろして、優子という女は高飛車に言い放つ。
この人コワい。

「優子お前ふざけんな……」

「まあせいぜい仲良くやんなさいよ！ じゃあね、バカ亮介！」

捨て台詞と共に外階段をロンดอนブーツで必要以上にカンカン音をさせながら優子という女は去っていった。嵐が過ぎ去った後の静けさ。私は固まったまま動けない。もちろん安藤さんの顔も見ることできない。

「あゝ何かごめん。凄いとこ見られちゃったね」

急に怒りが込み上げてきた。

「私……浮気相手だったの？」

「え？ いやそういうことじゃ……」

「安藤さん、彼女いるのに私に声をかけたの？」

「そんな、優子とはとくに終わってるし」

「じゃあなんで部屋にいるの？ しかもこんな時間に……私帰る！」

やっぱり私は遊ばれてたんだ、そう思うと悔しくて仕方がなかった。

「待って！ 亜季ちゃん待って！」

「イヤ！ 離して！」

「駄目だ！ 離さない！ 亜季ちゃん誤解してる！」

「誤解なんかしてない！ 安藤さんには彼女がいた、私のことはよく見かけるからちよっかい出してみた、それだけでしょ！？」

「だから違うって！」

「違うない！」

「好きだ！」

そのとき安藤さんの強い力で、でも優しい力で抱き寄せられた。私の強張っていた身体から力が抜け落ちた。

「え……」

「オレは亜季ちゃんが……亜季ちゃんだけが好きなんだ！ コンビニで初めて見た瞬間から好きになっちゃったんだ！」

「優子と付き合ってたのは確かだけど、もう三ヶ月も前に別れてるんだ」

私は、安藤さんの部屋に上がって話を聞くことにした。話しながら安藤さんはコーヒーマーカーをセットし始めた。こぼこぼという音と共に、部屋中にコーヒの香ばしい香りが広がってきた。

「よかつたらどうぞ」

湯気の立ち昇るカップを包み込む両手に伝わる温かさが私を落ち着かせる。

「よりを戻したいって言われたんだ。だから今オレには好きな子がいるって言った。ま、好きな人がいなくてもアイツとやり直す気はなかったけど。そしたら逆ギレされて」

「でも、何でこんな時間に？」

「夜よりは朝の方が確実に部屋にいると思ったんだろ。え、ちよつと待って、まさか亜季ちゃん、あいつがここに泊まったと思ったの？」

私はカップに口を付けたまま軽く頷いた。それを見た安藤さんは溜め息をついた。

「あゝ信用されてないんだな、オレ」

「そついうわけじゃ……」

マズい、立場が逆転した。

「前に言ったよね？ 彼女がいたら誘わないって」

「そ、そうだよ、ごめんなさい、疑ったりして。怒っ……ちやつた？」

「悪いけど帰って」

「え……」

「気持ちの整理つかないし、あんなみつともないとこ見られちゃったし……今は一人にしたい欲しい」

有無を言わせない口調。完全に機嫌を損ねてしまった。

「う、うん、分かった。私こそ勝手に来ちゃって……ごめんなさい」

飲みかけのカップを静かに置くと、座って俯いたままの安藤さんを残し、振り返る勇気もなく黙って靴を履いた。力ない足取りで駅の方へ向かう。情けない。私、何やってんだろ。

あああどうしよう、怒ってるよね、絶対怒ってるよね。やっぱり行くんじゃないかった。今さらもう遅いけど。淳にも安藤さんにも嘘ばっかりついてるからバチが当たったんだ。まだ十時か。今さら学校にも行けない。行く気もないけど。

でも、私のこと好きって言ってくれたな。抱きしめてくれたし。だから、嫌われてはいないよね、きっと。せつかく時間があるのに、一緒にいたかったな、安藤さんと。もう疑ったりしないから、だから会いたいよ。

「オレも」

不意に背後から声がした。

「オレも亜季ちゃんと一緒にいたい」

「あああ安藤さん！？ 何でここに……」

振り返ると、照れたように笑ってる、あの優しい顔があった。

「ごめん」

「え？」

「亜季ちゃんは何にも悪くないのに、追いついたりしてひどいよね、オレ」

「そんなこと……それよりさっき『オレも』って言ったよね？」

「うん、だって亜季ちゃんが喋ってるの聞こえたから」

独り言を声に出して言っていたことに気付かなかった自分が恥ずかしくなつて、耳まで熱くなるのを感じた。まさか「嘘ばかりついてる」っていうのも聞こえたのかな……

「亜季ちゃん」

「は、はい」

「オレは亜季ちゃんが大好きです。だから、付き合ってください！」

「は、はい」

「ホント？ ホントに！？ やった！」

どうやら聞こえてなかったらしい。そして、もう後に引けなくなつてしまった。

史上空前のスケールと奇跡の豪華キャスト

『具合はどう？ 良くなった？ 元気になったらメールしてね』

家に帰ると淳からメール。今日のはその後、安藤さんのバイトの時間までデートした。映画を観て、食事して、お茶飲んで。スッゴイ楽しかったな。映画はハズレだったけど。話も合うし何といっても声が聞いてて本当に気持ちいい。

どうしよう、もう止まらないかも。それに勢いで付き合っっちゃったし。こんなつもりじゃなかったんだけどな。浮気？違う。浮気じゃない。二股だ。今の状態は完全に二股だ。最悪だ私。でも淳が嫌いになったわけじゃないし……とりあえずメールしよう。心配してるだろうし。

『心配かけてゴメンね。もう大丈夫、明日は学校行くから。おやすみ』

「ねえ亜季、あの男誰？」

「えっ……あの男って？」

「とぼけるなよ。昨日手繋いで歩いてるとこ見たんだから！」

「だ、だって淳、学校行ってたんじゃない……」

「亜季が病気で休むなんて今までなかったから、怪しいと思って家の前で見張ってたんだよ」

「何でそんなこと」

「そしたらいつもよりオシャレしてニコニコして出かけてさ。嬉しそうにスキップなんかしちゃって。オレの前じゃあんな笑顔見せないくせに！」

「あ、あれは違うの」

「何が違うんだ！ オレよりアイツの方が好きなんだろう！ いいよ、分かったよ、好きにしるよ！」

「淳、お願い話を聞いて……」

「亜季に嫌われたんならオレはもう生きてても仕方ない。さよなら」
「待って淳！ どこに行くの！？ 待って」

淳待つ……はっ、夢……よかった。まだ暗い……四時か。淳のあんな悲しそうな目、見たことないな。正夢なんてことないよね、まさかね。でも合わせる顔がないな……

その後うつらうつらとあまり眠れずに朝を迎えた。学校に着くと彼は犬の息遣いと共に真っ先に私の傍に駆け寄ってきた。

「おはよう亜季、もう平気？」

まともに目を合わせられない。

「どうしたの？ まだ具合悪い？」

「え、うつうん、大丈夫だよ、おはよう」

「ホントに大丈夫？ 元気ないみたいだけど」

「だ、大丈夫だよ。元気元気平気平気」

「それならいいけど。ところでさ、ねえねえこれ見て！ じゃじゃくん！」

「ん？ それってもしかして」

とつても嫌な予感がする。そしてこういうときの予感によく当たるのだ。

「そうです！ 亜季が前から観たいって言ってた映画の前売りで

「す！ 実は内緒で買っておいたんだ。ロード・オブ・ザ・ドラゴン！ どうどう気が利くでしょ？ 亜季、今日はバイトないよね、学校終わったら観に行こうよ」

「う、うん、そだね」

「あれ〜？」

淳が大きな身体を折り曲げて大袈裟に覗き込む。

「な、何？」

「あんまり嬉しそうじゃないな……ひょっとして観たかったのって違う映画だったっけ？」

「ううん！ いいのいいのそれそれロード・オブ・ザ・ドラゴン。スッゴイ観たかった！」

「だよね〜一ヶ月くらい前から散々言ってたもんね」

「でもさ、公開されたばかりだから混んでるじゃないかな〜なんて……」

「それは大丈夫。平日の、しかも夕方だから。公開初日とかは絶対に混むから土日はあえて外したんだ。本当は昨日誘おうと思ったんだけどね。あ、ヤバ、講義遅れる！ じゃあまた後でね！」

それは正に昨日安藤さんと観た映画だった。「史上空前のスケールと奇跡の豪華キャストが贈る珠玉のファンタジー」という触れ込みで、しつこいくらいドラマチックな予告CMをガンガン流し、きっちり洗脳されて観に行ったところ、見事に期待を裏切られたというわけ。

しかしその後、安藤さんと「あれはナイよね〜」と逆に盛り上がったちゃって。そういう意味では良かったんだけど、まさか二回も観る羽目になるうとは。しかも昨日の今日って。

無性に会いたくなつた

講義の後、元気を持て余し、散歩に出るとやたら張り切る犬のような淳に手を引つ張られて映画館へ向かった。そこでは淳の予想に反してチケット売り場に長蛇の列があつた。しかも九割方がロード・オブ・ザ・ドラゴンっぽい。キャラクターグッズのドラゴンの帽子を被つた子供たちが駆け回つて人にぶつかつて母親に叱られるの図

私は親切心から「みんな〴〵ツマランぞ〴〵金のムダだぞ〴〵違う映画にしろ」とテレパシーを送つてみるが、届いた人はいないようだった。劇場の中へ入ると、中央から後ろの席が全て埋まつていて、結局二人並んで座れる場所は最前列しかなかった。

画面近つ！ 天罰だ。これこそ天罰に違いない。一番前なんていつもの私ならゴネるかキレるかするんだけど、さすがに今日は大人しくしていた。いっそのこと寝てしまえばよかったんだけど、無意味に大迫力だし淳にも悪いし、一応観ていないと怪しまれるし。そして詰まんない上にストーリー全部知つてるし……とにかく首が疲れる。

「あああああゝゝゝ」

「ほらゝみつともないなあ、鼻水拭きなさいよ」

映画の後、淳は号泣しつ放しだった。

「だって、恋人を守るためにドラゴンになつちゃうなんて……あああ
ああ」

「はいはい、ほらティッシュ」

「だあああしかも最後はダークドラゴンと相討ちで死んじゃうなん

て……」

淳的には相当良かったらしい。まあ感動したんならそれはそれで良いことだ。

「ねえ、何か食べに行こっか」

「ヒック……え、ホントに？」

「うん、だってお腹空いちゃったし」

「やった〜！ 珍しいね、亜季の方からゴハンに行こうなんて」

ダメだ私。淳といるときは淳といたいって思っちゃう。私の一言でこんなに喜んでくれるこの純真さ、素直さが可愛くて仕方ない。

『いや〜それにしても本当に良い映画だったね！』

帰りの電車の中、淳からメールが来た。

『うん、そうだね。チケット買つといてくれてありがとう。淳、よっぽど気に入ったんだね』

私だってたまには素直にお礼を言うのだ。

『映画もちろん良かったけど……』

『けど？』

『隣にいたのが亜季だったから。大好きな亜季と一緒に観れたから感動も倍増！ あの映画は一生忘れないよ』

一生忘れない……か。淳のこういうのに弱いんだよね。ちょっとクサイ台詞だけど、それをなぐんにも考えないで送ってきちゃうところとかね。あ、また来た。ん？ 違う、安藤さんだ。

『もう家に帰ってるよね?』

『今、電車です。どうしたんですか?』

『今から会えないかな』

『え……これから……ですか?』

『ダメかな?』

『ダメじゃないけど、今日はもう遅いし……』

『だよ、ゴメン』

どうしたんだろう。何かあったのかな。とりあえず駅に着いたら電話してみよう。浦和駅で電車を降りてホームの階段を下りながら携帯を開く。

「もしもし」

「亜季ちゃん……」

「どうしたんですか?」

重たくならないように、ちょっとおどけた口調で聞いてみる。

「ん、別にどうしたって訳でもないんだけど」

「けど?」

「無性に会いたくなった」

入れ代わりでチワワ

改札を出てすぐにそう言われて思わず立ち止まってしまった。そして携帯からその言葉が聞こえた瞬間、後ろから急に抱きすくめられた。一瞬驚いたけどすぐに誰だか分かった。耳元であの声が囁く。

「ごめん、会いたかったんだ」

両腕で包まれた私の身体。そのままゆっくりと振り返ると、照れたような、でも優しい眼差しがそこにあった。今、私と安藤さんの考えていることが重なった。私は目を閉じた。安藤さんの唇が、私の唇に優しく触れる。心臓がかつてないほどに激しく音を立てている。

「ずっと……ここで待ってたの？」

「ずっとってわけじゃないけど」

濁すような返事はどことなく曖昧だった。ひょっとしたら待っていたのかもしれないな、私のこと。家にいたらどうするつもりだったんだろう。でもそれ以上は聞けなかった。

いつもと違って無口な安藤さん。並んで歩き出すと、どちらともなく手と手が触れて、私たちはそのまま手を繋いで家に向かった。

「じゃあ……おやすみ」

「おやすみなさい」

別れ際、私のおでこにキスして安藤さんは帰って行った。

「キス……しちゃったな」

お風呂から上がってベッドに横になり、今日一日を思い返す。柔らかな感触がまだ唇に残っている。あんなにドキドキするなんて。淳とするときは、もう何ともないのにな。

淳と一緒にいて、淳からメールを貰って、そのときは淳が愛しくて堪らなかったのに。安藤さんに抱きしめられて、キスしたら、私の中は安藤さんで一杯になってしまった。

「亜季！ 亜季ってば！」

「ん〜な〜に〜？」

「何じゃないでしょ！ 起きて！ 先生こっち見てるから！」

講義中に居眠りしているところを沙耶に起こされた。

「もお〜佐竹先生チョー厳しいの分かってるでしょ!？」

講義の後の休み時間、沙耶に叱られた。今井沙耶とはこの大学に入ってからが一番の仲良しだったが、科が違ったため三年になって必修科目が減ると、顔を合わせることはめっきり少なくなってしまった。今日は週に一回の、沙耶と同じ講義の日だった。

「どうしたの？ 居眠りなんて前はしたことなかったのに。夜のバイトでも始めた？」

「そうそう夜のバイトは肉体的にも精神的にも色々大変で……ってバカ。ちよつと寝不足なだけだよ」

ふわわわと再び欠伸が勝手に喉からせり上がってきた。昨日の夜は、ドキドキが治まらずに結局朝方まで淳と安藤さんが頭の中をぐるぐ

ると回り続けていたのだ。

「亜季、最近元気ないみたいだけど何かあった？」

さすが親友。女の勘は誤魔化せないか。

「あゝ分かった。淳くんと上手くいつてないんでしょ。結構長いもんね。そろそろ倦怠期ってやつですか？」

私が口を開きかけたその瞬間。

「亜~~~~季~~~~！ お昼食べよ~~~~！」

チワワレトリバー、千切れるほど尻尾を振って参上。

「……そうでもなさそうね。うわ、淳くん、満面の笑み浮かべちゃって。あゝあ、心配して損した。じゃね」

「ちよつと沙耶、どこ行くの？」

「あのねえ、今日は四月なのに夏日でただでさえ暑いよ。これ以上お熱い二人になんか付き合ってられません！ また後でね！」

「沙耶！ 今日は一緒に食べようって……もう」

沙耶は後ろ向きで手を振りながら廊下を颯爽と歩いて行ってしまった。入れ代わりでチワワ。

「亜季、今日はどうする何食べる？ あれ？ 今、沙耶ちゃんいなかった？」

「お前ってヤツは~~~~！」

「え？え？」

「せっかく沙耶とお昼食べようと思ってたのに！」

「だ、だから三人で一緒に食べれば……」

「あんな登場の仕方したら誰だって逃げてくでしょ！ バカ！」
「わわ、ごめんなさい…… ってオレ何か悪いことしたかな」

ドSもいいところだね

ぶすつとした顔のまま、淳と学食に入る。

「ねえ機嫌直してよ〜沙耶ちゃんとは明日食べればいいじゃん、ね？」

「沙耶とは取ってる講義が違うから、水曜しか一緒にお昼食べるときないの！」

「じゃあ学校終わったらお茶するとか」

「今日私バイト」

「そっか……ごめん」

「ホントに悪いと思ってるの!？」

「はい……思ってます」

「反省してる!？」

「はい……してます」

「じゃあさ……」

私は淳の困った顔を堪能するために、耳を引っ張った。

「えええ!？ そそそそんなの無理だって、絶対ムリムリ!」

「あつそ、じゃあいいや。沙耶と食べようつと。金輪際淳とはランチしないから」

「わわわ分かりました! 分かったから」

「さ〜すが淳! いよっ! 日本一!」

淳は渋々立ち上がると、私の指示通りラーメンを注文しに行った。そして出来上がってきたラーメンを……

「ちょっとアンタ何やってんの! やめときなっ!」

「だ、大丈夫です」

「大丈夫じゃないよ、井割られちゃ困るんだよ！」

「へ、平気です……割ったら弁償しますから……」

予想通り学食のおばちゃん和一悶着。それを黙って眺めていると、他の学生たちも淳の行動に注目し始めた。

「おい、あいつ何かやるみたいだぜ」

「なになに……？ ええっウソでしょお！？」

「あれはやバいだろ……うわっ！ こっち来た！」

「みんな非難しろ！」

「え？え？ どうしたの？」

「見てみなよ、あれ」

「ラーメン丼頭に乗っけてる……しかも手離しで」

「中身は入ってるんだぜ、あれ。しかも出来立ての熱々が」

「あ！ ちょっと零れた！」

「いやでもこれは……スゲー、何か知らんけどスゲー！」

「頑張れ！」

「あと少しだ！」

「行けええ！」

みんなが声援を送る中、淳は無事に私のいるテーブルまで辿り着いた。

「よおしやった！」

「おめでとう！」

「凄いぞ！ アンタ男だ！」

「スゴイ！ 何でだろう……あたし、涙が出てきちゃった……」

そして学食はスタンディングオベーションとなり、淳は大喝采を浴

びて英雄となった。

「凄い！ 凄いよ淳！ さすがやればできる子！ ちょっと肩にこばれちゃったね。拭いてあげる」

「ありがとう」

「いや〜でもまさか本当にラーメン頭に乗つけて運んでくるとは思わなかった」

「亜季がやれって言ったんじゃないか」

「それに学食中盛り上がったし。淳、今や学校のヒーローだよ」

「そ、そうかな、何か照れるな」

「よ！ 淳カッコいい！ カッコいい淳さん、日替わりランチ一つよろしく！」

「あいよ〜今買ってくるね〜」

バイトの後、沙耶に電話をしながら帰った。

「へえ、そんなことがあったんだ。見たかったな〜」

「そ！ 凄かったよ〜！ 周りがみんな声援送って盛り上がったやつて」

「でも相変わらずだよ、亜季のムチャ振り」

「だよ〜」

「だよ〜って他人事みたいに……しかもちやっかり奢らせてるし」

「あはは。なんかさ、淳の顔見てるとね、絶対に出来ないだろうな。ってことをやらせてみたくなるんだよね〜。で、そのときの困った顔が可愛いんだホント」

「ヒド……ドSもいいとこだよね、亜季って」

「あ〜でもな〜今日は本当に沙耶とお昼食べたかったんだよな」

「そうだね〜最近全然一緒に食べてないもんね」

「聞いてもらいたいこともあったし」

「あ、やっぱり！ 私の勘は当たってたってこと？」

「うん。あのときは正直ビビった」

「沙耶様の洞察力を舐めてもらっちゃあ困りますよ。で、どうしたの？」

久しぶりに沙耶と長電話になりそうだ。家に着いたので一回仕切りなおし。

「実はさ、好きな人が……できちゃったんだよね」

「え？　それって学校の人？」

「ううん、全然関係ないんだけど」

「それは、淳くんと別れたいってことなの？」

「淳とは別れたくないの。淳のこと大好きだから」

「まあでもさ、それはあれでしょ？ 魔が差したっていうか、あの

人ちよつといいな、みたいな」

「違うの。本当に本気で好きなの」

「本気って……そんなこと言っただってどうするの？」 淳くんと別れ

たくないんなら付き合うわけにもいかないでしょ？ まあもつとも

相手が亜季のことどう思ってるかにもよるけど」

「それなんだけどね、実は……告白されて思わず……」

「えええええ〜！？ オツケーしちゃったの！？ じゃあその

人とも付き合ってるってこと!？」

「そうなる……かな。ははは……」

「笑い事じゃないでしょ……でもそれって要するに二股、だよな」

「うん、初めは全然そんなつもりじゃなかったんだけどね」

「そんなつもりって、初めっからそのつもりだったらそれこそ悪魔

でしょうが！」

「あゝどうしよゝゝ沙耶ゝゝ」

「そう言われてもねえ。どんな人なの？ その人」

近所のコンビニで知り合ったこと、バンドをやっていること、二十四歳で、声が凄く素敵で、顔もカッコよくて、おまけに料理も上手で、でも女の子に対しては誠実で。私は気が付けば、次から次へと安藤さんの好きなところばかり一方的に喋っていた。

でも、沙耶にいくら話したところでどうなるわけでもない。当たり前だよ。やっぱりどっかを選ぶしかないのかな。沙耶におやすみを言って携帯を閉じようとしたとき、メールが来ていることに気付いた。

『見て見て〜〜ヒーロー見参！ 友達が撮ってくれてたんだ！』

メールと一緒に送られてきたムービーには、昼間の淳の雄姿が映っていた。ふふ、真剣な顔。きっと淳はこの映像も大切にするんだろうな、ずっと。

トレンディ占い研究会

カーテンの外が明るみを帯びている。スズメの声もチラホラ聞こえる。部屋の電気は点けっ放し、携帯も、ついでに口も開きっ放しで眠ってしまったようだ。

その携帯を見ると、いつの間にかメールが届いている。安藤さんからだ。しかも朝の五時に。こんな早朝に連絡してくるなんて何かあったのかな。ちょっと不安になった。

『亜季ちゃんおはよう。ごめんねこんな時間に。起こしちゃったかな？ 昨日は店が終わった後、バイトの人たちと飲みに行ったんだ。今はその帰り。で、空を見たら朝焼けが綺麗だったから』

もう、心配して損した。画面をスクロールすると写真が現れた。夜の紫から朝を告げる赤へのグラデーションの空に薄い雲が点々と広がっている。

朝焼けかあ。もう何年も見てないな。別世界だもんね。わざわざこんな写メを送ってくるなんて、ロマンチストだなあ。さすがアーティスト。なんて浸ってる場合じゃなかった、学校遅れちゃう！

「ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ！」

学校が終わって淳と出かける日は、講義が先に終わったら図書館で待っているという暗黙のルールが私たちの間でいつの間にか出来上がっていた。

今日は私の方が早かったので、入り口から一目で分かる窓際の席に座ってレポートを書いていると、手を合わせながら騒々しく淳が走ってきた。

「ちょっと何やってんの、静かにしなさいよね！」

声を潜めて頭を引つ叩く。他の学生があからさまな迷惑顔で私たちを見る。

「あ、ごめん」

「で、さっきから何謝ってんの？」

淳の目が泳いでいる。理由はだいたい分かっていた。今日のデートに行けなくなっただけに違いない。

「実は今日ね……んむぐっ!？」

「言わなくてよろしい」

言いかけた淳の口を、ハンバーガーを持つように両手でつまむ。ドナルドダックみたい。

「ぶぶ、変な顔」

「ん~~~~っぱあ! な、何すんの亜季」

「飲み会？」

「う、うん。どうしても断れなくて……って、え!？ 何で何で？ 何で分かったの？」

だって前と同じパターンだもん。

「淳」

「は、はい」

「私ね、淳のこと、何でも知りたいの……」

立ち尽くす淳の前で、わざとらしく科を作って、人差し指を顎から首筋、胸、お腹へと這わせる。

「だからね……」

「だ、だから？」

ベルトの上でぴたりと指を止め、目を逸らさずに言い放つ。

「パンツ脱いで」

「……え？」

「聞こえなかった？ パンツ脱いできて」

「な、何言ってるの亜季？」

「言ったでしょ、淳のこと何でも知りたいって」

「それとパンツと何の関係があるんでしょうか」

「私ね、淳が毎日どんなパンツ穿いて授業受けてるのか気になって気になって眠れないの」

「お、おかしいよ亜季、どうしたの？」

「嫌なの？」

上目遣いで瞬き多めのブリブリな視線を送る。

「嫌っていうか、その……」

「私がこんなをお願いしてるのに？」

「そうだけど、お願いの内容が尋常じゃないというか……」

「ふうん、そうなんだ。デートは平気でドタキャンするくせに、私の些細なお願いは聞いてくれないんだ」

「そんな言い方しなくても……今日来なかったら二度と誘わないっ

て脅されて、仕方なく……」

「じゃあもういい。私というより友達という方が楽しいんでしょ？」

「それとこれとは……」

「分かりました。私は大人しく身を引きます。今まで素敵な思い出をありがとうございました。あなたと出会えたこと忘れません。さよなら」

白々しくレポートと机の上の物を片付けて私は立ち上がる振りをする。

「わくわくかった！ 分かりました、脱ぐ、脱ぎます！」

再び学生たちの冷ややかな視線。

「バカ！ 脱ぎますとか大声で言ってんじゃないわよ！ 場所を考
えろ！」

「うう……要求呑んだ上に怒られるなんて……」

「メソメソするんじゃない！」

「済みません。それであの……一応お聞きしますがパンツってズボンのこと……じゃないよね、ですよね。ってことは下半身裸ってこと？」

「バツカね！ そんなことしたら即退学決定でしょ！ ノーパンでジーンズ穿けてこと！」

私はひそひそ声で発破をかける。するとあるうことが、淳はこの場でジーンズのベルトを外し始めた。私はもう一発頭を引っ叩いた。

「こんなとこで脱ぐなっつーの！ トイレでやれトイレで！」

私は顎でくいくいと指し示す。とぼとぼとトイレへ向かう淳の背中

を眺めながら、この後どうしよかな、と考える。パンツを脱がせた
だけじゃ面白くも何とも無いからね。

「ぬ、脱ぎました」

図書館でトランクスを広げてみせるチワワ。

「ふーん、茶と黒のストライプか。意外と普通だね。まあ見たこと
あるけど」

「も、もうよろしいでしょうか。何かスースーする……」

「いいわけないじゃない。あ、あそこでさ、ハサミ持って作業して
る人たちがいるでしょ？」

「え、どこ？」

「あの大きい机のそこ。コピーしたのを切り抜いたりしてるじゃな
い。あのコたちのところ行ってハサミ借りてきて」

「ハサミなんかどうするの？」

「いいからいいから！……あ！　ちよい待ち、やっぱ作戦変更。

こうしよう。まずあのコたちの前に座るでしょ？　で、ハサミを借
りるんだけど、そのときにこう言つて。『こんにちは、ボク、トレ
ンディ占い研究会の者なんですけど、よかったら皆さん占って差し
上げますよ』って」

「トレンディ占い研究会って……何？」

ゴメンね淳。私がモテるばかりに

「占い界の古い体質を打破して常に革新的な占いの方向性を探求、模索し続ける崇高な会よ」

「はあ……でもオレ占いなんてできないよ」

「最後まで聞いて。でね、当然『え〜？ 何占いですか〜？』って食い付くでしょ？」

「ま、まあ食い付く……かな？」

「大丈夫よ。人間のメスの九割は毎日の行動を占いで決めてるって統計が出てるんだから。そしたら自信を持って『パンツ占いです！』って答えて」

「ぱぱぱんつ占い！？」

「で、おもむろにパンツを取り出して、ハサミで細切れにするの。それを集めて両手の中に入れて、上下左右に大袈裟に振って、『キイエ〜！』って叫んで机の上に投げつける！」

「それで、何と云えばいいんでしょうか」

「ん？ 後は適当にアドバイスして差し上げなさい。今年中にアラブの石油王と結婚できるでしょうとか」

「そ、そんなことできるわけ……」

「別れよっかな〜」

「あります」

淳は重い足取りで、見知らぬ女の子たちの方へ向かった。声は聞こえないけど、動きを見る限りでは、言われた通りにやっているようだ。しかも女の子たちの反応もまんざらでもなさそう。そのとき淳の奇声が図書館中に響き渡った。

「うつくくくくく……ダメだ、ふ、腹筋が……肉離れ起こしそう……
うつくくく」

声を殺しての大爆笑ほど辛いものはないと、このとき初めて知った。真っ赤な顔になった淳が戻ってきた。

「もうダメだ、完全にドン引きされた。図書館の事務のお姉さんにも怒られたし」

「あ、淳まじでバカでしょ……うくくく」

「ひどすぎるよ……」

「で、でもさ、結構サマになってたじゃない。本物っぽかったよ」
「そ、そうかな？」

なに喜んでんのよ。

「あ、そうだ言い忘れてたんだけど、今日はこれからノーパンで過ごしてね」

「え、まじですか……」

「当然。飲み会に行く途中で新しいパンツ買ったりしたら……分かるわよね？」

アイツ本当にパンツ買わないのかなあ……買わないんだろうな、きっと。ようやく私から解放されて去っていく淳を見送りながらぼんやりとそんなことを考えた。

はーあ、でもどうするかな。バカ淳のせいでぼっかりと予定に穴が開いてしまった。今さらレポートを書く気にもならないし。しばらく図書館でぼーっと過ごしたが、何もしていないと時間が経つことの遅いこと。

何気なく手にした携帯を開く。綺麗な朝焼け。今朝、安藤さんから

送られてきた写真をさっそく待ち受けにした。安藤さん……こんなときこそ会いたかったけど、今日はバイトって言ってたしな。仕方ない、帰るか！ たまには早く帰って学生らしく勉強でも……お。

『やつほ。今日これから時間ある？ それとも淳くんとラブラブ？ もしヒマなら私とデートしない？ 久々に』

沙耶からだ！

『行く行く！ 今どこ？』

一気にテンションが上がった。急いで荷物をまとめて図書館を出ると、返信を待っているのがもどかしくて電話をかけた。

「もしもし沙耶？ まだ学校にいるの？」

聞くまでもなかった。携帯を持った手を振りながら、笑顔で近付いて来る沙耶が目の前に見えたから。

二人並んで夕焼けの街を歩く。

「へえ珍しいね、淳くんがドタキャンなんて」

「まあね、たま〜にあるんだよね、ワンシーズンに一回くらい」

「でも、ドSの亜季さんが、よくすんなり許した……わけないか」

「ふふふ、よくお分かりで」

「おおコワコワ」

沙耶とこうしてぶらぶらするのは本当に久しぶりだった。私は沙耶の夕日に照らされた横顔を眺める。沙耶は美人だ。卵形の顔は片手で隠れるんじゃないかと思うほど小さい。それでいて背は私より高

いから、本当にモデルみたい。

緩くウェーブした栗色の長い髪が白い肌によく合っている。きりつとした細めの眉の下に置かれた、黒目の部分が大きくて存在感のある瞳は、愛らしい小動物を思わせる。私はどつちかと言えば可愛い系なので（自分で言うな）、よく二人で一緒にいた頃は、男の子たちの間では密かに「亜季派」「沙耶派」に分かれていたらしい。

淳の話では、私と付き合っていることが知れ渡ったとき、男友達はしばらく口を利いてくれなかったし、知らない奴らから恨みの目で見られていたという。不幸の手紙も五、六通回って来たそうだ。ゴメンね淳。私がモテるばかりに。

「ん？ どしたの？ 何か付いてる？」

「ん〜ん、相変わらずお美しいなあって見とれてただけ」

そういえば沙耶ってずっと彼氏いないよな……美人過ぎると近寄り難くてかえって恋人ができにくいって聞いたことがあるけど、そうなのかな。

「おだてたって何にも出ないぞ！」

「あはは、で、どうしたの？ いきなり誘ってくるなんて」

「亜季が私に話を聞いて欲しそう〜な顔してたから。ま、電話で大体のことは聞いたけど、もっと色々吐かせてやろうかって」

「沙耶も怖い〜」

「まだまだ出てくるんじゃないんですか？ 隠し玉が。魔性の女、亜季さん？」

「ないない！ ホントにもうないって！」

見た目はお姫様みたいな沙耶だが、性格はさっぱりしていて言いた

いことはズバツと言うタイプ。

「それはそうと、どこに行く?」

「どうしょっか? 私は何でもいいよ。あっさり系でもガッツリ系でも」

「あ、じゃあさ……」

ストライクってボウリングじゃなくて野球

沙耶はその可愛い口で恐ろしいことを言った。安藤さんの働く店に飲みに行こうというのだ。

私はそういうのが極端に苦手だ。例えば道端で知り合いに出くわしたとしたら、顔を隠したり進路を変更したり、その辺のコンビニに入ったりして極力会うのを避ける。

会う予定がない人と街中で突然顔を合わせるのが凄く恥ずかしいのだ。人見知りをする性格ではないが、これは子供の頃から変わらない。

そんな私の気持ちなどお構いなしに、沙耶は強引に私を引っ張って電車に乗り込んだ。安藤さんの店は大宮にある。昨日の電話で店の名前を教えてしまったのは失敗だった。

でもどうせ場所までは分からないだろうと高を括っていたら、沙耶は携帯のグルメ情報を見て、あっさりと店の住所を突き止めてしまった。

「ねえ沙耶、ホントに入るの？」

店の前で及び腰になり駄々っ子のように動かなくなる私。

「何よ、ここまで来て。往生際の悪い子ね」

「ただだだってさ、やっぱ照れくさいし」

「おやおや？ そんな可愛いこと言っちゃって。コアクマ亜季さんの発言とは思えませんね」

お前の方がよっぽど悪魔だ！　と言おうとしたら沙耶はもう店の入り口を開けていた。仕方なく後続く。店員の威勢のいい声が私たちを出迎えた。まだ六時前で飲むには早い時間だったので、店内は空いていた。私たちは奥の個室へと案内された。

「なるほど。ここがイケメンシンガー安藤さんのバイト先ね。なかなかいい雰囲気だね」

「そうだね」

「そうだねって、来た事ないの？」

「ないない！　あるわけないじゃん、初めてだよ」

「ホントに？　一人で来るとか」

「ないない」

「安藤さんと来るとか」

「もつとないって！」

「じゃあ淳くんと……」

「さーや！」

「ウソウソ冗談。でもさあ、そんなに恥ずかしいかな？　私だったら全然普通に行っちゃうけど。むしろ恋人の働く姿をうっとり眺めながら一人で飲むのって良くない？」

「沙耶と違って私は繊細なの！」

「あーそうですか。で？で？　どの人どの人？」

沙耶は額に右手をかざし遠くを見るようなポーズを取った。大袈裟に首を動かして、露骨に男の店員を物色している。店員は沙耶と目が合うと、一応につこりと笑ってくれた。

こういうのを玉に瑕って言うんだろうな。この人、もう少しおしとやかにしてれば恋人も選びたい放題だろうに……ま、でもこんな気取らない性格だから私は好きなんだけど。

「あゝつと、安藤さんキッチンなんだよね。だからここからは見えないと思う」

「なゝんだ残念。じゃ、とりあえず乾杯しますか!」

和風モダンなインテリアの店内は、微かにジャズが流れ、適度に照明が暗く、落ち着いていて居心地が良かった。メニューは和風創作料理といった感じ。生ビールとお通しが運ばれてきた。

「よし、じゃあ乾杯! でもさゝ実際どうするの?」

「分かんない」

「見も蓋もない即答だな。で、ほんつとに両方好きなの?」

「ほんつとに両方好きです!」

「うわ、言い切ったよこの子は」

「沙耶はさゝそういうことなかった?」

「そういうことって?」

「だから二股……って分かってるクセに言わせないでよ!」

「あははごめんごめん。でも私は無いよ」

「言い切ったよこの子は」

「マネすんな。でもね、本当に無いよ」

「またまたゝそんなにお美しくいらっしやるのに? だけど彼氏がいても『この人いいなゝ』って思ったりはするでしょう?」

「それならしよっちゅう」

「告白されたりとか」

「それもしよっちゅう……あるかゝいつ!」

「あははは、でも実際そういうときってどうするの?」

「どうって、どうもしないよ。いいなゝって思っただけ目の保養で終わる。まあ好きな芸能人と一緒だね」

「あゝじゃあさじゃあさ例えばね、今、沙耶に彼氏がいたとします」
「うん。ってちよつとゝ何でいないって決め付けてるのよ」

「え？ いるの？」

「……いないけど」

「……その彼氏とは付き合って一年ちょっと」

「うん」

「超ラブラブの時期は過ぎたけど、まだまだラブラブ」

「う、うん？ どう違うんだろ」

「ダダダン！ そんなとき、沙耶の前に現れた一人の男！」

「お、盛り上がってきたね」

「そしてその人は何と、沙耶の理想のタイプど真ん中！」

「ほうほう」

「見た目はもちろん、中身も知れば知るほど160キロ剛速球のどストライク！」

「ストライクってボウリングじゃなくて野球なのね。まあそんな人いないと思うけど。それで？」

「そしてその人が熱い視線で沙耶に囁いた！ オレと付き合ってください！ 絶体絶命、さあどうする！？」

「うゝゝん難しいね…… ってそりゃあ亜季！ 全部あんたのことでしょうが！」

「そうなんだよね……」

「でもまあ実際そうなったら私も分かんないかもね」

「でしょでしょ！？ ここで一番の問題は、安藤さんが私のタイプど真ん中だったってこと」

「お、遂に相手のせいにしたぞ」

「だってだって安藤さんが別にそこら辺にいるフツーの人だったら私だってこんなことにならなかったわけだし」

「喜々として自分の方から誘いに乗ったことは棚に上げといてよく言うよね」

「それは言っちゃダメ」

「ど真ん中どストライクねえ…… そこまで言うんだったらさ、淳くんと別れなよ」

「だからそれが出来れば苦労はないわけですよ沙耶さん」

「じゃあもうどっちかしかないね」

「どっちかって？」

「二人と別れるか、このまま二人と付き合い続けるか」

「う……とうとう出ましたか、究極の選択」

「なぐにが究極よ。最初からどっちとも別れる気なんてないんですよ？」

「そう、そうなんだけどね……」

「淳くんと別れる？」

「イヤ」

「安藤さんに『やっぱり付き合えません』って言う？」

「ムリ」

「じゃあもうバレないようにするしかないね」

さすが沙耶、我が心の友よ……初めから全てお見通しってわけか。

「ま、いいんじゃない？ 長い人生、そんなときがあっても。花は短し恋せよ乙女っていうしね。ちやほやされるのも今のうちだけなんだし」

別にちやほやされたいわけじゃないんだけどね。それに、そういうあなたはなぜ恋をしないのでしょうか……

「沙耶……私、おかしいのかな」

「何よ突然」

「淳といるときはね、淳が可愛くってしょうがないんだよね。でもね、その後で安藤さんに会ったりすると私の身体の中は安藤さんで一杯になるの。どっちかに会ってるときは、もう一人のことを完全に忘れてるっていうか……」

「亜季」

沙耶の真剣な眼差しが正面から突き刺さった。今まで見た中で最も美しい沙耶の顔。その人間離れた表情に心臓が止まりそうになった。しかし。

「呼んでもらおっか」

「へ？」

「安藤さん」

神々しい表情はすぐにただの酔っ払いの顔へと崩れた。さっき見えた後光は……間接照明のせいだった。

女王様、証拠写真です

「ちょ、ちよつと冗談やめてよね！ 仕事中じゃない」

「いいじゃない少し顔出してもらくらい。今そんなに混んでないしさ。で、ついでに何かサービスしてもらおうよ」

「いいよ恥ずかしい。沙耶酔ってるでしょ」

そういえば私が話してる間、ひたすら芋焼酎飲んだな。しかも口ツクで。しまった、こいつ酒癖悪いのすっかり忘れてた……

「酔ってない酔ってない。あ！ すいませ〜ん！」

「も〜やめてっ〜！」

「いいからいいから任せなさい」

「はい、お待たせしました」

「お、あなた店長さん？」

呼ばれて来たのは金髪の短髪を逆立てた、ちよつと強面の二十代くらいの人だった。胸のプレートに「店長伊達」の文字が見えた。

「あのお安藤さん今日います？ 私たち彼の友人なんですけど、いたらちよつと挨拶したいな〜って思ってる」

「ああ！ 安藤くんのお友達ですか！ ご来店ありがとうございます……」

「休み？ 本当ですか？ 具合が悪いとか？」

急に不安が押し寄せて、思わず口を挟んでしまった。

「いえ、今日はもともとシフトに入っていないんです。何でも用事があるからって」

「用事って、バンドとかですか？」

私の気持ちを察したのか、沙耶は黙っていた。

「いや、詳しくは分かりませんが。せっかく来て頂いたのに申し訳ありませんね。あ、お詫びとっては何ですけど、お好きなデザートをサービスさせて頂きますよ。いつでもお申し付け下さい」

裏切られた気分だった。あの後私たちはすぐに店を出た。沙耶との帰り道、私は一言も喋らなかった。沙耶も黙って隣を歩いてくれた。

「じゃあね、沙耶」

「うん、じゃね」

別れ際、沙耶はホームで黙って両手を握ってくれた。

何で嘘ついたの？ 用事があるならそう言ってくればいいじゃない。私に言えないことなんだ。

電車に乗って一人になると嫌な感情が胃の辺りからふつつつと湧き上がってきた。安藤さんが今どこで何をしているのかは分からないけど、嘘をつかれたことが悲しくて、そして不安になった。一人でいると悪い事ばかり考えてしまう。もう少し沙耶と一緒にいればよかったかな……

『せっかくデザートただだったのに、亜季のせいで食べ損ねた（笑）』

沙耶にメールしようかな、そう思って携帯を取り出した途端にメー

ルが来た。さすが親友。以心伝心。

『そんなに食べたかった？ それならお持ち帰りにすればよかったのに』

『サービスなのにテイクアウトなんて恥ずかしくて出来るわけないでしょうが！』

他愛ないやり取りで、少し気が紛れた。そんなさり気ない気遣いをしてくれる沙耶が好きだった。何度か下らないやり取りをしてるうちに、家に着いた。寝ようとしたとき、最後の一通が届いた。

『大丈夫だよ。きっと安藤さんは亜季に余計な心配かけたくなかっただけだって。だから今度会っても問い詰めたりしちゃダメ・だ・ぞ！』

沙耶が顔の前で人差し指を立てて左右に振る姿が目には浮かんで、思わず吹き出してしまった。ありがと、おやすみ沙耶。携帯の画面に向かって呟く。しかし布団を被ったはいいものの、目が冴えて眠れない。そういえばアイツ、どうしてるかな。どうせまだ飲んでるんだろうな……よし。

「もしもし亜季？」

「遅い！ ワンコール、いや二分の一コールで出なさいよね！」

「ご、ゴメン、周りがうるさくって」

カラオケにでもいるのだろう、大音量で流れる歌に、マラカスとタンバリンが必要以上にシャカシャカ鳴っていて確かに騒々しい。淳の応対を見て私からの電話だと気付いたのか、周りの連中が冷やかし始めた。

「何だよ淳、女王様から電話か〜？」

「ヒュ〜ヒュ〜熱いねっ！ よっ熱い！ 赤道直下！」

「もう帰った方がいいんじゃないのか？」

「そ〜だそ〜だ！ 早くしないとまたムチとロウソクでお仕置きだぞ！ 覚悟おしっ！」

「まったく勝手な男どもめ。あんたらが強引に誘ったんでしょ。」

「淳」

「ど、どうしたの？」

「真也くんに代わって」

「え？ 真也？」

「そうよ、いるんでしょ、どうせ」

田村真也くんは私たちと同学年で、淳の一番仲の良い友達だ。初めて見たときの衝撃は今も忘れない。色白で金髪。ここまではいいとして、両耳に合計十個のピアス、瞼ピアスに鼻ピアスに舌ピアスに唇ピアスにヘソピアス……確認した部分だけでもこれだけある。とにかく穴だらけの男だ。

せっかく綺麗な顔なのにもったいない、と会うたびに思う。全てのピアスを外したら、かなり上品な顔立ちだろう。一見ハーフのような容姿は貴族を思わせる。まあ本物の貴族に会ったことはないんだけどね。

性格も見た目同様派手で、女の子をとつかえひつかえしているらしい。要するにチワワな淳とは真逆の人間なわけで、な〜んであんなヤツと気が合うのか全く以って分からない。男とは思えない生き物だ。

「ハイツ女王様！ ご機嫌麗しゅうございます！」
「やめなさいよね！ その女王様っての！」

私が淳にいつもムチャ振りをするので、そのドSっぷりを見ていつの間にか淳の男友達は私のことを女王様と呼ぶようになった。自業自得なんだけど。

「これはこれは失礼致しました女王様。いかがなされましたか？」

「……あのさ、淳のヤツ、ノーパンかどうか確認してくれる？」

「は？ 今なんと？」

「だ〜から、さっき学校で淳に今日一日ノーパンで過ごすように言ったの。で、ちゃんと守ってるかどうか確かめて」

「の、ノーパンですか……さ〜すが女王様」

「いいから早く！」

「かしこまりました！ 直ちに取り掛かります！ お〜い、お前らも手伝え！」

その直後、ぎゃ〜やめろ〜という淳の悲鳴と周りの男たちの歓声が聞こえてきた。

「淳お前スゲーな！」

「これって思いつきり放置プレイだぞ！」

「本物だ！ 淳、お前は真性のDMだ！」

「な、何という忠誠心……オレは感動した！」

盛り上がっている様子を電話越しに聞いて、本当に言い付けを守っている事が分かった。友人に秘密を暴かれて、恥ずかしくて困った顔の淳を思い浮かべると、ちょっと胸がキュンとなった。頭撫でてあげたいな。

「女王様、証拠写真です！」というタイトルと共に送られてきた写真には、壁に向かって両手について、ジーンズを下ろされてお尻丸出しの姿が写っていた。淳ったら、ホント可愛いんだから。

オミアイ？

『これから出かけない？』

日曜の朝、鳴り出した携帯を布団に潜ったまま手探りで開くと、安藤さんからのメールだった。今日は何だかダルくて誰にも会いたくなくて淳の「会いたい攻撃」もかわして一人部屋でごろごろ漫画でも読んでいようと思っていたのに。

無視しようかとも思ったけど、この前のこともあって、腹の虫も治まりきっていなかったので、本当は行きたくもなかったけど、「海に行きたい」って素っ気無く返信した。安藤さんは車を持っていないので、ドライブなんて出来ないことは承知済み。単に意地悪してみたくなったのだ。

それで「ドライブはちょっと無理かな……」って言われたら「連れてってくれないならもういいです」ってキレ気味の返事をしようと思っていたのだが、その思惑は見事に打ち砕かれた。

『あ、いいねドライブ！　じゃあ家まで迎えに行くから』

え！？　ウソ……と、とりあえず返さなきゃ。

『あゝ家じゃなくていいです。駅まで行きます』

さすがに実家の前まで迎えに来られるのはちょっと抵抗があった。淳の顔がふとよぎる。

『了解！　じゃあ一時間後に浦和駅で！』

正に想定範囲外。車はどこから？ 不意打ちしようとしたら完全に裏を掻かれた感じ。出かけるのが面倒だったけど、言い出しつペは私。行くしかないよね……ま、たまにはいいか。海なんてしばらく行つてないし。天気も良いし。それにこのままじゃ、モヤモヤしたままだし。

『着いたよ。ロータリーのところにいるから』

というメールが来たとき私はまだ髪にドライヤーを当てていた。寝癖が……

結局三十分の遅刻。別に当て付けてわけじゃなくて、だらだら準備してたら遅くなってしまったのだ。待たせてやれっていう気持ちも多少はあったけど。駅に着くと安藤さんが車の外に出て立って待っていた。

「おはよう」

「おはよう……ごさいます」

四月も下旬に差し掛かった快晴の空。この上なく気持ちの良い天候と相まって、いつもよりも爽やかさ三割増の笑顔の安藤さん。何だかそれにもイラツときて、ぶつきらばうになる。しかも結構待たせたのに文句の一つも言っていない。最近この人に振り回されてる気がするんですけど。

「車、どうしたんですか？」

先に話しかけるのはちょっと負けた気がして悔しいけど、一応私のリクエストなので聞いてみる。

「これ？ 親に借りてきた」
「ふうん……」

わざわざ実家まで取りに帰ったのか。私の気まぐれのために。こんなとき、嬉しそうにニコツて自然な笑顔が出来ればカワイイ女なんだろうな、なんてことを考えながら助手席に座った。滑り出した車の外は、いつしか見知らぬ風景へと変わっていた。

「亜季ちゃんどうしたの？ さつきからずっと黙り込んで。具合悪い？」

「具合悪かったら出かけません」

「だよね、はは……でもどうしたの？ 突然」

「何がですか」

「海に行きたいなんて」

「安藤さんは行きたくないんですか？」

「え？ そんなことないよ、オレも久々に自然と戯れたかったかな」
「なんて」

「ふうん、本当は私、行きたくないです」

「え！？ ちょ、ちょっとどういうこと？ せつかく車……」

「冗談ですよ。ほら、ちゃんと前向いて！」

困らせてみたくなった。安藤さんは、この前私が店に行ったことを知らない。あの日に何があったのかを。

「あゝそういえば私、金曜の夜、沙耶と飲みに行っただですよ」
「沙耶ちゃんて、友達なの？」

「そ。私の大事な大事な親友です。せつかくヒマだったのに安藤さんバイトだって言うから」

「こゝ、ごめんね」

「仕方ないから一人寂しく家で勉強でもしようかな〜って思ってた
らちょうど沙耶から誘いのメールが来て。で、久々のガールストー
ク！楽しかった〜」

「そっか、良かったね」

「で、行ったお店の店長さんが、ちよつと顔が怖かったんですけど、
話してみたらいい人だったんです」

「店長？」

「伊達さんって言ったかな、安藤さんの友達ですって言ったらデザ
ートサービスしてくれたんですよ〜」

「あ、亜季ちゃんまさか……」

「なかなかいい雰囲気ですね、あのお店。料理も美味しいし。今度
一緒に行きましょうよ」

「そっか……あの日、行ったんだ。ごめん」

「何で謝るんですか？ あ、何かやましいことでもあるんですか？」

「やましい、か。そうかもしれない」

安藤さんは前を向いたまま私を見ようとしない。あの、優子とかい
う派手で高飛車な元カノの顔と声が脳裏によぎった。安藤さんとあ
の女が抱き合ってキスしているところを想像して、頭に血が上った。
キレそうになる堪えて強がってみせた。

「ふうん、女の人と会ってたとか？」

「そっ……なるかな」

「そっか、じゃあヨリが戻ったんだ、良かったじゃないですか」

唇が震えて声が震えている。私は半分泣いていた。何であんな女と
……私のこと好きって言いたくせに。泣き顔を見られないように窓
の外に目をやる。流れてゆく建物が滲んできた。悔しいよ……

「ちよつと待ってよ亜季ちゃん、何言ってるの!？」

「だってそうなんですよ！？ 結局私より優子って人の方が良いんですよ！？」

みつともないな私。元カノに彼氏取られて、嫉妬して悔しくて泣いて叫んで……きつとひどい顔。でももう限界。もうどうでもいい。

「そうじゃないって！ 勘違いだよ！」

「もういい、降ろして！」

「お見合いしてたんだよ！」

え？

オミアイ？

お約束通り叫ぶのだ

「亜季ちゃんに黙ってたのは悪いと思ってる。でも余計な心配かけたくなかったから」

『きつと安藤さんは亜季に余計な心配かけたくなかったただけだって』
沙耶の言葉が甦る。私の頭は空白となり、きよとした顔で安藤さんを見詰めた。

「それにさ、おかしいだろ？ 前々から予定が決まってたからあの日はバイトに入らなかったんだよ？ わざわざ優子と日にち決めて会うなんて有り得ないって。二度と会う気もないし」

言われてみれば確かにそうだ。私のバイトしてるところも二週間前にはシフトの希望を出さないといけない。あの女に会うために、そんな前から約束するはずもないか。

「ヒック……じゃ、じゃあ安藤さん……ヒック……けっ結婚……しちゃうの？」

でももうダメだった。そうだとしても何でお見合い？ 訳が分からない。嫉妬とか不安とか切なさとか色んな感情が入り混じって、涙がとめどなく溢れてきた。

「するわけないって！ 何でそんなこと言うの！？ オレには亜季ちゃんがいるんだから、見合いで結婚なんかしないって！」

安藤さんは道路の端に車を止めた。私は泣きながら彼にしがみついた。オレは亜季ちゃんが好きだから、耳に口を寄せてそう言って、

優しく頭を撫でてくれた。もう声が出なかった。

涙と鼻水でぐちゃぐちゃの顔のまま、彼の胸で何度も頷いた。そして涙が出尽くすと、だんだん気分が落ち着いてきた。

「でも、どうしてお見合いなんかしたの？」

涙の跡が残る顔のまま、私は聞いた。だっておかしいよ。バンドマンでアルバイトの安藤さんがお見合いなんて。普通お見合いに選ぶ相手ってサラリーマンとか公務員とか……だよ。よく分かんないけど。何で？

「あのさ、オレの親父、会社経営してるんだ」

「え、お父さん社長さんなの？」

「うん。でね、いずれ後を継いで欲しいってずっと言われてたんだよ」

「何の会社なの？」

「うち、楽器屋なんだよ。安藤楽器って知らない？ 関東圏だけだけど、結構あちこちに店あるんだ。まあオレが威張れることじゃないけど」

「だから音楽やってるんだ」

「それは自分ではあんまり関係ないと思ってる。でも確かに子供の頃から楽器に触れてたのは大きいかな。で、そのお見合いの相手っていうのが大手の楽器屋の娘でさ。」

実はうち、経営苦しいらしくって。親父はそういう話はしないけど、やっぱり何となく分かつちゃうじゃん？ オレももう子供じゃないし。そこへ来てそんな相手から見合いの話だろ？ ああ、これは決定的だなって」

「それってまさか……」

「そう、政略結婚」

「今どきそんなのって……」

「古いつて思った？ オレもそう。一体いつの時代だよってね。でもさ、意外と根強い風習らしいよ。これまで自分たちを脅かしていたライバル会社が、次の日には親戚になってるんだから。赤字会社の経営者としてはこれ以上の安心感はないんだろうね」

「そんな……どうするの？」

「どうもしない」

「だってこのままじゃ潰れちゃうんでしょ？」

「そこは親父に踏ん張ってもらうしかないかなと」

「でも借金とか」

「赤字なんだから当然あるだろうね。どのくらいの額かは見当もつかないけど」

「お父さん、助けてあげないの？」

「亜季ちゃん、オレに好きでもない女と結婚して欲しいの？」

「そうじゃない、そうじゃないけど」

「親父もさ、無理にとは言わない、嫌なら断れって言ってたしね。それにまだ倒産するって決まったわけじゃないし」

さすがに私なんかが口を挟める話じゃない。

「そっか、そうだよね……それで、相手の人ってどんな人なの？」

「オレのファンなんだって」

「ファンって……バンドの？」

「うん、何だか知らないけど、最近はライブやると必ず見に来てくれてたみたい。まあ純粹に歌を聞きに來てたのかはちょっと疑問だけど」

安藤さんに自分をアピールするため……ってことか。

「いくつくらいの人なの？」

「ねえ亜季ちゃん、やめようよこんな話。オレもう忘れたいし」

私は相手のことが気になって仕方がなかった。しかし安藤さんはそれ以上、お見合いに関する話をしなかった。ハンドルを両手で握り締めたまま、真っ直ぐ前を見ている。

「行こうか、海」

二人の間に訪れた長い沈黙の後、いつもの笑顔でそう言った安藤さんは、私の返事を待たずに車を走らせた。

「亜季ちゃん、着いたよ」

ふへ？　つとだらしく開いた口のまま目を覚ますと、目の前に海岸があった。

「高速に乗って快調に飛ばしたところまでは覚えてるんだけど……ここどこ？」

「寝てた人には教えな〜い！」

意地悪そうな笑顔でそう言うと、安藤さんは車から飛び出して、海に向かって走り出した。

「あ〜〜！　こら待て〜〜！」

海岸、砂浜、波の音。遠くでカモメの群が飛んでいる。海水浴のシーズンはまだ先だ。人影はまばらで、春の穏やかな海はまるで私たちのために場所を空けておいてくれたかのようにだった。そして本当

に久しぶりに海を見た私は、お約束通り叫ぶのだ。

「亮介のバカヤロ〜〜〜！」

安藤さんの子供身ごもっちゃった

「へへへお見合いねえ」

「何でそんな平然としてるの!? お見合いだよお見合い、結婚寸前なんだよ!？」

海から帰って来ると、安藤さんはバンドの打ち合わせがあると言うので五時頃別れた。事の真相が分かり、泣いて喚いて海で叫んで少しはスッキリしたけど、やっぱり相手が気になる。

沙耶に電話したらすぐに掴まったので出てくるようにと強制命令。こんな状況、誰かに話さずにいられますかっ！

「でも断ったんでしょ? じゃあいんじゃない?」

ドトールでアイスコーヒーにガムシロップを入れながら他人事のような受け答えにちよつとムツとした。ストローでぐるぐるかき混ぜる沙耶の指先を見詰める。

「そうだけどさ……」

「そうだけどさ……」

「もう! マネすんなって! 私は真剣に話してるんだから!」

「ごめんごめん。でもそんなに気になるの?」

「当たり前でしょ! しかもこれは単なるお見合いじゃなくて、安藤家の命運がかかってるんだよ? 安藤さんは断るって言ってたけど、いよいよ経営が危なくなったらお父さんを助けるために、不本意ながら結婚する可能性だってあるんだから」

「いいんじゃない? 結婚したって会えなくなるわけじゃないし。隠れて会うのもスリルがあって、それはそれで楽しいと思うよ。そ

したら亜季、不倫だね。不倫で二股か……うんうん、ドロドロの昼ドラ路線まっしぐらだね。これで亜季が安藤さんの子供身ごもっちゃった日にゃあ完全に修羅場だな。そしたら電話くれる？ いっぺん生で現場見てみたかったんだよね」

「さ……や……お前というヤツは……！」

こいつは本当に事の重大さが分かっているのか？ 私はコーヒーカップを掴むと、沙耶の頭の上に持っていた。沙耶の顔が引き攣る。

「じよ、冗談だつてば。落ち着いて。ね？ それホットコーヒーだから。淹れたてだから。熱いから。私火傷しちゃうよ？ ね？ 顔に大火傷とかシャレになんないしお嫁に行けなくなっちゃうし。テーブルに置こうね。そ……とそ……と……そうそう。迷惑とコーヒーは人にかけてちゃいけないって言うでしょ？」

「……ん？ どっかで聞いた台詞だな」

「和哉様」

「あ、イエモンね……って誤魔化すな！」

沙耶は吉井和哉というミュージシャンの熱狂的なファンである。今はソロで活動しているらしいが、彼が昔やっていたバンドのCDを毎日無理矢理聞かされていたあの頃が懐かしい。

「はいはいスマンスマン。でもさ、安藤さんが話さないんだったらこれ以上の情報は得られないんでしょ？」

「ん……そこなんだよね……あっ！ そういえば安藤さんのファンだつて言ってた」

「誰が？」

「だからその見合い相手が！」

「ということはライブに行けばいるかもしれないってことが……で、次のライブっていつなの？」

「えつとね、次は確か月末の日曜って言ってたから、来週だね」

「何時？」

「六時」

「六時って朝……なわけないよね。夕方が、夕方はちよつとな……」

「さーや！ 行かないとは言わせないわよ！」

「わ、分かったから！ コーヒー置けって！ 行きますよ行くから

……そうか淳くんはいつもこんな仕打ちされてるのかあ。可哀想に
ねえ。あ、でも彼の場合DMだからむしろ喜んでる……？」

「んん！？ 何か言ったか！？」

「いえいえこつちのことです……おおコエー。でもさ亜季、会って
どうするの？」

「え？」

「『あたしい亮介のイマカノだけどおあんたさああたしのチヨラ
ブリーなマイハニーにお見合いトカ申し込んだらしいじゃなあい
？ イイ度胸し てる わ ね ！』とか言うわけ？ 胸倉掴み
ながら」

「沙耶って……面白いね」

「どういたしまして。でもホントにどうするつもり？ そもそもど
うやって見付け出すの？ 名前も知らない顔も知らない人なんでし
よ？」

「うん」

「で、ライブハウスでしょ？」

「そう」

「人が一杯で大盛り上がり」

「まあ、そこそこ」

「おまけに暗いしね。ステージ上がってマイク奪って『亮介のお見
合い相手の人！ 上がってこいやあ！ ビビってんじゃねえぞ！』
ってシャウトしちゃう？」

「……沙耶……どうしょ……」

「だからさっきから聞いているのに」

結局見合い相手を探し出す方法は閃かず、私たちはドツールを後にした。家に着いてからも再びこの難問に取り組む。

この前ライブに来ていたお客さんは、五、六十人といったところだ。まあ多く見積もっても百人。今回仮に百人来たとして、そのうち半分は男だから、ターゲットは五十人の中にいるはず……いや、よく考えたらそんなに来ないかも。

うん、来ない来ない。いきなりそんなに人気赤丸急上昇するわけじゃないし。五十人だな。五十人として女が半分の二十五人。そのうち私と沙耶を除外して二十三人。その中で明らかに金持ってなさそうな女が十人。女子高生が十人。

お、ということは残り三人の中にターゲットがいるということに……ならないよね。という計算だ。アホか、無意味にも程がある。私は書き散らしたメモを丸めて捨ててベッドに潜り込んだ。

チワワアイズでお願いされて

月曜日、未解決の問題を抱えたまま学校へ向かう。放課後になると例の如く淳が擦り寄ってきた。しかも何か企んでる顔で。

「亜季亜季……来週の日曜日空いてる？ うん空いてるよ。ホント？ 良かった〜じゃあ決まりね！」

「ちよつと、何一人で猿芝居してんのよ」

「ふふふ何を隠そう来週の日曜日は……じゃじゃ〜ん！ 我らがビーグルスのライブなのです！」

淳が得意気に掲げたCDには、「ビーグルス」という文字が見て取れた。安藤さん、CDあるんなら貸してくれてもいいのに……チワワにちよつと嫉妬する私。

「我らがって、いつの間にそんなに好きになったの？」

「いやあ、浩介にアルバム借りただけだね、これが良いのですよ亜季さん。で、すっかりハマっちゃって」

「浩介……って確かバンドやってる人の兄弟だっけ？」

うわあ、あまりの白々しさに自分で言っつてて鳥肌立っちゃった。

「そうそう。ギター兼ボーカルの安藤亮介の弟。カッコいいよね〜ビーグルス。曲も良いけど何といっても安藤さんの声が最高！ それに結構男前だし。これはもうブレイク間違いなし！」

ドッ……クン。

淳の口から「安藤さん」という単語が出るたびに、心臓が二倍くら

いに膨れ上がった。

「そ、そっか。良かったね。淳ってあんまり音楽聴かないからヘンなヤツってずっと思ってたんだけど。そっかそっかよかったよかったあゝよかった。じゃ、そういうことで……」

「ちよちよちよつと亜季！　どこ行くの？」

「え？　バ、バイト」

「あ、今日はバイトの日か。で、いいよね？」

「ん？」

「ん？　じゃなくって！　ライブライブ！　行くでしょ？」

「あゝその日はちようどお腹が痛くなる予定で……」

「何それ？　さては亜季……何か隠してる？」

「かかか隠してなんかないわよ！　ただそろそろ生理が来そうだなゝって思っただけ」

「ふゝん……じゃあ……ダメ？」

う……キタゝゝ！　久々に淳の「ダメ？」攻撃！　この顔で見詰められると絶対に拒否不可能。反則だ。こいつ反則技使いやがったな。分かっててやってたら許さんぞ……

「い、いいよ」

「ホント！？　ヤツタゝゝ！　亜季とビーグルス、ああ楽しみだなあ」

「ええ！？　淳くんも来るの？　どうすんの？」

バイト終了後、沙耶に報告。予想通り少々ご立腹です。

「だってさ、あんなに嬉しそうに誘ってくるからつい、ね」

「何が『つい、ね』よ。どゝせチワワアイズでお願いされてキュン

死にしたんでしょうが」

「へへへよくお分かりで……」

「笑ってんじゃないわよ。じゃあ今回はお見合い相手探しは無しってことで。じゃね」

「ちよちよつとお沙耶!」

「当然でしょ。それとも何? 淳くん連れまわして三人で安藤さんの結婚相手探すわけ? もう意味分かんないし私関係ないし」

「結婚相手じゃなくってお見合い相手!」

「どっちでもいいけどさ、そもそも淳くんとライブ行く時点でアウトでしょうが。一緒のところ見られたらどうすんの?」

「既に一回見られてますけど……」

「え? そうなの?」

「うん。初めて行ったときも淳と一緒にだったから」

「それで安藤さんに何て言ったの?」

「学校の友達って」

「まあそりやそうだわね。どっちにしても修羅場に付き合わされるのはゴメンですからね!」

「そんな〜あんなに修羅場見たがってたのに?」

「あのねえ、本気でそんなこと……じゃあジャンジャンやっちゃってよ! 一部始終カメラに収めてあげるから」

「そんなこと言わないでえ。あ! じゃあこうしようよ。淳は沙耶の彼氏ってことで」

「……は〜もう寝るわ。じゃね」

「わ〜! ウソウソ冗談冗談待って待って!」

「亜季あんなねえ。二人とも手放したくないんならもうちよつと慎重に行動しなさいよね」

沙耶が怒るのも無理はないか。確かに状況は危険な方向に進みつつある。まだゆつくりとではあるが私は確実に暗黒の渦の中心に吸い寄せられている。

しかも淳は安藤さんの弟と友達関係にあるのだ。ビーグルスの熱狂的なファンになってしまった今、淳と安藤さんが直接言葉を交わす日もそう遠くはないのかもしれない。

ただでさえ綱渡り状態だったのに、今や渡る綱はタコ糸ほどの細さしかなく、いつ切れてもおかしくはないのだ。

「あ、そういえば淳くんて安藤さんの弟と友達なんですよ？　淳くんに頼んでその弟にお見合い相手のこと聞いてもらうとか」

「それこそ思いつきり怪まれるでしょうが」

「とにかく淳くんと一緒にライブに行くのは極力避けたほうがいいわね」

沙耶の言う事は正しい。ライブに行かなければ少なくとも淳と一緒にいるところを安藤さんに見られることはないのだから。でも、私は淳のことも好きなのだ。好きな人が喜ぶ姿は私の幸せでもあるわけで

……

「つーかさ亜季、そういうときってどういう心境なわけ？」

「そういうとき？」

「恋人二号が目の前で歌ってるのを、隣にいる恋人一号と一緒に聞いているとき」

「何よ一号二号って……ロンドンブーツじゃないんだから」

「あ！　淳と『亮』介……そうか！　そういうことなのか！」

一人激しく合点承知。電話の向こうでしきりに頷く沙耶のしたり顔が目につかぶ。いやいや関係ないし。一号二号はあなたが言い出したんでしょうが。

「目の前にも好きな人、隣を見ても好きな人。そんな状況ちょっと想像できないんだよね」

「私だって分かんないよ」

「だって一回淳くんとライブ行ってるんでしょ？」

「あの時は安藤さんが出てくるなんて知らなかったんだもん。ひたすらびつくり」

「ふ〜ん、じゃあ幸せ二倍スリルも二倍、計四倍も人より楽しい人生なのか」

「何が四倍よ、バカ。私だってね、好きで二人と付き合ってるんじゃないんだから」

「はいはい。それで？」

「ライブには……行く」

「行くの？ 本当に？ 大丈夫？」

「どっちにしたって安藤さんにも誘われてるし。それに淳といところ見られたって平気だよ。アイツ、すっかりビーグルスのファンになっちゃったからさ、友達として純粋に一緒に聞きに行っただけって言えば問題ないよ」

「あつそ。じゃあお見合い相手は？」

「まあそれは……諦めるか」

「それが賢明だね。下手な詮索はしない方が身のためよ」

「沙耶はどうする？」

「もちろん行くよ」

「え、さっきは散々行きたくないって……」

「それ〜は、淳くんがいるのにお見合い相手探すのが嫌だったから！ 私だって亜季の恋人が歌うところ見てみたいしね」

「じゃあ三人で行くってことでいいかな？」

「あ〜それでさ亜季、ちょっとお願いがあるんだけど……」

沙耶の声のトーンが急に変わった。今までの勢いは完全に陰に隠れてしまっている。どうしたのかな？

女王様の真空飛び膝蹴り

「あ、淳くんてさ、あの〰〰彼と仲良いよね」

齒切れも悪いし。

「彼？ 彼って誰？」

「誰って……真也……くん」

「！ ま……さか沙耶……」

「ちちち違うの違うのちよっとどんな人かな〰〰って思っただけで……はは……」

沙耶ほどの洞察力はない私だが、何となくもう分かってしまった。

「好き……なの？」

「は、はい……」

「ままままじで〰〰！」

「こ、鼓膜が……」

ああ、許されることなら今この瞬間の、友に秘めたる恋心を打ち明け、その恥ずかしさに耐え切れず、耳まで桃色に染まった沙耶の顔が見てみたい！ あ、いつでも憎たらしいまでのクールビューティを崩さない沙耶の、恋を語る乙女に変わったその顔が！

私はこの話題を、電話ではなく直接会って話さなかったことを激しく後悔した。けどま、いつか。とにかく続きを聞こう。

「真也くんて、真也くんだよな！？ 穴だらけの」

「穴だらけって……そ、そうだよ！ 悪いんですか！ いけないん

ですか！」

「お、開き直ったよ、この子は」

こいつはまさに寝耳に水。晴天の霹靂。藪から棒で窓から鑢。ホリエモンもびつくりの想定外のまさかの展開。よりによってあの真也くんのことが好きだとは。どこがいいんだろ？

「女グセ悪いらしいから絶対に止めた方がいいよ！」って言おうと思ったけどね、二股女の私が言ったところでね、説得力無いしね……

「亜季、分かてるだろうけど、私の気持ち、真也くんにはゼッゼッタイ言っちゃダメだからね！あと淳くんにも！」

ライブ前日の夜、沙耶にしつこく念を押された。はいはい、分かっていますって言われなくてもそんなこと。

当日。私たちはビーグルスの本拠地である北浦和のライブハウスの前で、直接待ち合わせることにした。私と沙耶が行くと、既に淳と真也くんが先に来ていた。

開始前からテンションMAXの淳は、どこで手に入れたのか、ビーグルスのロゴと、トレードマークのビーグル犬のシルエットがプリントされた、真っ赤なTシャツを着てきていた。おまけに鉢巻まで締め上げていて、一緒に仲間だと思われるのはかなり恥ずかしい状況だ。一体何が彼をここまで変えてしまったのか？

「よっしゃ〜！何だかよく分からないけど我が校のビーグルスファンが一気に四人に増えました！ここは一つ、チームの結束力を高めるために気合の掛け声を……」

「やめんかバカモノ！」

公道で騒がしくする淳に対してキレた私は、本能的に飛び蹴りをヤツの背中に食らわしていた。

「うつ……いつて」

「淳お前はバカか！ みんな見てるでしょ！？ こんなところで大声出すんじゃないわよ、全く、恥ずかしいったらありやしない」

「ご、ゴメン……」

肩を叩かれて振り向くと、沙耶の苦笑いの顔があつた。

「亜季、亜季の方が声大きいって。しかも飛び蹴りなんかするから人が集まってきたよ」

はっ……沙耶の言葉で我に返る。本当だ。私たちの周りには人だけが出来ている。

「す……スゲー……公衆の面前で予告無しのいきなりの女王様の真空飛び膝蹴り！ ああ、生きているうちにこんな間近で噂のプレイを見れるなんて……光栄です！ 女王様！」

ついでに調子に乗った真也くんが地面に膝を着き、両手を合わせて私を崇め始めた。あまつさえ目にうつすらと涙まで浮かべている。それに釣られて全く知らない人たちも数人、見よう見真似で膝を着き始めた。

「ちょ、ちょっと真也くん！ やめてよね！ い、行くよ！」

恥ずかしさから逃れるように、私は人の輪を突っ切ってライブハウスへ入っていった。開演までは少し時間がある。地下の狭くて暗い

空間。ステージ上の黒くて大きな四角いスピーカー。独特の雰囲気
に慣れるにはもう少し時間がかかりそう。

前に来たときより観客は増えている気がする。それでも百人はいないけど。お見合い相手探しを諦めきれない私は、それとなく女性客を観察してみたが、さっぱり分からなかった。

「よおおおし、最前列行くぞおお！」

復活した淳は、右手は拳を作り高く掲げ、左手で背中を摩りながらずんずんと人ごみを掻き分けてステージの真ん前に陣取った。仕方なくついていく私たち三人との温度差は相当なものだろう。是非ともサーモグラフィでご確認頂きたい。

それより沙耶の様子がおかしい。私に飛び蹴りを注意してから一言も喋っていない。好きな人を前にして緊張してるのは分かるけど…
…こんな不安そうな沙耶は初めてだ。

「ちょ、ちよつとトイレ行ってくる」

「あ、待つて！ 私も行くから」

今、沙耶を一人にするのは心配だ。中へ中へと流れて来る観客に逆行するように出口を目指す。

「はあ……」

トイレに行くと洗面台に手を着いた沙耶が大きく溜め息をついていた。

「大丈夫！？」

「う、うん平気」

「ホントに！？ 顔真っ青だよ、どうした？」

「ちょ、ちよつと戻しちゃった……はは……」

「ま、まじで！？ 今日にはもう帰ろうか？」

「いいよいいよ、せつかく来たんだし。みんなに迷惑かけたくないし」

「そんなこと言ってる場合じゃないでしょ！ 身体の方が大事！
ほら、歩ける？」

私は沙耶の左腕を肩に回して上体を起こした。近くで見ると本当に青白い顔。

「あ、ありがと。でも、ホントに大丈夫だから……行こ？ そろそろ始まつちゃう」

「沙耶……」

「大丈夫大丈夫。吐いたらスッキリしたから。ほら、もう元気元気。それに、せつかく真也くんに会えたんだし」

「分かった。でも具合悪くなったらすぐに言っただよ？」

沙耶を軽く支えながら会場へ戻ると真也くんが入り口に立っていた。沙耶の顔にまた緊張が走った。

「どうしたの？」

「いや、一応一緒にいた方がいいかなって思っただけ。あのバカが最前列で場所空けてくれてるみたいだから」

そついうと真也くんは、私の腕を掴んで観客を押し退け、一番前まで連れて行ってくれた。ああ、沙耶ゴメン。沙耶の腕を取らせるべきだったね……ステージのすぐ前では、淳が威嚇するゴリラよろしく回りに睨みを効かせて四人分のスペースを確保していた。有難い

やら恥ずかしいやら。

ドストエフスキーがお気に入り

「こんばんは〜どうも！ ビーグルスです！ 今日に来てくれてありがとうございます！」

この前と同じ台詞でライブが始まった。

「ウアアアオウ！ イエツフ〜！」

初っ端から全開の淳は、叫びまくって歌いまくってヘンな動きで踊りまくってる。歌詞も全部覚えていられるらしい。安藤さんはとくに私たちに気付いているが、淳の盛り上がり方が気に入ったのか、機嫌良く気持ち良さそうに歌っていた。

真也くんは……そこそこノッてるようだ。沙耶は……ホントに大丈夫か？ そういう私は……何だかとても冷静だ。

「目の前にも好きな人、隣を見ても好きな人。そんな状況ちょっと想像できないんだよね」

沙耶の言葉を思い出す。

「そういつときってどつという心境なわけ？」

その答えは、「もう一人の自分がいるような、変に冷めた感じ」。

「イヤ〜もう最っ高！ な？ な？ 真也、良かっただろ？」

ライブの後、私たちはそのまま近くの居酒屋へとなだれ込んだ。当然、淳のテンションだけ異常に高い。「興奮冷めやらぬ」を絵に描いたよう。テーブル席に通され、私と沙耶が並んで座り、向かいに淳と真也くん。沙耶は相変わらず黙り込んでいる。大丈夫かな……

「でもあれ音デカすぎだろ。歌はまあまあ上手いけど」

暑苦しく迫る淳に、真也くんがシレつと答える。まじまじと見ると真也くんの顔は本当に凄い。口を開けるたびに唇から耳に繋がったチエーンがぶらぶらと揺れた。飛行機に乗るときどうするんだろ……

童顔チワワな淳とハードでパンクな真也くんが肩を叩き合って普通に喋っている光景は、なかなかの見物である。二人に見とれていると、隣でドン、とジョッキを置く音がした。げ、沙耶、まさかのー気飲み！？ 体調悪いんだから無理しないでよ……

「あゝあのさ、真也くんて、普段どんなの聴くの？」

おお！ 沙耶、アルコールパワー注入で復活か？ ガンバレ……！

「オレ？ オレはね、クラシック専門」

「ク、クラシック！？」

私と沙耶は同時に叫んでしまった。どこをどう見ても、この男からクラシックという言葉は出て来ませんが……ヘヴィメタル、ハードロック、ハードパンク（ってあるのかな？）、とにかく家の中でエレキギター掻き鳴らして壁に蹴りを入れてる姿しか思い浮かばなかった。

それはいいとして、遂に沙耶と真也くんのトークが始まったのだ。

いいこと沙耶、ナポリの職人が操るピザ生地のように、何とか話題を広げて伸ばして繋げるのよ。

「そうなんだよねー沙耶ちゃん、コイツさあ、こんな顔ジャラジャラのクセしてさあ、クラシックしか聴かないんだよねーおかしいでしょあはははは。今はねードストエフスキーがお気に入りらしいよ」

淳、貴様……何でお前が答えてるんだっつ！ ホンツと空気の読めないヤツ！ しかもドストエフスキーってそりゃロシアの文豪だろっ！ それっばい名前言えば良いってもんじゃないぞ！

私は渾身の眼力でバカ淳を睨む。しかし舞い上がるヤツには全く効果がない。仕方ないか。ライブ直後で昂ぶっている上に沙耶の気持ち知らないんだしね。しかもあの様子じゃ黙りそうにないし。よし、ここは一つ。

「あ、アイタタタタ……」

「どうしたの亜季？」

「何だかお腹が急に……アタタタ」

「大丈夫？ あ、ひょっとしてこの前の予言が的中!？」

「予言って何だよ」

真也くんが訊ねる。淳まさかお前……

「いやね、この前亜季にライブに行こうって誘ったら、その日はちようど生理……むぐつもがっ!？」

私はテーブルに身を乗り出すと、咄嗟に淳の口を押さえ込んだ。ジョッキが倒れたが、幸い空だったので被害はない。

「亜季！？ どうしたの？」

「あ、あはは、な、何でもない。淳、私もう帰るから送ってくれる？」

「え？ 帰るの！？」

「淳……あなたの愛する彼女がこんなに苦しんでるのに……じゃあいい。一人で帰る」

「わわわ分かった分かりましたよ。じゃあ沙耶ちゃんに真也、亜季を送ってきます」

淳は渋々立ち上がると、私の肩に手を回した。

「女王様、お大事に……」

「亜季……」

半ば呆然と私たちを見送る沙耶と真也くん。心配そうに私を見る沙耶に、男たちに気付かれないように片目をつぶってみせた。

「淳あんたねえ、みんなの前で生理とか言ってるじゃないわよ！」

居酒屋を出て少し歩いた後、八つ当たり気味に叫んだ。自分でもびっくりするほどの声の大きさに、道行く人が振り返る。私、酔ってる？

「え、違うの？」

「合つてるとか違うとかそういう問題じゃないでしょ！ 全く、デリカシーってもんが無いのか！」

「ごめんね……それよりさ、亜季」

「何！？」

「凄く……元気そうに見えるんだけど、お腹は？」

あ、仮病使ったことすっかり忘れてた。

「……もう治った」

「ホント？　じゃあ今から戻る？」

「あのさ、淳」

ダメだ。これ以上は隠し通せない。それに沙耶を真也くんに合わせてるには、まだ淳の協力が必要だ……と思う。おせっかいかな、私。ぶらぶらと歩いていると、公園が見えてきた。私は先に歩いて噴水の傍のベンチに腰を下ろした。それに倣って淳も座る。

「沙耶さ、好きなんだって。真也くんのこと」

「え……ええ〜！？　ほほほホントにいい！？」

大袈裟だな。あ、私の方がもっと驚いたか。

「あ、そっか。だから亜季、今日はみんなで行こうって言ったんだね」

「そういうこと」

「でもさ、沙耶ちゃん、せっかく真也に会えたのに元気なかったね」

「何かね、凄く緊張してたみたい」

「そっか〜そうなの？。でもな〜彼女いるんだよね、アイツ」

「そうなの！？　ってまあ別にいてもおかしくないけど」

「でも大丈夫。もうすぐ別れるみたいなこと言ってたから。だから沙耶ちゃん、タイミング的には悪くないと思うよ」

「そうなんだ。あ、あのさ淳、ちよつと小耳に挟んだんだけど、真也くん……その……激しいの？　女の子のこと」

親友の彼氏になるかもしれない男だ。あちこち摘まみ食いするようではお勧めできない。私には真相を知る権利がある。

「激し……ってな何言い出すの亜季!？」

「どうなの？ 違うの？」

急に淳は立ち上がり、なぜか動揺し始めた。ベンチの前を行ったり来たりして落ち着かない。やっぱり相当の女好きなのだろうか。

明日絶対筋肉痛

「ち、違っつてこともないけど……ま、まあオレに比べれば激しい方なのかな……た、確かに男同士集まって酒が入ればそういう話もするよ？　するけどさ、実際見たわけじゃないから自慢っていうかかなり誇張してる部分はあると思うんだよね。」

ほら、男って子供の頃から相手より優位に立ちたがる生き物だし。でもさ、そういうのって激しさよりも、いかに愛情持って出来るかが重要なわけで、結局は愛だと思うんだよね、うん、そうそう愛だよやっぱ愛」

「……何の話？　噂では真也くんは色んな女の子にちょっかい出してるって聞いたんだけど、実際はどうなのって聞いただけなんだけど？」

「え？　あ、ああ！　そ〜ゆ〜ことね！　そっかそっか、ええとそれはですね……」

「どっついうことだと思ったの？」

私は立ち上がって作り笑顔で淳に詰め寄る。

「え？　やややもちろんそっついうことだと……」

「淳くん？」

「は、はい」

「そっついう話、するんだ」

「どどどっついう話でしょうか」

「自分の彼女とどんなエッチしてるとか、身振り手振りを交えて微に入り細をうがって友達に話すんだ」

「そ、それはですね……」

「私とどっついうコトしてるかっていうのも当然話してるんだよねえ」

？」

「いや、その、お、オレは聞く方専門というか……」

「あゝっしゝ分かってるわよねゝ」

「あ、亜季……許して……」

直立不動で怯えた顔の淳に、私はにつこり可愛く微笑んで言った。
手の平で顔の輪郭を撫で回す。

「今日はどんなことしたい？」

「どんなことってそんな……亜季、目が笑ってないよ」

「どゝしよっかなゝゝお、あそこのベンチにラブラブなカップルが
いますねえ」

「ラブラブっていうか、何か凄い格好になってるよ……明日絶対筋
肉痛だなあれは」

「そう、春の夜の公園は恋人たちを燃え上がらせるのよ」

「じゃ、じゃあオレたちも……う、いってゝ」

調子付いて近付けてきた顔に平手一発。

「淳、あの公然猥褻罪スレスレのカップル、あの人たちに聞いてき
て」

「聞くって何を？」

「私ね、今とつてもラーメンが食べなくなっちゃった」

「じゃあこんなところにいないで早くラーメン屋に行こうそうしよ
う。さあさあ亜季さんどうぞこちらへ」

「ちょ、ちよっと、勝手に引っ張るな！」

「でも……」

「でもない！ 誰かさんのせいで居酒屋にいられなくなっちゃ
ったからね。お腹空いたの！」

「そんな、オレは何も……」

「だから、この辺に美味しいラーメン屋ありますかって聞いてきて」
「え？」

「人の話聞いてる！？ あの猥褻物陳列罪カップルに美味しいラーメン屋の場所聞いて来いって言ってるの！」

いよいよ盛り上がりを見せつつあったカップルだが、私たちのやり取りに気付いたため、乱れた着衣を整えると、そそくさと退散してしまった。

「ああ〜ほら〜淳がもたもたしてるから逃げちゃったでしょ！ 卑猥カップルが」

「亜季が大声出すから……」

「まあいいわ」

「え？ いいの？ いや、やっぱよくないです！」

「そお？ 私がいって言ってるのに？」

「だってその続きは『淳と別れるから』って言うんでしょ？」

「そうよく分かってるじゃない。じゃあどう責任取るつもり？」

「ら、ラーメン奢ります。しかも入った店で一番高いヤツ」

「一番高いラーメンねえ……ま、許してやるか」

「ホントに!？」

「うん、じゃあ電話して」

「へ？」

「へ？ じゃないわよ。奢ってくれるんでしょ？ ラーメン。早く電話して頼んでよ」

私の話が良く分らないのか、淳はきょとんと首を傾げたまま突っ立っている。

「淳……頭の悪い子は嫌いよ」

「な、何か口調まで女王様っぽくなってきたよ亜季」
「あそこを見なさい」

私は公園の外を指差した。大通りを挟んで建っているビルの一階に、電飾の派手な一際目立つ飲食店がある。

「本格中華パルミジャーノレッジャーノっていうお店があるでしょ？」

「う、うん。何か物凄いイタリアンなネーミングだね」

「あのお店に電話して」

「電話番号なんて分からないよ」

「携帯で調べる！」

「は、はい！」

「で、出前頼んで」

「ま、まじで……」

「まじで」

「ここに？」

「決まってるでしょ！ この公園のこのベンチに届けさせなさい！」

「ははははいいい！」

淳は本当に番号を調べて電話をかけ始めた。

「うつ……ダメだった亜季……『出前はしてません』の一点張りで……だから『すぐ向かいの公園なんです』って言ったら、『ふざけんな！ 公園なんかに出前するかボケえ！』ってボローニヤ訛りで物凄い剣幕で……」

「ダメねえ淳ちゃんは。そんなバカ正直に言っても断られるに決まってるでしょう？」

「じゃあ何て言えば……」

「そおねえ例えば……『たった今彼女が車にはねられて死にそう

なんです！ もう息も絶え絶えで……救急車も間に合いそうにないんです。せめて最後に彼女が大好きだったあなたの店のラーメンを一口でも食べさせてあげたいんです。だからお願いです！ ここまで持って来て下さい！」とかなんとか

「そんな……そんなこと言えるわけないじゃないかああ！」

ど、どうした淳！？

ホテルでしょ？

「亜季が死にそうなんて、そんな悲しいこと例え冗談でも言えないよ！」

その場で号泣してしまった淳を見て、私の胸は締め付けられた。

「ごめんね」

私は淳をそっと抱きしめた。頬から顎を伝って落ちた彼の涙が私の髪を濡らす。あんな冗談でも私のために涙を流す淳に、こんなにも想われている私は、幸せとしか言いようがない。

「ラーメン、食べに行こっか。奢ってあげる」

「ホント!？」

泣きながら笑ってる。変な顔。本当に子供みたい。

食事をした後、手を繋いで駅まで歩く。改札を抜け、ホームへ続くエスカレーターの途中で私の乗る電車が来てしまった。駆け降りようとしたその瞬間、淳が繋いだ手に力をこめた。

ギリギリまで一緒にいたいんだね。エスカレーターの段差でちょうど私の顔と淳の顔が同じ高さになっている。私は目の前の唇にそつと自分の唇を触れさせた。

「じゃねー！」

ちょっと驚いた顔の淳に、にっこり笑うと私はそのまま駆け下りて

閉まりかけた電車に飛び乗った。

沙耶、上手くいってるのかな……

淳と別れて一人になると、急に沙耶のことが心配になってきた。沙耶は真也くんとともに喋ったのは今日が初めてだし、顔を見ただけであんなになっちゃうくらいだから、本当ならあのまま四人で楽しく盛り上がった方が良かったのかな。

そしてまた、今日みたいにみんなで出かけて、少しずつ親しくなっていく方が自然だろう。気を利かせたつもりが逆効果だったかな。今さら遅いけど。メールを試してみようかとも思ったが、余計な氣を使わせたくなかったので、沙耶からの連絡を待つことにした。

家に戻ってから待ち続けたが、結局何の連絡も無いまま時計は十二時を回った。詳しい事は明日、待ち伏せしてでも沙耶を捕まえて聞くことにしよう。

「沙耶おはよ！」

「あ、亜季……おはよ」

この沈み具合は、明らかに昨日、真也くんと上手く行っていない証拠だ。

「何か元気ないけど、大丈夫？ まだ体調悪い？」

「うっん、身体は平気。あ、もう講義始まっちゃう。じゃあね」

「あ！ ちょっと、沙耶！」

私とほとんど目も合わせずに、避けるように去ってしまった。身体

は平気？　じゃあ心は？　あんな沙耶は見たことがない。昨日の緊張しまくりの姿も初めてだったけど、今朝の沙耶は、何というか……変だ。

いつもはサラッとしてサツパリして初夏に訪れる山間の清流のように爽やかで透明感満点なのに、今日はなんだかぼんやりどんよりしている。流れの遅い澱んだ川のような、輪郭が曖昧な感じ。

今日の講義が全て終わると、私は昨夜ベッドで誓った通り、学生なら必ず通るであろう校門の前で沙耶を待ち伏せした。三十分くらい待ったかどうか、向こうから俯いて病人のような沙耶が歩いてくるのが見えた。

「沙耶！」

手を振っている私に気付いた沙耶は、すぐに目を伏せると足早に通り過ぎようとした。強引に腕を掴んで引き止める。

「ちょっと待ってよ、何で逃げるの！？　朝もそうだったけど沙耶おかしいよ？　真也くんと何かあった？」

「いや……別に……」

「さーや！　私にも言えないわけ？　いい加減にしないと怒るよ？」

「うん……じゃあ……話す」

沙耶の手を引っ張って歩き出そうとしたとき、猛突進してきたチワワがあつという間に近付いてきた。タイミング最悪。

「亜季……！　こんなところにいたんだ。ねえ知ってる知ってる！　？　駅前のデパートに新しくアイスクリーム屋がオープンしたんだって、行ってみようよ！　あ、沙耶ちゃんも行く？　何でもパリに

本店があつて今飛ぶ鳥落とす勢いで世界中に支店出しまくつてとにかく凄いらしいよ。アイス買つと店員がフレンチロボットダンス踊ってくれるんだって！」

「淳、悪いけど沙耶が重症だから一人で行つてくれる？　ちゃんと私の分も買つといてね。で、明日学校に持つてきて」

「そんな、溶けちゃうよ」

「ちなみに分かつてとは思つけど私ミント嫌いだから。もしミント系のアイス買つてきたら覚悟しといてね。いろんな意味で」

淳に反論の隙を与える間もなく、右目を軽くつぶつて見せて、沙耶を連れて逃走。私と沙耶のミーティングルームである、ドトールへ沙耶を強制連行した。

「ねえ亜季……良かったの？　淳くん」

「そんな心配しなくていいから。それより何があつたの？」

沙耶は黙つたままアイス抹茶ミルクにガムシロップを入れて、混ぜるともなくストローを適当に動かしている。

「もう、さつきから黙つてばかり……分かつた。じゃあさ、私が質問するからイエスなら頷いて、ノーなら首振つて」

「イエスならつて……ぷつ、そのまんまだね」

「あ、そつか。まあいいや。いくよ？　私と淳が店を出た後、しばらく二人で過ごした？」

「うん」

「そのとき会話は盛り上がった？」

「うゝん、微妙……かな」

「何よ、喋れるんじゃない。じゃあ次はね、居酒屋を出た後、どこかに行った？」

「うん」

「ほっほゝなかなかやりますな沙耶さん。てことは結構親しくなつた？」

「どうなんだろ、なつたような、ならないような」

「ま、きちんと会って話すのは昨日が初めてだしね。それを考えれば大躍進だもんね。じゃあ、別のお店で飲みなおし？」

沙耶はストローを噛んだまま、首を左右に振った。

「あれれ違うんだ。じゃあね……夜の公園で愛の語らい？」

昨日公園にいた、盛りのついた猥褻カップルを思い出してしまった。沙耶は再び首を振った。

「おやゝおつかしいなゝじゃあどこに……あ、分かったカラオケだ」
「違う。だって真也くんクラシックしか聞かないんだよ？」

「そういえばそんなこと言ってたね。とすると後は……屋台でシメのラーメン？」

これじゃ自分の行動なぞってるだけじゃない。想像力乏しいな、私。って。質問にもう少し捻りを加えてみよう。そして氷を噛み砕きながら首を振る沙耶。

「ファミレスでドリンクバー朝まで飲みまくり？」

「ううん」

「ゲーセンでUFOキャッチャーに気が付けば五千円つぎ込んだ後、ブリクラ」

「違う」

「ボウリング！ ビリヤード！ ダーツ！」

「ううううん全部違う」

「何だと……もうネタ切れだ。おつかしいな」夜でしょ？ 夜……夜……あと夜でも行けるとこって言えば……あ！ ふふふ沙耶さんったらも」

「何？」

「ホテルでしょ？」

頷きもせず首を振りもしない。沙耶の顔が引き攣った。

「な」んちゃってウソウソ冗談だつて。さすがに初対面でそれはないよね。そんな深刻な顔しないでよ。待てよ」絶対当てますからね」

そのとき微かに沙耶の顎が下がるのが見えた。まさか。

フリーフリーあ・か・ぐ・み！

「そう……当たり」

「当たりっ……て何が？」

「ホテル」

「ホテルが当たりって……ええ〜っ！？ 沙耶まじで！？」

「まじ……です」

「ビジネスホテル……じゃないよね。部屋で徹夜で学校の課題……するわけないよね。沙耶、しちゃっ……たの？」

もう一度、今度は私の目を見ながら、うんうんと小さく二回頷いた。

「そっか。後悔してない？」

「してないよ。好きな人だし」

「好きな人……か。ねえ、ずっと聞こうと思ってただけだし、何で真也くんが好きなの？」

沙耶は首を傾けたまま私を見た。でもその視線は私ではなく、ずっとずっと後ろに焦点が合わせられているように思えた。私が何を言っても聞き入れない、そんな顔だった。その一切の感情が消えたような表情に一瞬たじろいだが、私は構わず話を続けた。

「だってね、今まで話したことなかったんでしょ？ もちろんね、一目惚れっていうのも分かるよ？ 分かるけどそれでもさ、実際会って話してみたらイメージと違ってたとか色々あるでしょ？ 別に私は真也くんを好きになっちゃいけないとかそんなことを言うつもりは全然無いの。ただ私には……分かんない。初めて話した相手とその日にエッチしちゃうなんて」

「初めて話した人かぁ……私だってそんなの無理かな」

「じゃあ何で？」

「真也くんだから」

釈然としない私の顔を見て、沙耶は言葉を続けた。

「仮にね、一目惚れした相手が真也くんじゃなかったら、私だっていきなりそんなことしないよ」

「何それ、訳分かんないよ。沙耶、ちゃんと説明して」

私は少し苛立っていた。言っていることが矛盾している。それとも以前から真也くんと会っていたとしても言い出すのだろうか。

「分かった。少し長くなるけど……いい？」

私の真剣な眼差しに観念したのか、沙耶は話し始めた。

「このことはね、誰にも話してないんだ。親も知らない」

私の知らない沙耶がいる。どんな話なんだろう。

「私ね、高校のとき付き合ってた彼がいたの。彼のこと凄く好きだった。優しくてカッコよくて勉強もできて。何より私のことをとても大事にしてくれた。一つ上の先輩でね、出会ったきっかけは体育祭だったの」

「体育祭？」

「そう。うちの高校はね、体育祭に応援合戦っていうのがあってね、クラス対抗なんだけど、一年から三年まで一緒になってやるんだ。要するに、一年一組と二年一組と三年一組が同じチームってこと」

「あ、そういうことか」

「それで夏休みが明けると、十月の体育祭に向けて応援合戦に出る

メンバーはほぼ毎日放課後に集まって練習するの」

「応援の練習って、フレーフレーあ・か・ぐ・み！　ってやつ？」

私は高校野球で学ラン着た男子高生の応援団がやるように、両腕を前後左右に振り回した。その拍子に右手が隣の席のサラリーマンの頭にぶつかり、チョップした形になってしまった。キュートでスウィートな苦笑いで誤魔化する。

「何暴れてんのよ……違う違う、そうじゃなくって、応援っていうよりはダンスって言った方が近いかな」

「踊るの？」

「そう。音楽も好きな曲を選んで、振り付けも自分たちで考えてね」

「へーそんなことやってたんだ。楽しそう」

「うん、楽しかった。まあ中には選ばれちゃったから仕方なく嫌々やってた連中もいたけどね。私はやるんなら思いっきり楽しもうって決めてたから」

沙耶らしいな。楽しい思い出を語るうちに、いつもの顔に戻りつつあった。

「でね、うちのチームは結構真面目に練習した甲斐があって見事優勝したんだ」

「優勝って……競技で？」

「あーっとね、応援合戦っていうのは競技の応援をするわけじゃないって、それだけを別に審査するんだよね。まあ早い話がダンス大会だね」

「それって何チームあるの？」

「うちの高校は一学年十一クラスあったから十一チーム」

「十一チーム中一位って結構凄いいよね。おめでとう！」

「ありがと。それでね、体育祭が終わった後に他の生徒は帰っちゃ

ったんだけど、余韻に浸りたかったんだろっね、応援チームのメンバーが誰ともなく集まって来て。ほら、優勝したもんだからさ、みんなテンション上がってるじゃない？ だから最後にもう一回踊ろうかってことになったの。それでいつも練習してた公園に移動して、ラジカセ鳴らしてみんなで踊ったんだ。すっかり日が落ちてたけど、芝生の上で照明の中のラストダンス」

「うわあ素敵だっ青春って感じ。ねえねえ、そのとき踊ったのって、なんて曲？」

「ミスタービッグっていう外国のバンドのね、曲名は……忘れちゃった。でも良い曲だよ。ロックだけどバラードっぽいゆったりした感じの。昨日安藤さんがやった最後の曲とちよつと似てるかな。でね、その曲が終わるに連れて、ああ、もうこのメンバーで踊ることは一生ないんだなって思うと自然と涙が溢れてきちゃって」

「いいなあ、そういうの。私も何かやつとけばよかった」

「あのときの気持ちは私の宝物なんだ。ずっと忘れない」

輝くような思い出を楽しそうに語る沙耶が羨ましかった。私、高校の頃って何やってたんだろ……

「曲が終わって、本当にお疲れ様って、みんなそれぞれ帰って行っただけど、そのとき初めて気が付いた」

「何に？」

「コンタクトが無いことに。涙流してたから踊ってるときは全然分からなかったんだけど、泣き止んで帰ろうとしたら全然見えなくてとりあえず友達にも手伝ってもらって、足元を探してみたんだけど全然見付からない」

「夜の、しかも公園でしょ？ そりゃ無理だわ」

「そのときにね、まだ残ってた人が『どうしたの』って声かけてくれたの。で、事情を話したら一緒になつて探してくれたんだ」

「それで、見付かったの？」

「これがね、見付かったんだな。芝生の葉っぱの上に夜露みたいにちょこんと乗っかってきらきら光ってた。それでその一緒になって探してくれた人にお礼言ったら『見付かって良かったね』って言うて、そのまま帰っちゃったんだ」

「じゃあその人が彼氏ってわけ？」

「そう。何かさ、『じゃあね』って言ったときの顔が凄く爽やかな笑顔でね。もう一瞬で心臓鷲掴み」

実は沙耶って一目惚れ体質なのかな。確かにロマンチックな出会いではあるから分からなくてもないが。

「その人とはすぐに付き合えたの？」

「すぐってわけでもないんだけど。友達交えて一緒に遊ぶようになって、お互い自然に……ね」

「そっか」沙耶、高校時代にそんな素敵ラブストーリーがあつたのか。いいないいな」

私にも良い思い出がなかったかなと記憶の底を引っ掻き回してみる。高校時代の男たちは、ロクなヤツがいなかったな……。どいつもこいつもやりたがりで。

「でもね」

急に消え入りそうな呟きが聞こえてきた。大切な思い出を、慈しむように話していたさっきまでの沙耶は、そこにはもういなかった。悪い言葉を聞かされる前兆。胃の中からせり上がってくる、鉛のように鈍くて重たい感情。

沙耶様とお呼び！

「死んじやったんだ」

私の目をじつと見詰めたまま、沙耶は続けた。

「彼が三年の夏休みだった。毎年お盆になるとね、彼の家族は名古屋の実家に帰ってたんだ。夏休みに入っても私たちは毎日会ってたから、少しの間でも離れるのが寂しかった。出発当日の朝、三日後には帰ってくるから、お土産楽しみにしててって彼と電話で話してもそれが彼との最後の会話になっちゃった」

「何が……あつたの？」

「彼の乗ってた車がね、事故に遭っちゃって。高速で玉突き事故に巻き込まれたの」

「乗ってたのは……その彼と……ご両親？」

「うん。三人とも即死。運が悪かったんだよね。渋滞に差し掛かって減速したんだけど、後ろを走ってたトレーラーが居眠り運転してたらしくて。何でって思った。何で彼の車なの？ 何でトレーラーなの？ ぶつかったのが軽自動車なら怪我しかなかったかもしれないのに。何で最初にぶつけられたの？ 二台目にぶつけられた人たちは軽傷で済んだんだよ？ あの事故で死んだのは彼と彼の両親だけなんだよ？ あんたたち何で代わりに死んでくれなかったの？
って」

言葉が出なかった。沙耶の黒くて綺麗な瞳からは涙がどんどん溢れ出てくる。

「あははゴメンね、しょうがないよね事故なんだから。代わりに死んでなんて私、亜季よりひどいかも」

小さくて白いリスみたいな顔で無理矢理笑顔を作る沙耶。

「沙耶は、そのこといつ知ったの？」

「一週間後。待ってたんだ、ずっと。彼からの電話。何回かけても繋がらないから凄く不安になったけど、それでも信じてた。必ずかかってくるって。今名古屋に着いたよ、とかこっちは天気最悪だ、とかオレがいなくても宿題ちゃんとやるんだぞ、とか明日帰るからとかゴメンお土産買うの忘れたとかおはようとかおやすみとか沙耶大好きだよ、とか。そういう電話ずっと待ってた。でも来なかった」

こんな沙耶にかけてあげられる言葉を、私は知らない。それに、今口を開いても言葉より先に涙が出そうだった。

「一週間後に彼の仲良かった友達から聞いたんだ。もちろん初めは嘘だと思った。からかわれてるんだって。嘘でしょ？ 冗談でしょ？ って電話越しにずっと言っていたら、『明日お通夜だから、お前も来いよ』って場所と時間を告げられて電話切られて」

でもね、私、お寺に着くまで本気でドッキリだと思ってた。たちの悪い冗談するなあって。バカだよ、私。それで次の日お寺の近くに行ったらね、人がたくさんいたんだ。八月の暑い中、みんな汗だけで黒い服着て。学校の先生もいたし生徒もたくさん来てた。

そうそう、女の子が結構いたな。あ、自慢しちゃうけど私の彼、凄くモテたんだから。でも私が独り占めしちゃった。みんな泣いてたなあ……その光景を他人事みたいにな……と眺めてたら、電話くれた先輩が来て、事故のことを説明してくれた。でも話なんて全然耳に入らなかった。ただ目の前で話している先輩の、泣きはらした真っ赤な目をずっと見てたんだ」

沙耶は外に目をやると、ふう、と小さく息を吐き出した。穏やかな顔に戻ってるけど、頬に残る涙の跡が痛々しい。でもその横顔はやっぱり綺麗で、私は沙耶に見とれた。

「あ、そっか、亜季さ、不思議に思ってるでしょ？」

不意に沙耶が顔を向けたので、ドキッとした。

「今の話が真也くんと何の関係があるの？ って」

私はまだ口を利けず、ただ小さく頷いた。これじゃさっきの沙耶と同じだ。

「でももうちょっとで登場するからさ、我慢して聞いてて」

我慢なんてしてないよ。いつも落ち着いていて周りに流されない、強い人だと思っていたけど、そんな悲しいことを誰にも打ち明けることなく胸に秘めていたんだね。

「それからしばらくは……何やってたんだろ？ あんまり覚えてないなあ。残りの夏休みは家から一歩も出なかったけど、二学期は学校には一応行ってた気がする。誰とも喋らなかったけどね。」

親には心配かけたくなかったから、極力いつも通りに振る舞ってたけど、部屋で一人にいるときはひたすら泣いてたな……毎日毎日泣いてた。人間てこんなに涙が出る生き物なんだなって思いながら。

色んな感情がグチャグチャになってた。実家が名古屋じゃなければこんなことにならなかったとか、前の日に出てれば事故に遭わな

かったとか。居眠り運転してたトレーラーの運転手を憎んだりとかね。

あ、でもその運転手も大怪我して半身不随で一生寝たきりになったとか聞いたけど。でもね、ある日やつと気付いたんだ。そんなことをいくら考えたところで彼はもう二度と戻って来ないんだって」

外はすっかり暗くなっていた。沙耶の話をこんなに聞き続けるのは初めてだった。

「それからね、勉強した」

「勉強？」

「うん。彼によく教えてもらってたんだ。それでね、彼がよく使ってた参考書を借りたままになってたのを思い出してさ、ぱらぱらめくると一緒に勉強してた日々が甦ってきて、また泣きそうになったんだけど。」

でもね、彼の書き込みがいっぱいある参考書で勉強していると、すぐ傍で彼の声が聞こえるんだよね。『ほら沙耶、そこは前やっただろ？』とか『おお凄いい、全問正解！よくできました！』とか。何か、勉強してる間は彼が戻ってきてくれる気がして。きつと心配だったんだろうね、私、頭悪かったから。だから決めたんだ、彼の目指してた大学に合格しようって」

「それが……うちの大学？」

うちの大学は、確かにそこその偏差値だが、がむしゃらに受験勉強して目指すほどでもないような……

「違う違う、成績優秀の彼が行きたかったのは東大ですよ」

「と、東大！？ 沙耶東大受験したの！？ 初耳だ」

「ふふ、実はそうなんだ。結構頑張ったんだけどね、やっぱり厳しかった。それに本格的に始めたのも三年になってからだったし。世の中そんなに甘くないってね。それでもセンターは通ったんだよ」
「一次通ったって……それ凄くない!? あ! ってことはもしかしてうちの大学は……」
「モチ滑り止め」

顔の前にピースを突きつけられた。

「う……私なんかギリギリで受かったのに。沙耶って頭良かったんだね……」

「気付くの遅いぞ! これからは沙耶様とお呼び!」

「な! ムカつく……そ、そんなことより一体いつになったら出てくんのよ、真也くん!」

「あ、そうだったそうだった。それでまあ大学受験が無事終了して、高校も卒業。さあこれから新しく大学生活が始まるぞって気分も新たにあって、ようやく彼のことも何とか整理できるようになったので、入学式」

「入学式といえば……」

「そう、誰かさんと衝撃的な出会いをした日」

真也くんは実はゴーストだった

「いやあ、あのときはホント参った」

「私だつてびつくりしたよ！ トイレ入ったら隣からいきなり『助けてください！』だもんね」

入学式当日、開始間際に学校に着いた私だったが、どうしても我慢できなくてトイレに行ったのだ。そして慌てて入ったトイレに紙がないことに気付いたのは、あらかた用が済んだ後だった。

「『お願いです！ 紙投げてください！』って泣きそうな声出して」「そりゃあだつて、もうすぐ入学式が始まるのにトイレに閉じ込められたらどうしようってパニックだったからね」

「その声聞いたら私まで動揺しちゃつて。トイレトペーパー投げたのはいいけど、私もまだ終わつてなかった！ みたいな」

「で、今度は沙耶が情けない声で、『紙返して』ってね」

「やつとの思いで出たら、顔見た途端に二人で大爆笑！」

「あれは笑つたね」

「でも、お陰で亜季に出会えた」

「だね」

「ま、それはさておき」

そこで言葉を切った沙耶は、再び真剣な顔になった。いよいよ核心に触れるのだろうか。

「あれは夏休みに入る前の経済の講義だっただけだね」

「それって大講義室でやつてた詰まんないヤツでしょ？ 私、ほとんど沙耶と一緒に受けてたよね？」

「その日はね、亜季たまたま休んでたんだ。確か具合悪いとかなん

とか」

「そうだっけ？ うーん覚えてないな」

「だから私は一人で講義室に行つて、いつも通り後ろに座つて欠伸しながら聞いてたの。そしたら始まつて十分くらい経つてからかな、男の子が一人、遅れて入つてきたんだよね。私は半分寝てただけど、彼を見た途端一気に目が覚めて心臓が止まりそうになった」

まさか彼の幽霊見たとか言うんじゃないでしょうね……

「だってその男の子の顔は正しく高校のときの彼だったから」

やっぱりそういう話なのか？ しかし沙耶に私をからかっている様子は見られない。

「訳が分からなかった。今はもういないはずの彼が、同じ大学の、しかも同じ学年で同じ講義を受けている。講義室の後ろの方から見ただけで距離もあったから、最初は別人かもしれないと思つたんだ。パツと見似てるくらいかもつて。むしろ別人であつて欲しかった。

その彼はどんどんこっちに近付いてくる。空いている席を探して遂に顔がはつきり分かる距離まで来たの。私は目が離せなかった。動けなくなった。だって、どこからどう見てもあの彼にしか見えなかったんだもん。

そしてとうとう彼は私の真後ろの席に座つたの。もう講義どころじゃなかった。まあどっちみち聞いてなかったけど。とにかく気になるなんてレベルじゃなかった。振り向きたい、でも振り向きたくない。名前を呼んでみたいけど呼んで返事をされるのが怖かった。とにかく混乱したの」

「それが……真也くん？」

沙耶はゆつくりと頷いた。そうか、真也くんは実はゴーストだったのか……ってそういう話じゃなくって！

「でも雰囲気は全然違ったの。金髪に顔中ピアス」

「単なるそっくりさん……じゃないよね」

「それからは学校に行くたびに彼を探した。でもね、もともとあんまり学校に来てないみたいで。で、結局夏休み突入」

「話しかけなかったの？」

「無理。そもそも顔だつてまともに見れないし。目なんか合ったらそれこそ気を失いかけないし。それに何て言っているのか分からないしね。お陰で悶々とした夏休みだった」

「そうだったの？ 結構ノリノリで遊んでたから全然気付かなかった」

「実は無理してました」

沙耶はぺろつと舌を出した。

「言ってくればよかったのに」

「だつてさ、せっかくやつとの思いで気持ちにけじめ付けて、さあこれから！ ってときだったから。あのときは美味しく説明できる自信なかったし、亜季に変なヤツって思われなくなかったし。その時点で私が知っている真也くんと彼との共通点は二つ。彼と同じ顔だということ。歳が同じであること。このことから私はある結論に達したの」

「双子……」

沙耶は私をじつと見詰めたまま動かない。

「でもちよつと待ってよ。私そんな話、淳から一度も聞いた事がな

い。まあ私はそれほど真也くんに興味があつたつてわけじゃないけど……それに、そう、そうだよ、苗字。苗字は違うんでしょ？ 同じだったら沙耶だつてとくに気付いてるはずだし」

「確かに。私の彼の苗字は井川。で、真也くんは田村。でも苗字なんて親の都合で変わるでしょ」

「まさか……離婚したつてこと!？」

「私の中ではそれでほぼ確定してる。しかも二人が生まれてすぐにね。だって私の彼は、自分は一人っ子だつてずっと言つてたんだから。つまり彼らはお互いに双子の兄弟がいることは知らないんだと思う」

「ねえ沙耶、せっかく真也くんと話せたのに、聞かなかったの？」

口にしてからしまった、と思つた。

「そんなこと聞けるわけないでしょ」

「だよね……ごめん」

沙耶が真也くんに双子かどうか尋ねるといふことは、過去の恋人と真也くんを重ねているといふことを、本人の目の前で認めるということだ。

真也くんが、自分が双子だと知つていようといまいと、沙耶の気持ちに純粹に自分だけに向けられている訳ではないと分かれば、多少なりとも傷付くだろう。沙耶にとってその質問は好きな相手にマイナスにしか作用しないのだ。

ヤツの頬を右手の平でフルスイング

すっかり話し込んでしまった。納得できないような話で、もうちょっと詳しく聞きたかったが、時計は九時を回っていた。私たちは店を出て帰ることにした。大学の最寄り駅である赤羽の改札を通ると、埼京線に乗る沙耶とは構内でバイバイした。私に打ち明けて多少すつきりしたのか、沙耶の表情は朝よりは随分ましだった。

私はエスカレーターに乗りながらさっきの話を頭の中でこねくり回す。沙耶の推理が正しいとすると、彼らは離婚した親に、それぞれ引き取られたことになる。しかも兄弟の存在を一切知らされないまま……私は急に、真也くんが可哀想に思えてきた。しかし真相を知りたいという心も同時に芽を出した。携帯を開く。淳は本当は知っているのかもしれない。

「あ、もしも淳？」

「亜季！ あ、アイス買ったからね！ 凄い行列だったんだから！ でもそのお陰で並んでる間に何回もロボットダンス見れたから良かったけど。店員の人、みんなスゲー上手でびっくりしちゃった。何かね、元気が出るテレビのダンス甲子園で準優勝した人が……」

アイスとか完全に忘却の彼方だった。

「あゝ淳あのさ」

「何？ あ、もちろんミントは外したからね！ ストロベリークリームチーズ生キャラメルナッツ&ピスタチオっていうのが美味しそうだったから……」

「あ、ありがとありがと。明日食べるから、ドライアイス入れて持ってきてね。ところでね、話は変わるんだけど、真也くんてさ」

言いかけてホームでふと立ち止まった。私が真也くんが双子だったのかどうかを、このチワワに聞いていいものかどうか。例えば正しい答えが聞けたとしても、「私が真也くんについて尋ねた」ということを、こいつは彼に話すかもしれない。そうすると、沙耶にとってはやっぱり悪い流れになりそうな気がする……よく分かんないけど。

「え？ 真也？ 真也がどうかした？」

「あゝつとさ、その〱真也くん、淳が言ってた今付き合ってるって彼女とどうなったのかな〱と思って」

「ああ、そのこと？ 別れたってさ。今日」

「今日？」

「うん、さっきメールが来た。でもな〱沙耶ちゃんのことは特に何も言ってなかったけど」

「ああそう、いいのいいいの。そんだけ分かれば。じゃね」

私は一方的に電話を切った。そつか。別れたのか。確かに沙耶にとってはグッドタイミングかもね。まあ、何にせよ恋することは良いことだ。沙耶はあんなに美人なだから、ずんどこ恋愛を楽しまなきゃね……って、お？ あれ？ あれは正に噂の真也くん？

同じホームの10メートルほど先のベンチに腰を下ろしている。そうだ、間違いない。そもそもあんな顔面金属比率の異常に高い男なんか見間違えるわけがない。

いかんいかん、こんなところでこんな時間に一対一で会うのは気まずさMAXだ。ホームの反対側へ歩こうとした瞬間、自動販売機でペットボトルを買って歩いていた人が、屈んで真也くん顔に近付けたように見えたので咄嗟に確認すると、何と、キスしていた。

私の目は釘付けになってしまった。まだ人もいるホームで、堂々とあんなことするなんて信じられない……。あ、自分もたまにやるか。でも私のは、チュツていう、可愛いキスだもんね！それに比べて今日の前で展開されてるのは……。何とまあイヤらしい、ハレンチな！

と目を剥いていたら、あるうことかヤツはキスしたまま目を開けてその女越しに私を見た。しかも私と確認したにも関わらずまだ女の身体を離そうとしない。こっちが恥ずかしいわ！

ホームにアナウンスが流れ出し、上りの電車が滑り込んでくると、女は「じゃあね」と真也くんに向かってヒラヒラと手を振り、開いた扉から乗り込んでしまった。電車が去ると私はつかつかと歩み寄り、ヤツの頬を右手の平でフルスイング。

パシーンという乾いた音と、重なり合うピアスとチェーンの金属音が辺りに響き、何人かが振り向いた。近くのベンチに座っていたおばあちゃんは、漫画に出てくるような「あれまあ！」という吹き出しがぴったりくる顔で驚いている。

「あんたねえ、どういつつもり!?」

平手打ちを避けもせずを受け止めた冷静さに、さらに私の頭に血が上る。

「これはこれは女王様。ご機嫌麗しゅう。こういうプレイは彼氏だけにしておいてもらいたいですねえ」

「ちよつと、ふざけてんじゃないわよ！誰よ今の女、どーせ前の彼女でしょ？淳から聞いたんだから、今日別れたって。なのになんでキスなんかしてんのよ！」

「おや、女王様、ワタクシに嫉妬なさってるんですか？　これは光栄ですね」

「バカ言ってるんじゃないわよ！　あんた自分が沙耶にしたこと忘れてたわけ！？　沙耶の気持ち知ってて、あんなことまでしておいて、堂々と元カノといちゃつけるなんて信じらんない！」

真也くんは、ふ、と鼻で笑って下を向いた。

「人が真面目に話してんのに何がおかしいのよ？」

「その言葉、そっくりそのまま返すよ。女王様」

「え？」

予想外の言葉を言い返されて、一瞬言っている意味が分からなかった。まさかこの人……いやしかし、一体誰から……

「こんなところじゃなんだからさ、うち来るか？　長くなると思うよ、話」

「じよじよ」冗談じゃないわ！　あんたの家なんか上がったら、それこそ何されるか分かったもんじゃない。それに沙耶に知れたら変に誤解されるでしょ？」

「くつくくオレって相当信用されてないんだなあ……まあいいや。じゃあ女王様の家の近くで飲みながら話す？」

「だからあんたと二人でお酒なんか飲むわけないでしょつつつてんでしょ！」

「信用されてない上に随分と嫌われてるんだなあ。まあその態度もオレの話を聞いたら180度変わると思うけど。分かったよ。じゃあ浦和駅まで送るから、駅前でコーヒー飲みながらだったらいいだろ？」

電車に乗っている間は、二人とも無言だった。さっきの口ぶりから

すると、私が二股かけていることを知っている感じだった。でもどうしてだろう。従順で恋に盲目的な淳が私を疑うわけないし、沙耶が裏切るなんてそれこそ有り得ない。実は安藤さんと知り合い？ 音楽仲間とか？ あ、ジャンルが全然違うか。

というか安藤さんと知り合いだとしても、安藤さんが私の秘密を知っているわけがないんだから、関係のないことだ。考えれば考えるほど分からなくなる。そして、胸の中にどよどよと黒っぽい霧が立ち込めてきた。

ハンガリー人のお婆ちゃんとか

「答えは出た？」

浦和に着いて、改札を出てすぐ傍のカフェに入り、向かい合わせで座った瞬間に質問された。くそう、何もかもお見通しみたいな目で見やがって。

「え？ 何のことつかなく？」

一応すつとぼけてみる。精一杯の抵抗。

「淳でも沙耶でもないよ。恐らく沙耶には話してるんだろうけど。女王様にゾッコンの淳は疑いすらしなしな。まあオレが知ったのも偶然なんだけどね。偶然に偶然が重なったっていうか」

この男は何を言っているのだ？ そもそもコーヒーを飲むたびに唇のピアスがカチカチとカップに当たって鬱陶しいったらありやしない。

「さっきの女いただろ？ 確かにアイツとは付き合ってた。事情が事情なもんで、一応彼氏彼女の関係は解除ってことにしたんだけど多分また会うだろうと思う。金持ってるし、何たって最高にヤらしいカラダだからね」

やっぱりこいつは噂通りだったのか……一刻も早く沙耶には目を覚ましてもらわないと。遊ばれるだけ遊ばれてボロ雑巾のように捨てられてしまう。

「何よ事情って」

「結婚するって言うからさ。そこまでは束縛ってか干渉できないでしょ？　する気もないけど。まあオレとしては人の妻になろうが母親になろうがアイツがオレと会いたいって言ってきたら遊ぶつもりだし」

女なら誰でもいいのかコイツは……

「勘違いされると困るから言っとくけど、誰でもいいってわけじゃない。オレ女にはかなりうるさいから。当然見た目重視ね。ブスとは話もしたくない。あ、沙耶は合格ね。あともちろん女王様も」

お前が沙耶って呼び捨てにすんな！　このゲスヤロウめ！　ゼツテ！　沙耶を守る！　しかし今は弱みを握られてるっぽいのでここはぐっと堪えて我慢の子。

「ところで偶然の重なりって何？」

「ワタクシの元カノ、つまりさっきの女の結婚相手が実は女王様の二番目の恋人でございます」

「……はい？」

「回りくどかった？　さっきの女が安藤ってヤツと結婚するんだそうだ」

「け……けっ結婚相手じゃなくって見合い相手だっつーの！」

「そうなの？　まあそこら辺は双方の視点の違いってことで」

「ん？　っていうことは……えええ！　？　安藤さんのお見合い相手って、真也くんの元カノだったの！　？」

行き詰っていた問題が、思わぬところで一気に解明に近付いた。

「そう。それが偶然その一」

「あの女の名前教えて！ 誰なの！？ どの人！？ 何歳！？ 何人！？」

「まあまあ落ち着いて。それはちょっと置いて。偶然その二が先」

「ち、さつさと言いなさいよ」

「見ちゃったんだつてさ。女王様とビーグル安藤が、あははははうふふふふつて笑いながら仲良くお手々繋いでるんスキップしてるって」

「なっ……そんな漫画に出てくるバカップルみたいな行動、この私がするわけ……」

無いとは言い切れない自分が情けない。確かに手を繋いで歩いたことはあるし、楽しければ笑うだろうし。酔ってれば勢いでスキップぐらいやったかもしれない。記憶にないだけで、天文学的確率でこの三つが合わさった瞬間がひょっとしたらあったかもしれないのだ。

「で、でもさ、それを見てしかも真也くんに報告したってことは、あの元カノの中では私が安藤さんの彼女ってことになってるわけでしょ？ それなのにまだ諦めないわけ？」

「あつはつは、そんなことでアイツが諦めるわけないって！ 大会社のお嬢様でしかも一人娘だぜ？ 欲しい物は何としてでも必ず手に入れる。それに、アイツと比べたら女王様の方が部が悪い。だろ？」

ぐ……安藤楽器店の経営難のことまで知っているのか……どんだけお喋りな女なんだ。

「で、でも安藤さんは私のことが好きなんだから！ いくら金持ちだからって札束ばら撒いても気持ちまでは動かないに決まってる！」「……動いてもらわなきゃ困るんだよ」

涙みを帯びた真也くんの声が、急に真剣になった眼差しと共に私に刺さる。

「どういうこと？」

「女王様が沙耶を大事にするのと同じように、オレにとっても淳は大切な存在だ。女王様は何食わぬ顔でビーグルと二股かけて、淳を裏切っている。つまりオレの親友を傷付けていることになる。だよな？」

反論の余地が無い。

「確かにオレは沙耶と寝た。んで、その後も元カノと遊んだりしている。でもな、オレと沙耶は別に付き合ってるわけじゃないし、そもそも昨日誘ってきたのは沙耶の方なんだぜ？ あんな美人に誘われて断れるほど、オレは人間できてないんでね」

沙耶から誘った……それはさっきの話からも納得できるけど。

「あ、あのさ」

「何？ 上手い言い逃れでも思いついた？」

「うっん。淳と安藤さん、両方に悪いことをしているのは認めるし言い訳はしない。そのことじゃなくってね、前からずっと疑問だったんだけど、何で真也くん、淳と仲が良いの？」

「不思議？」

「スッゴイ不思議」

「それは見た目が違いすぎるからだろ？ オレがすっぴんだったら別に淳といたって違和感ないと思うけど」

「見た目だけじゃない。今知ったけど、性格っていうか……そもそも人間の種類が違うじゃない」

「一応オレも黄色人種なんだけどな……」

「え？ クォーターでしょ？ 真也くんて。ハンガリー人のお婆ちゃんとかいそうだもん」

「何でハーフ通り越してクォーターなんだよ……違うって。純粹なジャパニーズ。よく言われるけどな。まあ確かにこんな氣品溢れる顔立ちの上にゴージャスなアクセサリーが煌めいてるからね、純朴少年の淳と並んでたらバランスは悪いか」

純朴……淳にぴったりの言葉。そしてカチカチと音を立ててコーヒーを飲むと、真也くんは語り出した。

うん、唇に

「淳との出会いは入学してから一ヶ月経った頃だったかな。講義が終わって帰ろうとしたら、いきなり後ろから肩叩かれてさ、話しかけてきたんだよ。しかもあいつ、何て言ったと思う？　ヘローハウアーユー、だぜ？　オレもう口開けて啞然としちゃってさ。」

それ見て英語が通じないと思ったらしくて、今度はあいつ、ゲーテンターク、ダンケシェーン、だぜ？　その後はフランス語、イタリア語、終いにはオブリガートまで飛び出してきちゃって。しかもあいつは真剣そのものだから、何とか『外国人の』オレとコミュニケーションとろうとして必死なわけ。

変なジェスチャーで汗まで掻いてさ。オレ、その場で爆笑しちゃったんだよね。あんなに笑い転げたのって生まれて初めてだったから、一気に淳のこと好きになっちゃってわけ」

「はは……外人だと思ってたわけだ……」

「オレさ、見た目もこんなだから、近寄り難かったみたいで入学当初は誰も話しかけてこなかったんだよね。オレは別に一人でも構わないから、特に気にしてなかったんだけど、淳はその様子を見て、『遠い国から遙々やって来て、慣れない環境の中言葉も分からず友達も出来ず、寂しいんだろうな』ってずっと気になってたんだって」

「バカだなあ……」

「そう。バカで優しい。そしてあいつは人を疑う事を知らない純粋なヤツだ。今でも女王様に愛されているのは自分だけだと信じきっている。オレのことは何と言われようが構わない。実際ロクな男じゃないしな。でもな、淳はオレにとってこの上なく大切な存在だ。」

いいか、オレは別に女王様が二股かけてることに對して怒ってる

んじゃない。同時に違う人間を好きになることなんてよくある話だし。そうじゃなくて、淳に対して黙っていることに腹が立つんだ。他に好きな男がいるんならはっきりと言わべきだ。両方とも好きで別れられないのならそう言うべきだ。

真相を知って傷付くのは仕方が無い。恋愛だからな。女王様に淳を一生愛せとか別れないでやってくれとか野暮なことを言うつもりはない。オレが許せないのは、女王様が淳を騙し続けていることだ。相手が淳じゃなかったらオレだっていちいち口出しなんかしない。でも、相手が親友である以上、黙って見過ごすことは出来ない。これでもまだ騙し続けるようならオレがあつにバラす」

静かだが有無を言わせぬ口調に気圧されてしまった。黙ったまま席を立つと真也くんはそのまま店を出た。

取り残された私は、ようやく重い腰を上げた。夜道を歩く足も重い。「二人とも手放したくないんならもうちよつと慎重に行動しなさいよね」沙耶の言葉重みが今になってのしかかる。確かに安藤さんとも人目憚らず会ってたからな……

どうしよう、さっきの真也くんはかなり真剣だった。淳とは「いつつもツルんでる相手」くらいにしか考えていなかったから、あんなに淳のことを大事に思っているなんて、想像もしなかった。確かに黙って二人と付き合っているのは悪いと思う。でも、真相を知ってしまったら、淳は苦しむだけだ。親友を苦しめるような事を、彼は本当に言うのだろうか……

疲れた。脳にブドウ糖が足りていない。ベッドに寝転ぶ。今日は人の話をいっぱい聞いたな。しかも真面目な話ばかり。あ、結局真

也くんにお見合い相手の名前聞きそびれたな……いいや、もう寝る。

「どうしたの亜季、悩み事でもある？」

次の日、学校が終わってからの恒例のデート。大学近くに新しく出来た噂のケーキ屋へ行くことにした。店内に入ると色とりどりにデコレーションされたケーキの数々が、ショーケースにずらりと並ぶ。店の二階で食べることもできるので、私たちは階段を上がった。

席に着いてメニューを開く。私はチョコレートケーキに目がない。最近のお気に入りには「オペラ」。私はそれと紅茶、淳はモンブランとコーヒーを注文した。メニューを置いてぼーっとしていたら、目の前に座る淳が私の顔を覗き込んでいた。

「え？ あ、ああ、うん。何でもない」

昨日真也くんにあんなことを言われたのだ。何でもないわけがない。淳に変わった様子は見られない。いつものチワワだ。いくらなんでも昨日の今日で暴露するってことはないか……しかしなあ、安藤さんのことを淳に話したところで一体何になるんだろう？

淳は安藤さんへの激しい嫉妬と私への怒りと憎しみに身を焼かれるだけだ。淳にとって一番の幸せは、今こうして二人の時間を、可能な限り長く過ごすことなのではないだろうか。真相を今知っても一カ月後に知っても同じように苦しむのであれば、例えそれが僅かでも先延ばしにした方がいいのではないだろうか。

それに、安藤さんだって、いつ私に愛想を尽かすか分からないし、それこそ淳だって、明日突然別れ話を切り出す可能性だってゼロで

はない。真也くんは、淳が傷付くことよりも、真実を知らされないままにいる淳を見ることに耐えられないと言ったが、本当にそうなのだろうか。

もし私が淳の立場だったら、そんなこと知りたくない。自分の恋人に、他に好きな人がいたとしても、そんな話は聞きたくない。知らないままの方が幸せだ。真相など知らなくても愛されているという確信があればそれで充分だ。いずれ分かる時が来るとしても、一分でも一秒でも先であって欲しい。それに。それに私は淳が好きなのだ。この気持ちに嘘はない。

決めた。私は言わない。

「え？え？ な、なに？ さっきからずっと見詰めちゃってるけど

……何か付いてる？」

「うん、唇に」

人差し指で淳の唇を優しく拭くと、指先の生クリームをそのままぺろっと舐めた。

人妻でも母親でもニューハーフでも

今日は早めに淳と別れた。いつもいつも終電間近というわけには行かない。二十歳を過ぎてようやく家族との時間も大切なのだということに気付き始めたから。一家揃って食事をした後、部屋で課題をやっているとメールが来た。沙耶だ。

『まだデート中かな？ 心躍る出来事があったので報告しちゃいます』

沙耶にしては珍しくテンション高めのメールだ。

『今家で猛勉強中。どうしたん？ 良いことあった？』

送信するとすぐに携帯が鳴った。今度は電話だ。

「もしもし？ 亜季が勉強するわけないでしょ」

「あ、ひつどい！ ホントにレポート書いてるんだから」

「珍しいこともあるもんだ」

「で？ 何があったの？」

沙耶の声は昨日と比べ物にならないほど艶がある。もしや……

「実はさ、今日真也ちゃんとデートしてきちゃった！」

やっぱり……

「沙耶が誘ったの？」

「それがね、学校終わって帰ろうとしたら、校門のところに真也く

んが立つて、それ見て一瞬動けなくなっちゃったんだけど、何とか膝震わせながらも近付いていったの。校門通らなきゃ帰れないからね。まあ淳くんと待ち合わせでもしてるんだろっから、二言三言挨拶程度に言葉を交わして立ち去ろうと思ったわけ。

で、いよいよあと三步というところまで来たら『これからヒマ？』って聞かれて。一瞬他の人に話しかけたんじゃないかって思って回りきよろきよろしてたらもう一回、今度は『沙耶、お前だよ』って！ もう一気に顔が赤くなっちゃって、声も出ないからキツツキみたいになんかにひたすら頷いちゃった」

あああ沙耶、あなたは騙されてるんだぞ！ そいつは天下の女つたらしなんだぞ！ 元カノが結婚しようがお母さんになるうが身体目的で平気で会うようなヤツなんだぞ！ って今すぐ叫びたい。

「しかもそのときの顔がさあ、スッゴイ優しくって……同じだったんだ。あのとき彼が『沙耶』って呼んで、頭に手を乗せてくれたときの顔と。それでもう、完全に骨抜かれて腑抜けました」

ダメだ、完全に落ちてる。ナイアガラからバンジージャンプ級のフオーリンラブ。こんな浮かれまくりハイテンションの沙耶は初めてだ。

「まさかまたホテル行つたの？」

「な、何言ってるの！？ この前は緊張しすぎて何喋っていいか分かんなくって、でも一緒にいたかったから後先考えずにあんなことしちゃったけど……今日は普通にお茶して普通に話してただけ。亜季さ、誤解してるでしょ、真也くんのこと。確かに見た目は激しいし、よくない噂も聞くけど、本当の彼は違う。優しくて繊細で真面目なんだから」

だからね、誤解してるのはね、沙耶の方なんだよ。って言っても全然聞く耳持たないんだろうな。いくら昔の彼と顔が同じだからって、しっかりものの沙耶がこんな簡単に騙されるだなんて。

夢見心地の恋する乙女沙耶は、この後有り得ないほどの一人マシンガントークを展開する。内容は真也くんのことばかり。好きな食べ物とか今聴いてる音楽とかピアスにはそれぞれ意味があるとか、はつきりいつてどうでもいい。悪いとは思いつつも後半は携帯を耳から離し、机に置いていた。やっと喋り終わった沙耶は、機嫌良く一方的に電話を切った。

あゝあ、課題への集中力が完全に切れてしまった。まあ元気になったんならいいか……別に私が口出すことでもないし。後は真也くんが、他の女と遊ばない事を祈るしかないな。無理だと思っけど。

しかしどういいうつもりだ、真也のヤツ。身体目当てなら、誘えば絶対に沙耶は断らないだろう。それなのにお茶して？ 世間話？ 目的は何だ？ 私への当て付けか？ 訳が分からない。こういつときは……

「もしもし真也くん？」

「これはこれは女王様ご機嫌麗しゅう」

「一体どういいうつもり？」

「何がございましょう」

「とぼけんな。沙耶よ。今日誘ったんでしょ？」

「ああ。それが何か？」

「何でホテル行かないのよ！」

あ、あれ？ 私、言ってることがおかしいぞ？

「今何と？」

「んんっ……お茶ただけ帰ったそうじゃない」

「そのどこが悪い」

「悪いっていうか、何か企んでるでしょ！ 女の子を食い物にすることしか頭にないくせに、手を出さないなんておかしい。白状しなさい！」

「あのなあ……オレのこと何だと思ってるわけ？ オレだって女の子と普通に会話ぐらいするぜ？ 身体だけの関係も悪くないけど、最近そういうのも飽きてきたし」

「それじゃ昨日と言ってることが違うじゃない！ 人妻でも母親でもニューハーフでも見た目がよくてヤラせてくれれば誰でもいいんでしょ！」

「ニューハーフって……まあそういう性欲の赴くままに行動してきたことは認めるけどさ、アイツ、沙耶は、その何ていうかさ、可愛いんだ」

「当ったり前でしょ！ うちの大学でミスコンやったら絶対優勝確実と言われてるんだから！」

「聞いたことねーぞ……いやそういうことじゃなくてさ。何ていうか、好き、かも」

「……え？ 今何と？」

裸にしたら同じだろ？

「こういう気持ちは初めてだからまだはつきり分かんないんだけど、とにかく今まで付き合ってきた女とは違うんだ。これまではどんなに美人でどんなに金持っても、女を目の前にして冷静さを失ったことはないんだ。女なんてどんなに着飾ったって裸にしたら同じだろ？　みたいなさ」

それって……男だって同じじゃないのか？　つーかどんだけ捻くれてんだ、この男は。

「何だろ……無邪気……そう、無邪気なんだ。オレに寄って来る女って、オレの見た目で最初っから『遊んでそうな男』って決めてかかるんだよな。まあ実際そうなんだけど。でもさ、沙耶はそれが全くなかった。無垢で無邪気で打算がなくて、全身でオレのことを好きだっていう気持ちが凄く伝わってきたんだ。もちろんこれまでもそういうことはあった。勘違い女に告白されることはね」

「勘違いって？」

「どう見てもオレには釣り合わないでしょって女。思い詰めたブスほどやっかいなものはないからね」

こいつは……全然改心してないじゃないか！

「でもさ、沙耶だぜ？　今まで話したことはなかったけど、前は女王様とよく一緒にいたし二人は目立ってたからな、顔は知ってた。スタイル良くて美人で、モデルみたいだろ？　絶対男を手玉に取って弄ぶム力つく女だと思ってたんだ」

「ちよつと……それ以上沙耶を悪く言ったら許さないからね！」

「だから、それは過去の話。で、ライブの日に初めて会って、女王

様と淳が先に帰っただろ？

あれから二人で飲んでたんだけど、沙耶さ、全然喋らないんだ」

「全然で……一言も？」

「そう、一言も。真っ赤な顔して俯いたまま。まあ顔が赤いのは酒のせいかもしれないけど。ときどき目だけ動かしてオレの顔を見てさ。だからオレも黙ってた。一言目に何て言うのかなって楽しみに待ってたんだ。一時間くらいそうやってたかな」

「え？ 一時間も無言の二人？ そんな空気私絶対堪えられない。真也くんよく我慢できたね」

「我慢なんかしてない。オレが最も嫌いな言葉が我慢だからな。顔見てたんだよ。沙耶の顔。正面、右斜め前、右横、左斜め前、左横って。ホント綺麗なのな」

「それで……沙耶は口を開いたの？」

「ああ。オレが話しかけるのを期待したんだろうけどいくら待っても何も言わないもんだから、遂に意を決して沙耶は言葉を発した」

「何て？」

「ああ、思い出しただけでゾクゾクするんだなこれが……」

「いいから早く言え」

「震える声でさ『朝まで一緒にいて下さい』って。そしたら顔がさらに赤くなつてさ、その瞬間だな、うわあコイツ凄え可愛いって思ったのは」

この男、本気で沙耶に惚れたのか？ ということは……

「ねえ真也くん」

「ん？」

「取引しない？」

「……いいだろう。淳には黙ってる」

「え？ 何で分かったの？」

「何でって、取引って言ったら互いの弱みの握り合いだろ？ 女王様は二股かけてることを淳に知られたくないし、オレはオレで沙耶に誰とでも寝る女好きと思われたくない。取引成立ってことでいいか？」

「真也くん、そんなに沙耶のこと……」

「はは、自分でも笑っちゃうけどな。今回はまじかもしんない」

どうやら真也くんも本気らしい。とりあえず取り引きは成立したわけ、これでひとまず安心だろう。

でもな、沙耶は本当にそれでいいのかな。いくら前の彼と外見が一緒だからって、中身は当然違うわけだし。全く別の人間を好きになるより遥かに複雑な気がする。いずれ何かにつけて比較し出したりするんじゃないだろうか。だって、真也くんの顔が全くの別人だったら、きっと沙耶は見向きもしないはず。

まあいいか。お互い惹かれ合ってるんだから、しばらく見守るか。さっきの真也くんの様子だと、やっぱり沙耶は双子のことを聞いていないみたいだな……。双子であろうとなかろうと関係ないっちゃ関係ないよね。死んでしまった人のことを今さら蒸し返しても、真也くんが傷付くだけだし。それに真也くんは真也くん、この世にただ一人しかいないんだから。

祝日。天皇誕生日、じゃなくてみどりの日、じゃなくて昭和の日。世間はゴールデンウィークだ。とはいえ明日明後日は普通の日だから学校があるんだけど。今日は夜からバイトだ。学校の無い日に夕方からバイトに出かけるのはなかなかダルい。昼過ぎまで寝てしまつと、一日が終わった気分だ。

この頃は休日に淳と会う気にはなれない。最近の私は、ウィークデー―「淳、ホリデー」安藤さん、と脳が勝手に求める相手を切り替える。もちろん平日に安藤さんに会うイレギュラーは大歓迎だけど。だから今日は安藤さんに会いたいと思って休日には珍しく朝から起きてみたのだが……寝てるんだろうな。でも会いたいな。最近会ってないし。

そもそも安藤さんってあんまりメールとか電話とかしてこないんだよね。淳と会ってるときは意識の外だから何とも思わないんだけど、これが安藤さん一人と付き合ってたとしたらかなり寂しいんじゃないかな……

はっ、こうやってモヤモヤさせて「会いたい」とう思いを募らせる作戦か？ バイトしてバンドやって忙しいのは分かるけど。ひよっとして私のこともう飽きちゃった？ まさかね。まだ早いよね。

今すぐピーコにファッションチェック

いきなりアポなしで会いに行くと、この間の二の舞になるかもしれない。メールを試みよう。

『おはよ～～～ございます。天気も良いし今日どこか行きませんか？
もしくは久し振りに安藤さんの手料理でもいいですよ』

寝てるとしたら返ってこないか。いつそ電話しちゃおうかな……あ！来た！起きてたんだ。良かった。と思ったのも束の間、私はそのメールで全身が凍りついてしまった。

『オレと淳、どっちが好きなの？』

な、何これ……イタズラ……じゃないよね……だって安藤さんの携帯からだし……や、やだ、どうしよう……何で？何でバレちゃったの？固まったままできるとさらに携帯が鳴った。

『淳と別れてオレだけと付き合ってくれるなら、十時にいけふくろうに来て。来なければ二度と会わない』

どうしようどうしよう……そんなこと急に言われたって……時間は……もう九時過ぎてる！早くしないと……と、とにかく落ち着こう。そして着替えよう。淳とどうするかは後で考えるとして、今は安藤さんに会いに行かなくちゃ。

私はベッドから飛び上がると、床に脱ぎっ放しのジーンズを引っ掴み、寝癖を直した。メイクをしてる時間は無い。緊急事態ノーメイク外出用の黒縁ダメガネをかけて、寝巻き部屋着兼用のTシャツ

のまま慌てて家を出た。

浦和駅まで走り、改札を抜け、階段を駆け上がるとちょうど電車が滑り込んできた。のんびりした休日に息を切らせて汗を掻きながら電車に乗り込んできた私に、一瞬視線が集まる。私は息を整えつつ、一つだけ空いていたシートに浅く腰掛ける。

どうやら十時には間に合いそうだ。休日の車内は、サラリーマンの姿はほとんどなく、これから遊びに行くであろう家族連れやカップルが大半を占めていた。

何で何で何でどうしてどうして……淳といるところを見られたのだろうか。でも一緒にいたからといって、付き合ってるかなんて分からないはず。それに安藤さんにはライブに行ったとき、淳のことを友達って言うてあるんだし。

怖い。安藤さんに会うのが怖い。でもしょうがない。悪いのは私だ。安藤さんと会えなくなるのは嫌だ。でも淳とも別れたくない。

赤羽で埼京線に乗り換え、池袋に着いた。電車を降りる。九時五十分。時間には何とか間に合ったけど……足取りが重い。とりあえずトイレに行つて鏡を見る。ひどい顔だ。直したはずの髪もぼさぼさだし、そもそもすっぱんだ。ノーマイクで外に出るなんて、中学生以来かもしれない。こんな状況で呼び出されてこんな顔で安藤さんに会うなんて、最悪もいいところ。

一步一步待ち合わせ場所に近付く。いけふくろうの丸い背中が見えた。ここからでは安藤さんは確認できない。膝が震える。脈拍が倍速になる。ひんやりとした石のいけふくろうに左手を触れると私は目を閉じた。触ったまま正面に回り込み目を開ける。しかしそこに

安藤さんの姿は無い。ほっ、まだ来てなかったんだ……少しだけ気が緩んだそのとき。

「偉い偉い、時間通りね」

女の人の声。振り返ると、およそいけふくろうには似つかわしくない、叶姉妹みたいな女が立っていた。

「やゝと会えたわねえ。亜季ちゃん？ あらあら随分慌ててたのねえ、お化粧もしないで……でも羨ましいわ。すっぴんでもそれだけ可愛いければ、一緒にお風呂入っても亮介をがっかりさせなくて済むものね。」

私なんか大変よお。ホテルに泊まった次の朝は、男より先に起きて寝ているうちにメイクしなきゃいけないから。素颜だと誰だか分からないってよく言われるの。失礼しちゃうわねえ全く。まああなたもすっぴんで可愛いのはそろそろ終わりだと思うけど。ホント女って大変よねえ」

一方的に喋る目の前の女をただ呆然と眺める。だ、誰だこの女……しかも私の名前と、亮介って……亮介！？ って安藤さん！？ じゃあこの女が……

「初めまして。柏葉美樹よ。よろしくねえ、上村亜季ちゃん？」

し、しかしこの人は……豊かな胸の谷間が三分の二以上露出してる上に、背中腰まではつくり開いている黒く長いドレス、ほっそりとした首にはシンプルだけど確実に高そうなシルバーのネックレス、両手の指には何カラットあるのか分からない大きなダイヤの指輪×3、手首にはこれまたシルバーにダイヤが埋め込まれたブレスレッ

ト。

左手にはブラダの黒のクラッチバッグ……は私も欲しかったヤツだ。そしてムダ毛処理の完璧な生脚の先にはシルバーのヒールの高いサングダルという、そのままレッドカーペットを歩けそうな姿。今すぐピーコにファッションチェックして欲しいっす。

しかも、肩まである緩くウェーブした、黒く艶めく髪の下にある顔も服装に負けず劣らずゴージャスで、可愛らしさと美しさがちょうど良いバランスで混じり合ったかなりの美人である。

落書きだらけで切なさ満点のいけふくろうを背にしてなおゴージャスオーラはその輝きを失わない。むしろ感化されたいけふくろうが鳳凰に見えてきて何度も目をこする。私は口を開けてバカみたいに見とれている。通り過ぎる男も女も漏れなく彼女を見ていく。

「やあだあ亜季ちゃんどうしたの？　行きましたよ？」

柏葉美樹と名乗る女は、腰をくねくね、お尻ふりふり、マリリンモンローよろしく階段を上り出した。だから背中開き過ぎだって。尾てい骨までいっちゃってるから。

「え、あ、あの、安藤さんは……」

私はようやく声を絞り出すと、科を作り身体の曲線を強調して振り向いた彼女は一言。

「来ないわよお」

何が何だか分からないが、とにかくこの女が安藤さんの見合い相手

で間違いなさそうだ。ということは先日赤羽のホームで真也くんとキスしていた女でもある。あのときはやや遠目に後姿しか見えなかったが、その横顔に見覚えがなくてもない。

湯婆婆並の眼力に

「ねえ亜季ちゃん、私喉渴いちゃった。どこかでお茶にしましょう？」

この容貌にしてこの甘ったるい話し方は男には効果絶大だろうが、同性からするとかなりイラっとくる。普通にOLやってたらまず友達はできない上にあからさまにいじめを受けた後、絶対に十倍にして返しそうなタイプ。

お茶するったって私の知る店は限られている。仕方ないので駅前のドトールへ。別に喫茶店までこの女のレベルに合わせることもないだろう。ちなみにどうでもいい情報だが、私はスタバよりドトールが好きなのだ。

「随分と狭いのねえ。まあいいわ、エスプレッソ頂ける？」

そう言々と柏葉美樹はさつさとソファにもたれてしまった。呆氣に取られてその姿を数秒見詰めていたがこの女、腰を上げる気配はなさそうだぞ……ってことは、ええ！？ 私がアンタの分まで買ってくるの！？

しかしこの女に逆らうと、かなりの確率でとっても恐ろしい仕打ちを受けそうな気がするのでここは大人しく言うことを聞いておいた。まあいい、私だって女王様と呼ばれる亜季様だぞ。コーヒーくらい奢ってやらあ。

「ありがと」

エスプレッソとカフェオレをトレーに乗せて席へと戻る。柏葉美樹はカップを人差し指と中指と親指で摘み小指を立てて、エスプレッソをくつくくつと一気に飲み干した。テーブルにカップを置いてふう、とぼつてりと艶のある唇の間から吐息を漏らす。女ながらその仕草に見入ってしまった。物凄くエロいんですけどこの人。

私たちは店の入り口近くに座っていて、出入りする客は老若男女問わず、私と柏葉美樹を露骨に見比べて通り過ぎた。それはそうだが、アカデミー賞から抜け出して、優雅に脚を組み美とエロスを放ちまくるゴージャス女と、寝起きでノーメイクで走って髪もぼさばさで地味メガネで服は部屋着同然で、靴だってよれたスニーカーの私の組み合わせはどう考えてもバランスが悪すぎる。

私だってこんな二人組みがいたらじろじろと見てしまうに違いない。ただ、当事者になると貧相担当の私はひたすら他人の視線が痛い。私は道端で金持ちに拾われた捨て猫の気分だった。

「一体何のマネですか？」

黙ってても仕方ないし、今さらノーメイク部屋着ルックはどうしようもないので私は開き直すことにした。しかし柏葉美樹は質問に答えない。

「私のことは誰だか分かってるわよねえ？」

「安藤さんの……お見合い相手」

すると何がおかしいのか、女は急に笑い出した。

「あっはっは、亮介のこと安藤さんって呼んでるの？ ホント、可愛いわねえ」

耐えろ！耐えるんだ亜季。ここで挑発に乗ったら思う壺だぞ。さっきのメールは恐らく、というかほぼ確実にこの女が送りつけてきたものだ。しかしどうやって安藤さんの携帯を手に入れたんだろう。

「ねえ亜季ちゃん、これ、返しといてくれる？ 今朝間違えて亮介の部屋から持ってきてしまったから」

そういつてバッグから取り出したのは見覚えのある赤い携帯電話だった。安藤さんのだ、間違いない。

「何であなたがこれを……」
「さあ？ 何でかしら」

今朝つて言つたよな、さつき。ということはまさか安藤さんの家に泊まった……？ いや、落ち着け。私と二人きりになっても手を出さずに帰したくらい奥手で誠実な安藤さんだ。いくら見合い相手とはいえ付き合ってもいない女を泊めたりはしないはず。しかし携帯は本物……くそう、この女、私の反応見て面白がっているな……負けてなるものか。

「ああ、安藤さんの携帯ですね。返しておきます」

努めて平常心を装い携帯を受け取る。さっきのメールが気になって仕方がない。この女が打ったメールを消しておかないと、安藤さんに見られたら終わりだ。手にした携帯をじっと眺めていると、

「心配しなくても大丈夫よお。さっきのは消しておいたから」

見透かされている……

「まゝったく可愛い顔してやることえげつないわよねえ。あんなに
尽くしてくれる彼氏がいるのに別の男、しかもよりによって私の亮
介に手を出すなんて」

身を乗り出した柏葉美樹の顔がぐんと近付く。湯婆婆並の眼力に押し潰されそうになる。しかしこのまま黙っていては敗北だ。勇気を出して言い返すのよ！ 亜季！

愛し合うにはメガネは邪魔だ

「私のこと随分調べてるみたいですけど、いつから安藤さんが美樹さんの男になったんですか？ あなたとは一回お見合いしただけで、しかもそれだつて断つたつて聞きましたけど」

柏葉美樹はさつきよりさらに顔を歪めると勢いよく笑い出した。その遠慮のない笑い声に、客も店員も店にいる全ての人間が柏葉美樹に注目した。尤も黙っていても嫌というほど男性陣の視線を集め続けているのだが。

「やだもう亜季ちゃんたら、無邪気もいいところ、食べちゃいたいくらいだわ。亮介がそう言ったの？ で、信じちゃったんだ？ あゝっはっはっは」

抑えろゝ抑えろゝこれは罠だ。この女の言っていることは100%嘘なのだ。

「……違うんですか？」

「違うも何も、私と亮介は夫婦よ」

ぶっちん、と脳の中の回路がまとめて何本か切れた。許容オーバーである。

「ふ、夫婦ってふざけてんじゃないわよ！ 私安藤さんの家に行つたのよ！？ どう見たって一人暮らしじゃない。そもそも最初に私に声かけてきたのは彼の方なんだからね！ 結婚してたらそんなことするわけないでしょ。それにアンタだつてつい最近まで真也くんと遊んでたじゃないの！ 駅のホームでキスなんかしちゃって！」

店中が静まり返っている。しまった……やってしまった。「他のお客様のご迷惑ですので」そう言われて私は店を追い出された。話の途中なので当然あの女も出てくるものと思い、繋がれた犬のように店の前で待っていた。

しかしヤツは腰を上げる気配すらなく、私の方を見ようとしないうちにバッグから文庫本を出して読み始めた。何でカモメのジョナサンだ……途方に暮れた私は仕方なく、その場を去った。

何なのあの女何なのあの女何なのあの女！？ わざわざ私を呼び出して何をしたかったのか、全く以って訳が分からない。安藤さんと結婚してるとか見え透いた嘘までつくし。でも私が淳と付き合っていることは知っている、それは間違いない。

せっかく池袋に来たが、精神的にも服装的にも楽しくショッピングなどという気にはとてもなれないのでさっさと帰ることにした。最悪のゴールデンウィークの幕開けだ。電車に乗って座ってぼーっとしていると徐々に落ち着いてきた。

柏葉美樹の目的は一つ。安藤さんを自分のものにすることだ。それにしても凄い女だった。「最高にヤラしいカラダだからね」。真也くんがそういうのも頷ける。

でもな、何で安藤さんなんだろう？ こういつちゃ何だけど安藤さんはバンドをやっているとはいえ基本フリーターなわけで、金持ち女が相手にするのは理解できない。それともパトロンになってメジャーにさせて「彼は私が面倒見たのよ」的な発言をしたいのかな……自分がお金持つてるから相手が貧乏だろうと何だろうと関係ないのか

もしれない。

しかしあの女、この間のライブに来てたのかな。あの格好だったらいくら暗くても身に着けた貴金属類がミラーボールの如く乱反射しやすく分かると思うけど。などと考えているうちに足は勝手に安藤さんのアパートへ向かっていた。だって……だって携帯返さなくちゃいけないしね。

チャイムを鳴らすと安藤さんはすぐに出てきた。私は堪らずしがみつく。

「あ、亜季ちゃん！？ どうしたの？ メガネなんかかけてるし」「本当のことが知りたいの」

この部屋に上がるのは三回目だ。私は赤い携帯を差し出した。

「あ！ オレの携帯……これどこで見つけたの？ ずっと探してたんだ」

「探してた……？」

「うん。ほら、日曜日のライブが終わって、帰ろうとしたら携帯がないことに気付いたんだ。メンバーに散々鳴らしてもらったんだけどライブハウスになくってさ。本番前までは使ってたからどっかで落としたってことはないし、変だなあって……あ」

それで充分だった。それを聞いて私は涙が出てきた。安藤さんに抱きついてそのまま唇を重ねた。良かった。あの女は昨日ここに泊まったりしていなかったのだ。ライブハウスで隙を見て安藤さんの荷物の中から携帯を盗んだのだ。

ほんの一瞬でも安藤さんを疑った自分を恥じた。でも男の本能を刺激するためだけに生まれてきたような、フェロモンの塊のような柏葉美樹に言い寄られたら、拒否できる男はいるのだろうか。でも私は負けない。

私の身体は止められなくなっていた。泣きながら耳に口付け顎に口付け首筋に口付けた。愛し合うにはメガネは邪魔だ。私は外して投げ捨てた。

「亜季ちゃん……」

安藤さんの手が私の身体の色んな場所に優しく触れていく。皮膚と皮膚が触れて伝わる体温が嬉しかった。彼の身体の重みも心地良かった。遂に私たちは一つになった。

クリスチアーノ・ロナウドより数段素早い

「どうしたの？ 突然」

私たちは裸で横になったまま。

「突然来たら迷惑？」

「うっん。いつでも歓迎するよ」

何が夫婦だ。あんな虚言に振り回された自分に腹が立つ。

「だって安藤さん、いつも連絡くれないから」

「ごめん。前は止められてたし今回はなくなっちゃったし。何か、

亜季ちゃんと出会ってから携帯トラブルが多いね」

「あゝ私のせいにして！ お金払わないから止められるんでしょ！

このこのー！」

「わゝゝごめんごめん！」

「ふふ……ねえ、また安藤さんの料理食べたいな」

「お、いいですよゝ何にしますか？」

でも結局ゴハンは食べられなかった。お互い身体に触れて肌に触れられてを繰り返しているうちに再び止まらなくなつて、私たちはもう一度抱き合った。そしてその後、心地良い疲労の中、眠ってしまったのだった。

目覚めると三時を過ぎていた。バイトは五時からだ。一度家に帰つて、シャワーを浴びて着替えたかったので、本当はもっと一緒にいたかったけど仕方なく別れた。駅まで送ってくれた安藤さんは、改札の手前で私を抱き寄せるとキスをした。そのとき初めてメガネを

忘れてきた事に気付いた。そしてすっぴんであることに。

「今日の私……ひどい顔でしょ」

こんな姿を見られて、今さらながら急に恥ずかしさが込み上げる。

「全然。素顔も凄え可愛い」

そう言うと安藤さんはもう一度キスをしてくれた。

「亜季亜季亜季亜季見て見て見て見て~~~~！」

次の日学校に着くと、いつも通り土埃を巻き上げながら淳が突進してきた。右手には携帯を掲げている。どうせ自分で撮った下らない写真でも自慢しにきたのだろうと画面を見た瞬間、渡された携帯を落としてしまった。

「ちょっと亜季気を付けてよ」

「あ、ああゴメンゴメン。手が滑った」

あろうことかそこには全力笑顔の淳と、ちょっとカッコつけた表情の安藤さんが顔を寄せ合って写っていたのだ。夢だ……これは悪い夢に違いない。私は見なかったことにしてふらふらと講義室へ向かった。

「あ、亜季、待ってよ」

追いつがるチワワ。頼むから放っておいて。

「実は昨日さ、浩介の家に遊びに行ったんだ。そうしたら偶然我がビーグルスのボーカル安藤亮介様がいたんだよね。今は一人暮らししてるらしいんだけど、昨日の夜はたまたま用事で実家に帰って来たんだって。オレもうテンション上がりまくっちゃって握手してCDにサインしてもらったんだ。そしたら安藤様が何と！オレのこと知ってたんだよね」

そりゃああんな小規模ライブで毎回最前列で歌詞完璧に覚えて歌い踊りまくれば嫌でも覚えるでしょうよ。

「んでビーグルスの話でチョー盛り上がってさ！楽しかった」
「……あれ？ 亜季？どうしたの？ あ、分かった。亜季怒ってるんでしょ」

え？

「オレだけ安藤様と楽しい時間過ごしちゃったから。ホントは呼ぼうと思ったんだよ？ でもさ、亜季昨日バイトだったからしょうがないと思って……また今度安藤様と会う約束が取れたらそのときはね？ それでいいでしょ？」

「ね？」 じゃねーよっ！ いいわけねーだろっ！ つーかなんで安藤「様」になつてんだっ！

講義終了後、遊びに行こうと誘ってきた淳をクリスチアーノ・ロナウドより数段素早い華麗なフエイントでかわし、沙耶の手を引っ掴むと我らが会議室ドールへと駆け込んだ。

「ななな何よ亜季、どうしたの？ いいの？ 淳くん放ったらかしで」

「どうしたもこうしたも……」

そのとき携帯が鳴る。淳からのメール。『どこにいるの？』というメッセージと共に今朝の写真が送られてきた。ある意味ナイスなイミング。

「これ見て」

「あらあら淳くん、幸せそうな顔しちゃってまあ」

「どうじよ〜」

「分かる！ 分かるよ亜季〜 安藤さんに淳くん取られちゃったんだもんね。よりによつて相手が男だなんてね。悲しいよね、切ないよね。よしよいい子いい子」

「え〜んえ〜んまさか男に負けるなんて〜って違うわ！ 頭を撫でるな！」

「お、キレのある乗り突っ込み。ま、淳くんの熱狂振りからしてこうなることは時間の問題だと思ってたけどね。亜季だって分かってたんじゃない？」

「いずれは接近するとは思ってたけど……まさかこんな早くとは……」

「大丈夫よ。淳くんにとって安藤さんは憧れの存在なんですよ？ ということは普通の友達とは違うわけで、あんまりプライベートなことは喋らないんじゃないかな？ それに安藤さんだって一応プロなんだから、ファンに対してその辺の線引きはするだろうし」

「う〜ん、でもな〜……」

そのとき店の自動ドアが開き、一度見たら忘れないメタルな顔の男が現れた。

この世で最も愚かな質問は

「これはこれはお二人揃って何の相談ですか？」

「真也くん！」

私はこのとき生まれて初めて人間の瞳がハートになるのを目撃した。沙耶の顔が一気に華やいだ。恋する女は綺麗さ……決してお世辞ではないのだ。ただでさえ相当の美人である。今の沙耶ならミスユニバースも狙えるだろう。

「平気だって亜季。案ずるより産むが易しって言うでしょ！　じゃね」

沙耶は立ち上がると真也くんの腕に腕を絡ませた。

「いいの？　女王様一人にして」

「いいのいいの。今から淳くんが来るから」

沙耶！　お前というヤツは……勝手なこと言って！　そもそも諺の使い方違うだろうが！

あ、そうだ！　真也くんには昨日のことを話そうと思ってたんだ。私は店の外から私に手を振る真也くんに、携帯と自分を交互に指差して「後で電話くれ」の必死のジェスチャーを送り続けた。果たして理解したかどうか……

それから本当に淳がやって来た。しかし暑苦しくビーグルスの話しかない淳にうんざりした私は「頭痛いから」といって早々に引き上げたのだった。

夜、部屋のベッドでうとうとし始めた頃、携帯がぶるぶると鳴り出した。

「も……しもし」

「今晚は女王様。寝てた？」

何だ真也くんか……真也くん！？ 一気に覚醒。

「ちよつと何なのあの女！」

「あの女……ひよつとして美樹に会った？」

「あんな侮辱初めてだわ！」

「お、どうされました？」

「どうしたもこうしたもないわよ！ あの女、安藤さんの携帯使って私を誘き出して、結婚してるとか嘘ばかり並べて……それに、何で柏葉美樹が淳のことまで知ってるの！？ まさか真也くん……」

「待て待て、いくらオレでもそこまでは言わないよ。今の美樹にとつて安藤に近づく女はみんな敵だ。女王様のことは探偵でも雇って調べたんだろ」

ち、人間ヒマだとロクなことしないな。

「ねえ真也くん、何で柏葉美樹はそこまでして安藤さんに執着するわけ？ 確かにカッコいいしバンドやってるけど……お金持ちのお嬢様が夢中になる理由が分からない。それに安藤さんとはお見合いのときに一度会っただけなんだよ？」

「そのお見合いが原因だろ」

「どういうこと？」

「ん〜どっから話すかな……お見合いの目的は安藤の親父さんの楽器店を助けるためだっていうのは知ってるだろ？」

「うん」

「あの話、実は安藤家の方から申し出たらしいんだ」

えっ！？

「経営のことはよく分からないけど、店の看板を書き換えるから救って欲しいみたいな感じらしい」

「それってつまり、安藤楽器が全部柏葉楽器になっちゃってこと？」

「そついうこと。つまり買収だな」

そんな……

「まあそんなこんなで両社に繋がりができた。そこで美樹の登場だ。アイツは安藤家に男兄弟がいることを知ると早速どんな人物かを調べ上げた」

調査好きな女だな。あ、男好きなのか。

「弟の浩介はまだ大学生だからとりあえず置いといて、兄の亮介はどうやら地元でバンドをやっているらしいと。これは見に行かないとということでライブに行ったところ、かなり気に入ったらしい。美樹はそのことを父親に話したみたいなんだけど、そうしたら両親揃って乗り気になっちゃったみたいで」

「乗り気って……結婚？」

「そう。両親は遊んではかりでいつまでたっても結婚しない美樹に手を焼いていた。柏葉楽器といえば全国に店があるし、他にも色々やってる大企業だからな。生まれたときから裕福でしかも一人娘。」

そりゃあ我儘にも育つわな。その上あの容姿だろ？ 男なんか医者から弁護士から政治家から俳優から普通のサラリーマンから大学生、下は中学生から上は還暦に至るまで食い放題」

「ちゅ、中学生！？ 還暦ってお元気な……」

「見た目が気に入れば年齢も職業も関係ないらしい。まあオレも食われた一人だけど。とにかくアイツは気に入った男は絶対に落とす」

「でもさ、何でいきなりお見合いなの？ 柏葉美樹にしてみれば安藤さんだって遊び相手の一人くらいにしか考えてないわけでしょ？」

「確かに買収の話は安藤側からの提案なんだけど、店舗を増やそうと考えていた柏葉側にとってもまんざらでもなかったらしい。だから買収とはいえかなり友好的で、柏葉家にとっても安藤家とはこれからの良い関係が続けていきたいと望んでいる。つまり美樹は安藤亮介に対して、これまでの男みたいに軽い気持ちで付き合って、飽きたら捨てる、というわけにはいかなかったんだ。本人もそれは承知の上で安藤亮介に声をかけたわけだし、自分自身年齢的にも落ち着きたいと考えてたんじゃないのかな」

「柏葉家にとっても安藤家にとっても良い縁談だ……ねえ柏葉美樹っていくつなの？」

あの女、ゴージャス過ぎてプリンセス天功ばりに年齢不詳だったが、四十はいかないまでも実は三十はとくに越えているんじゃないだろうか。

「オレの予想では二十八」

「何よそれ」

「美樹曰く『この世で最も愚かな質問は女性に年齢を聞くことよ』だそうだ」

お、いいねそれ。頂き。今度使ってみようっと。

「じゃあ私の予想は……まあいいか。それにしても」

恐ろしく綺麗な人だ、と言おうと思ったけどやめた。敵を褒めてる場合かつ。

ジュエリーミキ

「ま、歳のことはともかく、こういうのは結局本人同士の意味だからね。いくら周りが盛り上がっても無理矢理結婚なんてさせられないし。見合いをしたときは既に安藤亮介は女王様に惚れていた。だから断った」

私より柏葉美樹の方がよっぽど女王様と呼ばれるに相応しいと思うが。

「じゃあ私が現れなかったら安藤さんは結婚してた……？」

「そこまでは分からないけど。とにかく買収の話はもうまとまってるから二人が結婚しようがしまいがひとまず安藤家は安泰なわけだ。その代わり安藤楽器の暖簾はなくなるけどね」

「でも安藤さんは、自分が美樹と結婚しないと倒産するかもって……」

「そりゃあ安藤の親父さんにしてみれば柏葉家と親戚になった方がより安心できるだろうからね。出来れば結婚して欲しいと思うのも無理はないだろ。それも向こう側からの申し出だし、さらにあの美貌だ。オレが親でも良い話だと思うぜ。嘘も方便てやつだな」

「それでも安藤さんは断った」

「ああ。美樹にとつてはこれ以上の屈辱はないわな。これまで狙って落ちなかった男はいないし振られたこともない。しかも今回は『経営上良い関係を保ちたい』という家族ぐるみの圧力まであるにもかかわらず、ロクに話もせず断られたんだ。どんな手を使ってでもビーグルを落としかかるだろう」

「ど、どうしよう……淳のこと知ってるし……」

「お悔やみ申し上げますとしか言えないね。美樹は遊ぶには最高だけど、敵に回したらあんな恐ろしい女はいないぜ」

「真也くん……なんでそこまで詳しく知ってるの？」

「美樹はオレのことは結構気に入ってたからね。酒が入ると自慢げにぺらぺら喋ってくれた。『私昔からジュエリーショップ開きたかったのよねえ。だから安藤楽器を買い取ったらパパにいくつかお店貰ってやろうかな』。ジュエリーミキ。どう？』とか言ってたし」

ぬぬぬぬわゝゝにがジュエリーミキだ！ 調子に乗りやがって！

電話を切って布団の上でもんどりうった。そのついでに足の小指をベッドの角にぶつける。なぜ常に小指なのか？ 額に汗を滲ませ尋常ならざる痛みを堪えつつ状況を整理することにした。

ひとまず安藤家の経営難は峠を越したわけだ。お店はなくなっちゃうけどその代わり借金もなくなるのだろう。だから安藤さんは柏葉美樹と強制的に結婚させられることはなくなった。しかしプライドの高い美樹は何としてでも安藤さんを手に入れたと考えている。結婚するかどうかは別にして、とにかく振り向かせたいのだろう。そのためには時間も金も惜しまないはず。

そして第一段階として安藤さんの彼女である私を調べたところ、二股をかけていることを突き止めた……不利だ。これはかなり不利な状況だ。柏葉美樹が淳のことを安藤さんに話せば、少なくとも私と安藤さんの間に亀裂が生じるのは間違いない。そこに付け入れば容易く安藤さんを手中に収められる……不利っていうかほぼ絶望的状况。負け確定。

「でもさ、結局は安藤さんがその美樹って女を好きになるかどうかでしょ？」

一人で考えていても仕方ないので早速沙耶に電話した。沙耶は柏葉美樹が真也くんの元カノだということは知らない。だからさっきの話を真也くんから聞いたとは言えないので、昨日美樹に誘き出されたときに本人から聞いたという設定で話を進めた。

「例え亜季と安藤さんを別れさせることが出来たとしても、安藤さんが振り向くとは限らないじゃない」

「沙耶。それはあの女に会ったことがないからそんな呑気なことが言えるのよ」

「そんなに凄いの？」

「エロスの化身」

「けし……ってまじで……あ、でもさ、安藤さんだってお見合いのときに美樹に会ったけどあっさり断ったんでしょ？」

「んっふっふそりゃあそのとき安藤さんはこの女王亜季様に夢中でしたからね！　いくらエロスの化身といえども他の女に恋焦がれる男にはどうにも手を出せないってことよ」

「はいはいあゝそうですか。鼻息うるさいよ……ってことはやっぱり美樹の負けなんじゃない？　安藤さんは亜季が好きなんでしょ？　それで充分だと思うけど」

「だゝから、そこで切り札として淳のことをバラして、安藤さんの私に対する気持ちに揺さぶりをかけるんじゃない」

「ああそついうことか。で、亜季はどうしたいの？」

「美樹には早々にこの世から消えてもらって、安藤さんとはこれからも盛り上がって、淳とは今まで通り仲良くやる」

「随分強欲ね。そんな都合よく世界が回るわけないでしょうが。そもそも二股かけてる時点で面倒なのに、さらに厄介事増えたらもうお手上げじゃない」

「そんなこと言わないでゝゝそこを何とかゝゝ」

「お、そうだ。一番簡単かつ丸く収まる方法思い付いた」

「ナニナニナニニ！？」

「安藤さんは美樹に任せてきつぱり諦める。そしてこれまで通り淳くんと仲良くやる」

「……そんな小学生でも言いそうなありきたりの答えなんか求めてないっつーの。東大の一次通ったんだからもつと柔軟性に富み意外性のある、それでいて全国民が納得できる答えをちょーだい」

「なに勝手なことばかり言ってるのよ。自業自得のクセして……要は美樹が安藤さん以外の男に目を向ければいいんでしょ？」

「そうだけど、そんな人いる？ つーか美樹の好みなんか知らないし。まあ基本的に見た目重視らしいけど」

「もしくはこつちも美樹の弱みを握るか……」

美樹の弱み？ あの完全無欠のエロス大魔神に弱みなんかあるのだから？

「後はそうね……亜季が手を引いたと思わせるか……」

「いや！ こそこそするのはやめよ！ こうなったら全面対決よ！」

「対決って……さっき自分で勝ち目ないって言ったじゃない」

「もうごちゃごちゃ考えるのはいい加減嫌になったの！ 私が身を引こうが引くまいがどっちにしたって淳のことはバラすんだろっし、それに侮辱されたままじゃ腹の虫が治まらない！」

「うわ出た、ムシヤクシヤするとどうでもよくなって丸投げ炸裂のB型！ 対決っていったってどうするの？ 安藤さんに亜季か美樹か選ばせるってこと？」

「それはもう答えが出るでしょ？ 見た目は引き分けでも人間性で私の圧勝なんだから。とにかくギャフンと言わせてやりたいの！」

とは言ったものの結局具体的な行動は思い付かず、再び等身大プーさん相手に悶えていると携帯が鳴った。もしかや沙耶、千載一遇のグッドアイデアが浮かんだか？

エロス大明神に高いランチ

「沙耶なんか思い付い……」

「亜季ちゃん、起こしちゃった？」

「あああ安藤さん！？ ううん平気平気寝てない寝てない。これから本でも読もうかな？なんてはは……」

「そっか……実はさ、聞きたいことがあるんだ」

この感じ。この声の感じ。私は身を硬くした。悪いことを聞かされる前の、黒くて鈍い塊が胃にのしかかる。

「昨夜、亜季ちゃんを送った後実家に帰ったんだ。まあ実家って言うても大宮なんだけどね。そうしたら淳くんが遊びに来てて……」

「あ、ああ、何かそうらしいね。一緒に飲んだんでしょ？ 淳、憧れの安藤さんに会えて凄く楽しかったって言ってたよ。そうそう、淳と写真撮ったんでしょ？ 自慢気に見せられちゃった。それにしても凄いやね、歌詞とか全部覚えて……」

「亜季ちゃん」

「は、はい」

「何で嘘ついたの？」

ゲームオーバー。

「淳から……聞いたの？」

「質問に答えて。何で彼氏いないって言ったの？」

「……安藤さんだから」

「え？」

「声かけてくれたのが安藤さんだったから」

「どういうこと？」

「安藤さんじゃなかったら、嘘なんかつかなかった。ううん、それ以前にメールだってしなかったと思う。コンビ二ですつと安藤さんが私のこと気になっていたように……私も安藤さんのこと見てた。多分、初めて見たときからずっと。でも私には淳がいたし……いなくても私から声かけたかどうかは分からないけど……とにかく安藤さんは私に声をかけてきた。嬉しかった。それで会って話して、舞い上がった。だってカッコイイんだもん。それだけじゃない、優しくて、誠実で……一気に引き込まれた。離したくないって、嫌われたくないって思った。恋人に……なりたいてって本気で思った」

「なったよね？ オレたち恋人同士になったよね？ じゃあどうして……例えばあときは嘘をついてたとしても、その後で淳くんと別れてくれれば……」

「淳は……淳とは……」

別れたくない、なんてこの場ではとても言えない。

「いいよ、分かった。好きなんだね、淳くんのこと。オレ負けないから。亜季ちゃんがオレだけ見てくれるように、頑張るから」

「安藤さん……」

「それと、オレだけ知ってるのは不公平だから淳くんには正直に話す。いいよね？」

仕方ないか……いつまでも続かないもんね、こんなこと。

「あ！ 安藤さん、私ね、昨日美樹さんに会ったの」

「美樹って……柏葉美樹！？ どうして……」

「安藤さんの携帯盗ったのは美樹さんなの」

「そっか」

「そっかって、驚かないの？」

「何となく分かった。ライブに毎回来てたのは知ってるし、そん

なことするのはアイツしかないから」

「それで朝その携帯からメールが来て、てっきり安藤さんからだと
思ってた……」

「行ってみたら柏葉美樹だったってわけか。凄い女だろ？」

「うん。道行く人がみんな見てた。普段からあんな格好なの？」

「さあ？ ライブのときはさすがに控えてるみたいだけど」

「でも安藤さん、よく結婚断ったね」

「何で？」

「だってあの人……エロスの化身じゃない」

「ぶっ……エロスって、確かにね」

「あんなフェロモンむんむんセックスアピールしまくりの人に誘わ
れたら断れる男のいないと思ったから。それにお店のこともある
のに」

「まあね。普通じゃない美人なのは認めるけど。でもね、オレ嫌い
なんだ、ああいう男を見下した女って。だってアイツ、自分を拒絶
する男なんてこの世にいるわけないって思ってるだろ？ 実際そう
やって生きて来たのかも知れないけどさ。親父のことは確かに気に
なっただけど、それでも美樹と一緒になっただころで上手くいくはず
もないし。とにかくあんな女の言い成りになるのは御免だからね」

「さすがはロッカー、反骨精神だね」

「はは、それにそのときはもう、亜季ちゃんに夢中だったから」

安藤さん、そんなに私のこと……そうだとは思ってたけどやっぱりそ
うなんだ。

「じゃあ……もう切るね。おやすみ」

「おやすみなさい」

許してもらえた……って思っていたのかな。絶対に嫌われると思っ
たのにな。本当に優しい人。でもこれで淳にもバレちゃうんだ。悲

しむだろうな……淳には嫌われるかもしれないな。

しかしこれで怖いものはなくなった。私の二股が周知の事実になってしまえば、柏葉美樹が私を脅迫することはできない。さらに安藤さんは柏葉美樹を嫌っているのだから、あの女との対決は私の完全勝利で幕を閉じるわけだ。一気に気が楽になって睡魔が襲い、私は眠りに着いた。

遠くで音楽が流れている。知っている曲だ。聞き慣れた、携帯の着メロ。私は手にとって電話に出た。寝起きで意識がぼやけている。

「はい……」

「亜季ちゃん？ 今頃お目覚めかしら？ ああダメじゃなあい。ゴールデンウィークだけど今日は平日よ？ 学校はどうしたの？」

このバニラアイスにチョコチップクッキーを砕いて散らし、ホイップクリームを乗せた上からさらにキャラメルソースをかけたような甘ったるい声はもしかして……

「美樹……さん？」

「やあだあそうよ。私のこともう忘れちゃったの？ この番号、携帯にちゃんと登録しておいてね。そうそう、昨日はごめんなさいねえ。本に夢中になって亜季ちゃんのことすっかり放ったらかしにしちゃったみたいで。お詫びにお昼ご馳走するわ」

何が本に夢中だ。完全に意図的なシカトだろうが。もうこの女の虚言には惑わされない。

「一時に昨日の場所で待ってるから」

そして一方的に切れた。今何時だ……十時……やば、完全に寝過
した。いいや、今日は学校サボる。エロス大明神に高いランチ奢っ
てもらって帰ってこよう。どうせ恐れるものはないしあの女に気を
使うこともないのだから。

お見合いする前にエッチしちゃう

十二時五十五分、いけふくろうに着くと柏葉美樹は既に立って待っていた。高飛車なお嬢様の割には約束の時間にはきちんと来るんだな。今日はタンクトップにジーンズというカジュアルな服装だ。もちろん胸はガッツリ開いているけどね。今日は私もちやんと準備したし、まあこれなら一緒に歩いてもおかしくないだろう。それにしても脚なげー……

「お待ちせしました」

「ああら亜季ちゃん、これが本来の姿ってわけね。じゃあ行きましようか」

池袋の繁華街を抜けて、連れて行かれたのは裏通りにある小ぢんまりとした可愛いフランス料理屋だった。店の中は小さく、二十席ほどしかない。白を基調とした店内は質素で、オレンジ色の革張りの椅子が良いアクセントとなっていた。

柏葉美樹は常連らしく、白髪交じりの人の良さそうなオーナーシェフらしき人物と二言三言言葉を交わし、私達は奥の席へと案内された。平日の昼過ぎ、しかもフランス料理屋ということもあり、店に客はほとんどない。ご近所有閑マダムの二人組みが優雅に食後のコーヒーを楽しんでいるだけだった。

テーブルの傍に行くとシェフは笑顔で椅子を引いてくれた。おお……こんな扱いは初めてだぞ。つかフランス料理も初めてだけど。テーブルには既にフォーク&ナイフとおもちゃの王冠のように形作られたナプキンがセットされていた。マナーとか知らないけどいいのかな？

席に着いて辺りを見回すがメニューが見当たらない。柏葉美樹はソファにゆったりと腰を沈めたままだ。こんなお店には来たことがないので落ち着きなく視線を行ったり来たりさせていると、シェフが何か運んできた。

「アミューズでございます」

お皿に蓮華とスプーンが乗っている。蓮華にはグリーンと黒のツヤツヤとしたオリーブの実が、スプーンには茹でた海老に芥子マヨネーズ的な色のソースがちょこんと乗っている。ここでやっと理解した。メニューはないのだと。

それらを口に放り込むとすぐに次の料理が運ばれてきた。ジャガイモの冷たいスープ、前菜にカニとクスクスのサラダ、他に客がいないせいもあり、料理は私が食べ終わるのを見計らったかのように、途切れることなく出てくる。

メインにレアな焼き具合の鴨肉。皮をパリパリに焼いて何だかよく分からないソースがかかった真鯛、さらに自家製のフランスパンはお代わりし放題だった。最後のデザートはシンプルなプリンだったが、口に入れるとトロトロに溶け、今まで食べた中で最も美味しかった。全て食べ終わり、一息つくと黙ったまま私をじっと見詰める柏葉美樹の視線に気付く。

「よっばどお腹空いてたのねえ」

その言葉で急に恥ずかしくなった。朝から何も食べていなかった上にどれもこれもあまりに美味しくて、なおかつ初めての味に我を忘れてひたすら食べ続けていたのだ。パンも何回もお代わりしてしま

った。

「いいのよ。美味しそうに食べる子は好きよ」

コーヒを飲みながら優雅に微笑んで私を見る。な、何だ何だ、私は未だかつて女の人にこれほどまじまじと見つめられた事はない。ひょっとして柏葉美樹は同性でもいけるのか？

「亜季ちゃんてホント可愛いわねえ……私ねえ、本当はもうどうでもいいんだあ」

何がですか、と言いかけてやめた。口を挟むとまたいいようにおちよくられるに決まっている。私はちよつと首を傾げて顔を見る。長い睫毛、大きな瞳、丸過ぎず筋張つてもいない適度な高さの鼻、そして男なら絶対にキスしたくなるだろう少し厚めの艶やかな唇……うーん、見れば見るほどエロい。

「亮介のこと。どんな子かなあつてライブ見に行つて、可愛いからちよつと遊んじゃおつかなくつて、その程度だったんだけど。でも亮介の話したら『これはいい機会だ』とかつてパパもママもスッゴイ盛り上がりつつあって、勝手に話どんどん進めちゃつて。パパの会社のこともあるし私のせいで話がこじれても嫌だったから一応顔を立ててお見合いしたけど……別にまだ結婚したいってわけでもないしね。だってさあ、有り得ないでしょお？」

「何が……ですか？」

さすがに二度目だし疑問形だったので相槌を入れる。

「セックスもしないで結婚なんて」

聞いた瞬間口に入れた熱いコーヒーをうまく飲み込めなくなり、思い切りむせてしまった。

「やあだあ亜季ちゃん大丈夫？　だってそう思わなあい？　それとも亜季ちゃんは結婚するまで身体は許さないっていう今時珍しいタイプ？」

「そ、そんなことはないですけど。まあ確かに……」

特におかしなことを言っているわけではないし納得もできるけど、上品な料理を出す可愛いこのお店の中で、真昼間から酒も飲んでないのにいきなりそんな単語を聞かされるとは思わなかった。しかも柏葉美樹の口からその言葉が出ると、この上なく卑猥だ。

「でしょお？　だからまずお見合いの前に試してみたかったのよねえ」

いや別にお見合いの後で試せばいいじゃん。お見合い↓セックス↓結婚でいいじゃん。お見合いする前にエッチしちゃうってその方がどうかと思いますよ？

「ねえ、亮介ってどう？　上手？　私ね、こう見えてミュージシャンとだけはお付き合いしたことないの。なぐんか縁がないのよねえ。ほら、ギタリストって指先が器用だから上手いって言うじゃない？　あれ？　ピアニストだったかしら？」

知らねーよそんな話。だいたい安藤さんボーカル……あ、ギターも弾くか。それにしてもこの話題まだ続くのかな……

「どう……ですかね、普通なんじゃないですか？」

まだ一度（厳密には二度だけど）しかしていないし、あのときはかなり自分の気持ちが昂ぶってて良く覚えていないのだ。どうもこうもない。

「じゃあ、淳くんとどっちが気持ち良かった？」

ぐ……来たな、今日こそは絶対に堪えてみせる。

顔面ぼこばこのロッキーの

「淳としてるときは淳のことだけ、安藤さんとしてるときは安藤さんのことだけしか考えてないので比較なんかできません」

「ふうん……やっぱり亜季ちゃんてウブなのねえ」

「どついう意味ですか？」

「だあってそんなに可愛い顔してるのに、経験人数少ないでしょ。

私の予想だとそおねえ……初体験が高校二年で、これまで合わせて四〇五人つてとこかしら？」

な！ 何でそこまで分かるんだ……やはり化身だからか？

「お、多けりやいいってモノでもないと思いますけど？」

柏葉美樹は私の発言を聞くと目をまん丸にした。そして爆笑。

「あつはつはやあだあ本気で言ってるのお？ 色んな男と寝てみなきゃ本当に気持ち良いセックスできないわよ？ 凹凸の相性だってあるんだし」

おおお凹凸！？

「わ、私は身体より心重視なんです！ 安売りはしないの！ 美樹さんと一緒にしないで！」

「そんなこと言っているとすぐに見向きもされなくなるわよ。花の命は短いんだから。そもそも安売りっていう考え方が間違ってるの。確かにね、言い寄ってくる男を断り切れなくて、流されて寝ちやうのは安売りだけど、自分から求める分には安売りじゃないわ。挑戦なのよ」

「ちょ、挑戦!？」

「そうよ、修行と言ってもいいわ。究極の快感を求めてひたすら男を渡り歩くの。イチローさんが偉大な記録を目指して毎日こつこつヒットを打つと同じ。三蔵法師が地道に歩いて天竺を目指すのと同じなのよ。日々の小さな努力の積み重ねだけが大きな目的を達成する唯一の方法なのよ」

全っっ然違うぞそれ! しかも三蔵法師は馬に乗ってるしね! くそう、少しは反撃せねば。昨日の屈辱もあるんだし。

「美樹さんて、いつもそんなことばかり考えてるんですか?」

「そんなことって?」

「せ、せつくす……」

分かってて言わすな! 顔が赤くなってきた。

「そうよお、当たり前じゃない」

にべも無く言い切られてしまった。反撃失敗。ダメだ、この人には勝てん。

「いい? 亜季ちゃん。人間が他の動物と決定的に違うところって何か分かる?」

突然何を言い出すんだ?

「言葉話す……とかですか?」

「違うわ。人間ほどはつきりとはしていなくても言語を持つ動物はたくさんいるのよ。群で生活する動物は敵が来たら警戒の声を上げて仲間に知らせたりするじゃない。お互いコミュニケーションが取

れるのであれば、それは言葉の代わりと言えるんじゃない？」

「そっか。じゃあ……笑う」

「そうね、笑うっていうか感情に合わせて表情を変えるのは人間だけかもしれない。でも他の動物にも感情はあると思うけど？ 犬だって嬉しいときは尻尾振ったりするし」

「とすると……あ、二本足で歩く」

「正解……と言いたところだけでもう一つ足りないわ。体毛がなくなっただのよ」

「そう言われれば確かにそうだ」

「じゃあ何で人間だけが毛がなくなって二足歩行になったと思う？別にいいじゃない、猿みたいに手を着いて歩いたって。猿やチンパンジーは二足歩行できないけど、足の指も手と同じくらい器用に使うのよ。単純に考えたら人間より二倍手仕事が出る。両手両足でいっぺんに文字が書けたら楽しいと思わない？それに比べて人間の足の指なんて何の役にも立たないでしょ？」

そうつすね。

「体毛だっであつた方が寒さや怪我から身を守るわけだし。実際矛盾してるのよ。毛がなくても寒さに耐えられる皮膚ならいいわよ。でも実際はどう？ 冬はおるか春や秋だって夜は肌寒くて裸じゃ風邪引いちゃうでしょ？ 地域によっては命の危険すら生じる。だったらなんで体毛が退化したのか」

……何ででしょ？ 言われっ放しだとバカだと思われそうなので、一応反論してみる。

「でもその代わり……かどつかは分からないけど、人間は他の動物と比べて高い知性を得たわけじゃないですか。確かに足の指で鉛筆は握れないし服を着ないと気候から身を守れない。他の動物に比べ

て自然界を生き抜く体力は低下したけど、それを補って余りある能力を手に入れたじゃないですか」

「生命力と引き換えに考える力を入れた、そう言いたいよね？」

「そうだと思いますよ。知識を増やして弱点を克服してきた。それが人間の進化だと思います。怪我や病気を治すという行為だって人間しかやらない。その結果人間は動物の中でもかなり長命になったじゃないですか」

何でこんな話してんの？

「違うわ。人間はね、エロスに向かって進化した結果二足歩行になり体毛が退化し言語を操り様々な道具を生み出したのよ」

はい？

「基本的なことを聞いわ。全ての生命体の目的は何？」

「目的……？」

「そう。犬でも猫でも蝉でも桜でもタンポポでもミジンコでも。全ての生き物が生きる理由よ」

「それは……子孫を残すため、ですよね」

「まあそれが普通の答えね」

「そうじゃないんでしょうか……」

「厳密に言えば『遺伝子のコピーを残すため』よ」

「遺伝子……」

「四十六億年の遙か昔、宇宙で惑星同士が衝突した。そして様々な条件が複雑に重なり合って地球という宇宙で唯一生命体の存在する奇跡の惑星が誕生したの。その水の惑星の代名詞である大洋の海水の中で誕生した有機物が地球上での最初の生命と言われているわ」

何が言いたいんだろう。

「その最初の生命体、仮に『ガイア』と名付けるわね。ガイアちゃんは生まれながらにして考えたわけ。せっかく生まれてきたのはいけど、このまま何もせずに時間が経てばやがて命が尽きてしまう。死んでしまえば全てが終わる。この世に生を受けたからには何とかせねば……ガイアの血を絶やしてはならぬ！　ってね」

ガイアちゃん……本当に叫んだのだろうか。顔面ぼこぼこのロッキーのエイドリアン！　の絵が浮かんできた。もしくは「オームの怒りは大地の怒りじゃ！」って言ったお婆さん。

ガイアちゃんの最高傑作

「ガイアちゃんは色々試したのよ。この地球という環境の中で、どういう身体の形でどのくらいの大きさで、どこで暮らして何を食べる生命体が最も永く自分の遺伝子を引き継いでくれるのかを。海の中がいいのか、陸に上がった方がいいのか、空を飛んだほうがいいのか。はたまた動かずに根を張ってじっとしている方が賢明なのか、それとも他の生き物に寄生する方が楽でいいのか。『ガイア』という遺伝子を半永久的に引き継がせるために思い付く限りのありとあらゆる形態の生命体を創ってきたの。」

その結果数え切れないほどの生物が誕生しては消えていった。絶滅した生物はテストに失敗したということね。そして最終的に生き残るのは何なのか。それは誰にも分からないわ。だって地球が終わるその日まで『ガイアのテスト』は続くんだから」

このお店に来てから優に三時間は経っている。そろそろ引き上げないと迷惑なんじゃないかな、と厨房の奥を覗くと、お皿を丁寧に拭いているシェフと目が合った。彼は軽く頷き「どうぞごゆっくり」といわんばかりの優しい微笑を返してくれた。私は柏葉美樹の言わんとするところがいまいち飲み込めないでいる。

「じゃあ、私たちはみんな『ガイアちゃん』なんですか？」

「そうよ。つまり私たちは人間は遺伝子の入れ物でしかないわけ」

「でも……私と美樹さんは『別の人間』ですよね？」

「それはね、『自分は自分で他の人間とは違うし、ましてや他の動物とは全く違う』って思われてるだけ。それもガイアちゃんの作戦なんだけど。見て。あのハゲ散らかしたおじさんも亜季ちゃんも中身は同じなのよ。身体の中にはみ〜んなガイアちゃんのコピー遺

伝子があるだけなんだから。全ての生き物を分解して分解してこれ以上分けられないってところまで分解すると、最後に残るのがガイアちゃん」

柏葉美樹は、店の外をハンカチで額の汗を拭き拭きお辞儀しつつ携帯で話しながら通り過ぎる、おなかの出っ張った五十代と思しきサラリーマンを指して言った。あのおじさんよりはチャーミングな自信あるんだけどな、私。同じなのか……んなこと急に言われてもね。

「ああらゴメンなさいね、話がそれちゃったわねえ。何の話してたんだっけ？」

「人間が進化したのはエロスのためって……」

「ああ、そうだったわね。ここでさっき亜季ちゃんが言ってた『子孫を残す』って話になるのね。これまでガイアちゃんは多種多様の動物を創ってきたわけなんだけど、ふとあることに気付いたの。『そういえばみんな、程度の差こそあるものの繁殖する時期が決まってるんだなあ』って。ま、早い話が発情期よね。何でか理由は分からないけど自然の流れで各々の生物の発情期が決まってしまった。そこでガイアちゃんは『待てよ、発情期を取っ払って年中繁殖できるヤツらがいても面白いかもな……よっしゃ、いっちゃったれ！』ってな感じで人間が出来たのよ」

何か、やつつけ仕事っぽくなってるけど大丈夫か？ ガイアちゃん。

「確かに年がら年中発情してるのは人間のオスだけですけど、それと二足歩行と何の関係があるんですか？」

「大有りよ。人間を創るに当たって、ガイアちゃんがまず初めに考えたのは『どうすれば万年発情状態を作り出せるか』なのよ。亜季ちゃん、そもそも発情するってどういうこと？」

「え？ それは、つまり……男がエッチしたがるというか……」

「そう。ということはまず『常にエッチしたい』という欲求を人間のオスに与える必要があったわけ」

ガイアちゃんめ、余計なことを……

「じゃあ次の質問。男が常にエッチしたがるにはどうすればいい？」
「ん〜若くて可愛いくてスタイルの良い女の子がいつも周りにいる……とか？」

「その通りよ。人間のオスを万年発情させるには人間のメスを『可愛い』くて『スタイルが良い』身体にしなければならなかったの。つまり常に『エロス』を感じさせるような身体、常にセックスアピールしている身体、常に男を惹き付けるフェロモンを出す身体が必要となったわけ。毛むくじゃらで四本足ではどう頑張ってもセックスアピールに欠けるものね」

人間の視点からすればそうかもしれないけど、猿は猿でそれなりに楽しんでるかもしれないじゃないか。「あのコの腰の辺りのクセっ毛ってさ、イカスよな〜」「だろ？だろ？ まじ堪んねー」みたいな。

「そこまではガイアちゃんもすぐに考え付いた。でも行き詰った。エロい身体って一体何だろう、と」

ガイアちゃんに会ったことないでしょうが。あ、身体の中にいるんだっけ。

「自分の創った動物たちを見回して再び気付くガイアちゃん。そう
だ、二本足だ！ と」

本当かよ……

「これまでは四本足かもしくはそれ以上の足の数で移動する動物しか創ってこなかったガイアちゃんは早速二本足動物の作製に取り掛かったの。なにしろこれまでと根本的にコンセプトが違うんだからそれは大胆な作業となり、かつ慎重に進めなければならなかった。『オスが見ただけで発情するメス』にするには、身体の形を大幅に変えなければならない。かといって、哺乳類の基本的な構造は崩せない。いくらガイアちゃんでもいきなり新しい動物は創れないからね。徐々に進化させて体形を変えていくしかない。」

そこで猿を少しずつ立ち上がらせてみたわけ。尻尾はセックスに邪魔だからなくす。体毛で覆われているより皮膚が見えたほうがエロいだろう。おっぱいを大きくして腰はくびれさせる。直線よりは曲線の方が艶かしいに決まっている。女性の体がどこをとっても曲線的なのはガイアちゃんの設計図にそう書かれているからで、必然なのよ。そうして全体的に丸みを帯びていて、つつい男が触りたくなるエロい身体が完成したの。ちなみに女の体で最もエロい部分ってどこ分かる？」

試すような目。またそんな恥ずかしい質問しやがって……黙っていると柏葉美樹は私の考えを見抜くように言葉を続けた。

「いやあねえ亜季ちゃん、違うわよ。脚よ脚」

「脚……？」

「そう。人間はガイアちゃんの思い付きで二足歩行にさせられたわけだけど、そのお陰で脚は長くなり、結果的には女にとって女性性をことさら強調させる部分となったの」

「胸……じゃないんですか？」

本当は別のところを想像してしまったことは内緒である。

「ああら、おっぱいは母性の象徴よ。男がおっぱいを好きなのは、エロスというよりも母性を求めているからよ。赤ちゃんが母乳を求めるようにね。だから性的に男を惹き付けるには、胸を強調するより脚を見せる方が簡単だわ。おっぱいは出して歩くわけにいかないしね」

いやいやあなたためっちゃ出してますがな。

「それに女性の脚にはエロさを強調させるアイテムがたくさんあるじゃない？ ミニスカートもそうだし、ストッキングにハイヒール。何のために強調してると思ってるの？ セクスパールのためでしょ？ ほとんどの男は胸よりも脚にエロスを感じるのよ。賭けても良いわ」

「つまり、人間は年がら年中エッチするための存在だといいたいわけですか？」

「そうよ。実際、地球上の人口は爆発的に増えたんだからガイアちゃんのテストとしては上手くいった方なんじゃないかしら。ただ予想外の問題も多々出てきちゃったけどね」

予想外……戦争、疫病による人口の激減。環境破壊による生態系の乱れといったことだろうか。いつまで経っても戦争を繰り返す愚かな人間。それをコントロール出来ないなんて、ガイアちゃんも意外と力が無いんだなあ。

「だからもつとエッチしろってことですか？」

「別にしろなんて言っていないわ。でもせっかく人間のメスに生まれて、しかもそんなに可愛いんだからもつたいたいって思っただけよお」

もつたいない……そうなのかな。

「あともう一つ付け加えると、人間のオスは霊長類で最大の陰茎の持ち主なのよ」

陰……つてええ！？　そそそそうなの！？　馬……は霊長類じゃないか。じゃあゴリラ……じゃないんだ。

「メスはオスを常に欲情させるのにこれ以上ない身体となり、オスは望み通り万年発情し巨大な男根を毎日屹立させている。どう？　これ以上セックスに適した生物は他にいないのよ。人間はある意味ガイアちゃんの最高傑作と呼べるかもね」

はは……最高傑作ね……放っておくといつまでも講義が続きそうだ。そろそろガイアちゃんとはおさらばしよう。

しなくなっただって……あっち向いてほしい、とかじゃないよね

「あの、美樹さんて、男の人を選ぶ基準とかあるんですか？」

ナイス話題転換。真也情報によれば柏葉美樹は中学生から還暦に至るまで、手当たり次第見境なく、ということだったのだが。

「もちろんあるわよお。基本的にブサイクとデブはNGね。ハゲはショーン・コネリーくらい似合ってれば許してあげる」

ショーン・コネリーより禿げの似合うカツコイイ男なんかこの世にいませんてば。

「スタイルも重要ね。背は当然私より高くなくちゃダメだし、あんまりマツチヨも苦手。ムエタイの選手くらいの適度な筋肉質が理想的ね。痩せすぎも頂けないわ。でも見た目が合格なら職業年齢性格関係ないのよ。後は身体の相性が良ければ付き合っし、自分勝手に下手くそな男とはそれっきり」

性格も関係ないのかよ……

「今まで最長どのくらい付き合ってたんですか？」

「ん〜難しいわねえ、一人とじっくりってタイプじゃないの私。常に複数人と付き合ってるから。そうねえ、改めて考えると真也が一番長いかなあ……一年くらいかしら。あの子、若いのに上手なの」

柏葉美樹の目がいやらしく光る。

「真也くん……」

「ああそうか、亜季ちゃんお友達よねえ」

「あの……真也くんと今後も会うんですか？」

沙耶がいる以上、彼には美樹と会って欲しくないな。

「どうかしら？ 真也が会いたいつて言ってくれば会うけど。そうそう！ あの子今、彼女いるでしょ？ しかもかなりお熱みたいじゃないあい？」

「美樹さん、お願いです。真也くんとはもう会わないで欲しいんです」

「ああらどうしたの急に。改まっちゃって」

「真也くんの彼女っていうのが、その、私の親友なんです。だから……」

「大切な友達を傷付けたくない。だから会っなくなって？ 亜季ちゃん、自分のこと棚に上げてよくそんなこと言えるわねえ」

う、それを言われると辛い。

「まあいいわ。少なくとも私からは誘わないって約束してあげる」
「ホントですか！？」

「いいわよお、亜季ちゃん可愛いから。その代わり条件があるわ」

「やっぱりな……安藤さんと別れるって言っただろうか。それとも淳のことをバラす……でもそれはもう安藤さんは知っているから関係ないか。」

「私、亜季ちゃんとしたくなっちゃった」

「したくなっただって……あっち向いてほい、とかじゃないよね。一応聞いてみよう。」

「な、何を……ですか？」

「決まってるじゃない。セックスよ」

黒く濡れた瞳で見詰めながら私の手を握ってきた。ほ、本気なのか！？

「男もそろそろ飽きてきたし、真の快感は女同士でしか得られないかもって最近考えてるの。意外な場所に天竺への近道があるのかもしれないでしょ？ そうしたらちようど亜季ちゃんが現れたから……これぞまさしく天啓ってやつね。私ねえ、亜季ちゃんに一目惚れしちゃったみたい。だってあなた可愛くて仕方ないんですもの。もう亮介も真也もどうでもいい！ こんなに胸がドキドキするの久しぶりだわ……大丈夫、私に任せてくれればいいから。悪いけどそこから辺の男なんかよりよっぽど上手よ。絶対後悔させないから。ね？」

手を振り払った勢いで水の入ったグラスが倒れた。そのままテーブルの白いクロスの上を転がり零れた水が形を変え、床に落ちるのがスローモーションで見えた。私は構うことなく席を立ち、ご馳走様でしたああと叫びながら走って店を出た。あはははという柏葉美樹の嬌声が背中から微かに聞こえた気がした。

電車に乗って息を整える。駅まで走る途中、柏葉美樹が追いかけてくるんじゃないかと何度も振り返ってしまった。やはり恐ろしい女だ。エロスの化身だ。卑猥魔神だ。もはや人間じゃない。そもそも戦いを挑むのが間違っていた。「お悔やみ申し上げますとしか言えないな」真也くんの言葉を思い出す。ゴメンね沙耶。私が侮辱されるのは何とか我慢するけど、さすがに女の人と寝るのはちょっと……ここはもう真也くんを信じるしかない。

家に着く頃には空は薄暗くなってきた。携帯を見るともう六時
を回っている。随分と長いランチタイムであった。部屋へ戻るとベ
ッドで横になった。疲れた。肉体的にも精神的にも。でもまあ美味
しいフランス料理が食べられたからいいか……枕に顔を埋めている
と携帯が鳴った。

『今日どうしたの?』

沙耶からだった。どうしたもこうしたも……でも本当のことは言え
ないな。

『頭痛くて』

『平気?』

『うん。薬飲んで寝てたから。もう大丈夫』

ここで電話に切り替わる。

「亜季? 実はさ、大変なことになっちゃったの。淳くんね、バ
レちゃったみたいなの」

「沙耶……」

「わ、私じゃないよ! 信じて亜季、私じゃ……」

「分かってるって。沙耶を疑うわけ無いでしょ」

「亜季、驚かないの?」

私は昨日の安藤さんとのやり取りをかいつまんで話した。

「そっか……知ってたんだ、安藤さん」

「知ってたっていうか、二人が一緒に写真撮ったとき、淳が話した
んだと思う」

「淳くん、仲良くなった人にはすぐ自慢するもんね、亜季のこと。ごめん。案ずるより産むが易しとか分けわかんない慰め方しちゃって」

「ぷっ……使い方違うしね。あゝあ、とうとう二人にバレちゃったわけだ！　で、淳どんだったの？」

「それが、分らないの」

「何で？」

「淳くんも今日学校来てなかったみたいだから。真也くんは『オレは亜季も安藤さんも好きだ』っていうメールが昼過ぎに来て、それつきり。すぐに真也くんが電話かけたんだけど携帯の電源切ってるみたいで全然繋がらないの。どうしよう亜季、まさか淳くん自棄になって……」

「大丈夫だつて。私のことくらいでそんな大それたことしないって言いながら不安でいっぱいになっている自分がいる。淳の私への愛情は半端ではなかった。自惚れでも何でもなく本当にそう思う。」「オレ、亜季に嫌われたら生きててもしょうがないよ」。冗談交じりにそういつていたのを思い出す。嫌われたら……そう、そうだ。まだ大丈夫。私は淳を嫌いになったわけではないから。淳も安藤さんも同じくらい好きなんだ。

「沙耶、私メールしてみる」

電話を切ると受信ボックスから淳のメールを探す。でも何て送ればいいんだろう。文字を打っては消し、打っては消し、最終的にはシンプルな言葉になった。

『私も、淳も安藤さんも好き』

そして送信した。届いただろうか。まだ電源を切っているかもしれ

ないな……すると携帯が鳴った。淳！？　じゃなかった。

「今晚は女王様」

「真也くん……」

「せっかく取引したのにな。オレのことさ、沙耶に言う？」

「どうかな、それは真也くん次第」

「オレはもう、美樹に会うつもりはないけど？」

「そう？　でも向こうは会いたがってたよ」

「また美樹と会ったのか？」

「うん。何かね、気に入られちゃったみたい、私。今日も呼び出された。最後には口説かれたし」

「ホントかよ……で、何話した？」

「エロス進化論について」

「はは、何だそれ……あ、淳のことなんだけどさ、とりあえず家にはいるみたいだから。さっき実家に電話して母親に確認した」

「そっか、何かごめんね。私のせいでこんなことになっちゃって」

「まあ、オレは真相を知った方が良いつて言ってたクチだからな。謝る必要はないぜ。これをどう乗り越えるかは淳次第だし。それでどうするんだ？」

「私にはどうすることも出来ないよ。二股を知って嫌われたらそれまでだし。それでも好きだって言うんなら……」

「このまま二人と付き合い続けるのか？」

「無理……だよ。ねえ真也くん」

「ん？」

「真也くんてさ、双子なの？」

口にしてから後悔した。聞いてはいけないことが、ぼろつと唇の間から零れた。何でこんな時にこんなことを聞いたのか、自分でも訳が分からなかった。淳に知れてしまったことが、自分が思う以上にショックだったのだろうか。

「……ああ」

え？ 真也くん、知ってた……？

正也と真也、生後六ヶ月

「何だよ、沙耶に聞いて知ってるんだろ？」

「で、でも沙耶は『そうかもしれない』っていうだけで、確証は……」

「あのなあ、オレだってそんなにバカじゃないぜ？ 美人で真面目で頭も良いあの沙耶がオレみたいな遊んでる男と初めて会った日にホテル行つて、朝まで一緒にいてくれて言ったんだ。普通じゃないって気付くだろ。何かワケありだなって」

「真也くんはいつ知ったの？」

「高校三年生の時。オヤジのレコード引つ張り出したら写真が落ちてきたんだ」

「レコードって？」

「オレのクラシック好きは親父のせいなんだ。オヤジがクラシックマニアで古いレコードいっぱい持つてて、家にいるときは寝るまでクラシック漬け。まあ生まれた頃からずっとだから、BGMみたいなもんだけどな。それでオヤジのコレクションをいつも通り漁ってたんだ。そしたら白黒の写真が一枚」

「何が……写つてたの？」

「二人の赤ん坊。同じ顔して泣いてるんだぜ。結構笑えた。その写真を裏返すと名前が書いてあった。『正也と真也、生後六ヶ月』ってね。オレは一瞬で理解した。兄貴か弟か分らないけどとにかくこの世に双子の兄弟がいるって。オレは黙ってオヤジに写真を見せた。そしたら泣き出しやがって……『すまん』だって。」

何かそれ聞いた瞬間キレちゃってさ、オレ家の中で暴れまくって外飛び出して、無茶苦茶走って、疲れ果てていつの間にか子供の頃オヤジとよくキャッチボールしてた河川敷の芝生の上で寝てて……目え覚ましたら隣にオヤジが座つてて、メモを渡してきたんだ。『

ここにいるから』って。正也の家の住所。

でもすぐには会いにいけないかった。会って何話していいかも分からないし、向こうだっていきなり来られたら困るだろうし。そもそも正也の方は自分が双子だって知らない可能性が高い。しかもそこには実の母親もいるわけだし、弟とかいたらどうしよう……とかね。

オヤジとお袋はオレと正也をそれぞれ引き取って離婚して、別々に育ててきた。オヤジだって……いやオヤジの方がオレなんかよりずっと正也に会いたはずなのに我慢してきた。大人の都合で勝手に離婚したお前らが悪いって言うのは簡単だけど、何だかんだでオレ、オヤジのことは好きだったし。それに何より可哀想なのは育ててくれた母親だ。

あの人は、オヤジの連れ子であるオレを本当に可愛がってくれた。それなのに今さら産みの親に会いに行ったら、この先どう接していいか分からなくなるかもしれない。そもそも彼女がオレが双子だと知っているのかどうかも分からない。

恐らくオヤジとお袋は、離婚するときに、オレたちが双子だったことを誰にも言わないと約束したんだと思う。現にそれであるときまでは上手くいったわけだし。オレが会いに行ったら全てがぶち壊しになるかもしれない……そんなことをぐるぐるぐるぐる考えて結局会いに行けなかった。で、あの事故だ」

「事故の事はどうやって知ったの？」

「オヤジが教えてくれた。双子だってオレにバレた以上、隠してても仕方ないしな。でもさ、こんな言い方ひどいかもしれないけど、これでよかったんだって思うようにしてる。正也が今も生きてたらずっと気になってただろうし、会った後で事故って死んでたら、それこそオレ、罪悪感でどうかなってたかもしれないし。それに今は

オレの母親はあの人一人だつて胸張つて言えるもんな」

「好きなんだね……お母さんのこと」

「あ！ 沙耶には黙つとけよ！ マザコンと思われたら最悪だぜ！」

「え？ 違うの？」

「違えよ！ いわゆる家族愛つてヤツだ！」

「はいはいはいはい。じゃあそのシヨックで顔中に穴開けちゃったんだ……真也くん可哀想」

「それも違う！ 勝手に可哀想がるな！」

「え？ 違うの？」

「これは単なるファッションかつオレの趣味だ。正也のことは関係ない」

「ふん。で、何で沙耶が知ってるって気付いたの？」

「それは簡単だ。初めてホテルに行った日、沙耶は寝言で何度も呟いたから」

「何て？」

「正也先輩大好き……ってね。脳天がち割られた気分だった。絞め殺してやろうかとも思った。でもさ、アイツ、あんまり幸せそうな寝顔してたから……いいかなって。正也の代わりでも好きになつてくれるならいいかなって思った」

「真也くん……」

「そりゃあ沙耶じゃしょうがないって。反則だぜ？ あんな可愛い寝顔」

「そつか……でもさ、きつともう大丈夫だよ。沙耶、とつくに立ち直ってるし。つーか真也くんはかな〜りラッキーなんだからね！

そこんとかしつかり自覚するように！」

「な、何だよ急に」

「だつてそうでしょ。正也さんのお陰であんなに美しい沙耶お嬢様に気に入られたんだから。いくら顔がカッコよくても別人だったら真也くんみたいな軽い男、沙耶が相手にするわけないんだからね！」

「……だな。確かに。天国の正也に感謝しないとな。よっしゃ正也、

後は任せる！」

「あははは、でも、これで浮気したら許さないからね！」

今日から五連休だ。少なくとも学校で淳と顔を合わせずに済むのが
せめてもの救いだった。まあ講義があっても来ないかもしれないけ
ど……自分勝手な意見だが、淳にはちょうどいい冷却期間かもしれ
ない。しばらく一人で考えた方がいいだろう。

あれからメールは返ってこない。心配だけど仕方ない。何か……人
生で最悪のゴールデンウィークになりそう。しかも何を隠そう今日
五月二日は私の二十一回目の誕生日だったりする。淳は事前に何か
を準備してくれていたかもしれない。安藤さんは……教えてないか
ら知らないはず。

安藤さんに会いたいけど、今連絡したらさすがに節操ないよね。沙
耶はどうせ真也くんと出かけるんだろうし。これじゃ黄金週間じゃ
なくて謹慎週間ね。もうこうなったら一人旅にでも出ようかな……
あ、バイトはちらほら入ってるんだった。くそう。誰か誘ってくれ
ないかな。せっかくの誕生日、出来れば素敵なお店で豪華な食事
とか奢ってくれる人。時間もお金も持て余してる人物といえ……
は！

いやいやいやいやないないない！ 一瞬柏葉美樹が頭をよぎっ
て、私は頭から布団を被った。と、毛布越しに携帯の歌が聞こえた。
安藤さんであって欲しい、と祈りながら携帯を掴むと、果たして安
藤さんからのメールだった。嬉しい反面、怖くもある。どんな内容
なのだろうか。私は携帯を開く前に考え得る限りの内容を頭に箇条
書きにした。

？ デートのお誘い

？ サプライズパーティ

？ ライブの告知

？ 淳と三人で会う

？ 安藤さんが身を引き、淳と付き合うように勧める

？ 安藤さんも淳も二度と私に会わない宣言

出来れば？か？であって欲しい。よし。見るぞ……

三股？ でも同性はカウントされない？

『カリフォルニアホテルに来て。フロントで名前言えばキーをくれるから』

！ こここれはもしかやパターン？！？ やややだ安藤さんたらそんないきなりホテルだなんて…… あ、でももう既に部屋で経験済みか。ロマンチストアーチストの安藤さんのこと、もしかして部屋にはバラが敷き詰めてあつて、テーブルには大きなバースデーケーキとシャンパンと…… そしてその後は二人つきりで…… 一人妄想膨らませてニヤけまくる。ホテルで過ごす誕生日なんて素敵過ぎる！
「亜季ちゃんがオレだけ見てくれるように、頑張るから」安藤さんの言葉を思い出した。

ベッドから飛び起きると私はいつも増して気合を入れてメイクをした。下着も慎重に選ぶ。箆笥の奥から去年の誕生日に沙耶に貰った、淡いピンクのパンツとブラジャーを引っ張り出した。色はとっても可愛いけど、形状がセクシー過ぎて今まで身に着ける機会が無かったヤツだ。淳には刺激が強くてもったいないしね。

クローゼットを開け、去年クリーニングから戻って来て以来、一度も着ていない、とっておきのワンピースを出す。白く軽やかで、膝丈のレースのワンピース。これを着れば清楚系お嬢様に大変身できるのだ。私は鏡の前でくるくると回って全身をチェックした。よし…… まあこんなもんでしょ。私的最高峰ファッション。柏葉美樹がエロスの化身ならさしずめ私はキュートの女神ってところかしら。

いってきまゝす、と元気良く家を出る。気分は上々。何たってホテ

ルで過ごす二十一回目の誕生日！ ああ、素晴らしき人生。

カリフォルニアホテルは浦和駅から少し離れた場所にあるが、家からは歩いて十分ほどだ。駅に行くより少し近い。ホテルに着くとるんんスキップでフロントへ。「上村亜季です」と告げると制服姿の渋いオジサマが笑顔で「承っております」と「1051」の数字が刻まれたキーを渡してくれた。

エレベーターに乗って十階を押す。扉が開き、ワインレッドの厚い絨毯が敷き詰められた廊下を、キーをくるくる回しながら歩く。そして1051号室。安藤さんは既に部屋にいるのだろうか。それとも後から来るのだろうか。ノックしようかとも思ったが鍵を受け取れというメールを送ってきたのだから、「それを使って部屋へ入ってきて」というメッセージと解釈した。

すーーはーー、深呼吸。扉の向こうの素敵な演出に胸を躍らせながらキーを差し込む。ガチャっ、と家の玄関とは違う、ホテル独特の重厚な音が手に伝わる。ドアノブを回し、ゆっくりと扉を開けた。目を閉じて一歩踏み出す。がっちゃん、と背中の中でゆっくり扉が閉まる。私は目を開けた。そしてまたか、とがっくり肩を落とした。視界に入っただのは床一面の真紅のバラでもテーブルに置かれた口ウソクの立ててあるデコレーションケーキでもなかった。

「ハッピーバースデー亜季ちゃん。いやあねえ、何で黙ってたの？ 昨日教えてくれればレストランでも貸し切って素敵なお誕生日にしてあげたのに。まあいいわ。ホテルで二人っきりでゆっくりまったりっていうのもわるくないものねえ」

部屋の奥には真っ赤なドレスを着てシャンパングラスを片手に持った柏葉美樹が立っていたのだ。何なのこの人。しつこいったらあり

やしない。今日で三連荘なんですけど。一人浮かれてここまで来た自分がバカらしく思えて腹が立った。

「美樹さん……いい加減にして下さいよ。用があるのなら安藤さんの携帯勝手に使わないで、自分の携帯から連絡して下さい。それに私、これ以上美樹さんと話すことなんてありませんけど?」

「んもう亜季ちゃんたら、そんな冷たいこと言わないの。好きな人に会うのに理由なんていらないでしょ? それに昨日約束したじゃない。私と寝てくれるって。だからこうしてホテルまで予約したのよ? お誕生日だって知ってたらもつと良いお部屋取ってあげたのに……でもまあ、お金をかけなくっても必ず満足させてあげるわ。私の身体を存分に使って亜季ちゃんにとって人生最高の忘れられない誕生日にしてあげるから」

いやいや約束してないから。身体を使ったプレゼントとかいらないから。本当エロいなこの人。でもガイアちゃん的には成功なんだろうな。柏葉美樹はグラスを置くと、挑発するように身体をくねらせながら一歩ずつ近付いてくる。あのう、そういうのは男の人にやってくださいよ。私はすっかり白けたので帰ることにした。

「結構です。美樹さんにして頂くことは何もありませんから。それと真也くんを誘いたいのならどうぞご自由に」

私は昨日の真也くんの言葉を信じることにしたのだ。あの様子ならきつと沙耶を大切にしてくれるはず。

「それじゃ失礼します」

そう言っただけ振り返りドアノブに手をかけようとした瞬間、黒い物体が視界を遮った。そして両腕を取られ、あっという間に羽交い絞め

にされてしまった。一瞬何が起こったのか分からずパニックになった。どうやら捕まえられたようだ。

しばらく暴れていたが、サングラスをかけた黒いスーツの男の力は強く、抵抗しても無駄だと分かり私は観念した。恐らくこの男はドアの影に隠れていて最初からここにいたのだらう。その一部始終を柏葉美樹は黙って微笑みながら眺めている。

「ど、どういうことですか？ これ」

不安と恐怖で脈拍が一気に上がる。自分でも声が震えているのが分かる。まさかこの人、力づくで私の身体を……

「どついうことって、こういうこと」

捕らえられた私のすぐ目の前まで来た柏葉美樹は、すっと両手を差し出すと、私の頬を軽く挟んだ。そしてその美しい顔を近付けると口付けてきた。私は大きな瞳に竦められて抵抗できない。柏葉美樹の唇は、今までキスしたどの唇よりも軟らかく淫らだった。ゆつくりと唇を離すと頬を寄せ耳元で囁く。

「亜季ちゃん、私はねえ、狙った獲物は必ず仕留めるのよ。それが物だらうと男だらうと」

そこで一度言葉を切り再び目を見据える。くらくらするような、それでいていつまでも嗅いでいたくなるある種の麻薬のような柏葉美樹の匂いに脳が麻痺しそうだ。

「女だらうと」

ヤバイ。本気だこの人。本気で私を手に入れようとしている。そして、この人からは決して逃げ切れない気がする。現段階で淳と安藤さん、二股状態なのに、さらに柏葉美樹が加わったら……三股？でも同性はカウントされない？　というかこの人は私とエッチしたいだけで付き合う気はない？　ああもう！　訳分かんない！

「あゝっはっはっは！　冗談よジョ　ウ　ダ　ン！」

再び私から離れて窓際まで下がった柏葉美樹は、大口を開けて下品に笑った。

「本気にしちゃった？　亜季ちゃんのそういうところがまた可愛いんだけど。でもさすがに女の子とはお付き合いしないわよ。ま、亜季ちゃんがどうしてもっていうんなら考えてあげてもいいけど」

考えなくていいから。

「どうでもいいですけど、この人どかしてくれませんか？」

私は苛立ちを露にした。不自然な体勢を強いられて苦しいし、ただん関節が痛くなってきた。私の声を無視して、彼女は机の上のハンドバッグを手にとって開けた。

「離してあげなさい」

ようやく柏葉美樹は、私を捕まえていた男に命令する。私に苦痛を与えたマトリックスのエージェントスミス気取りの男を睨み上げる。股間に蹴りでも入れてやろうかしら。再び視線を前方に戻した私は思わず息を飲んだ。そこには銃口を私に向けた柏葉美樹の姿があったから。

杉本彩と叶姉妹を足しっ放しで三で割らないくらい強烈な

「は、はは……今度は何の冗談ですか。ああ、分かりました。誕生日プレゼントにその銃をくれるつもりなんですよ。ライターですか？　それ。でも私タバコ吸いませんよ？」

どうせ偽物に決まっている。ここは日本だよ？　拳銃なんてテレビと映画でしか見たことない。身体が自由になった私は、ふらふらと柏葉美樹に歩み寄る。ようやく部屋全体を見渡せる位置まで来た私は、二つのベッドを見て凍りついた。そこには何と淳と安藤さんが、それぞれベッドに括りつけられていたのだ。しかも下着姿で猿轡まですれて。

「淳！　安藤さん！」

口の利けない二人の目が懇願するように私を見る。

「動かないで」

駆け寄ろうとする私に、これまでの柏葉美樹とは全く違う、低く凄みのある声が命令する。

「座りなさい」

彼女は足元の椅子を差し出すと、二つのベッドと向かい合うように私を座らせた。何なのこの状況は……さっきよりも遥かに大きな恐怖が私の身体を支配する。銃を向けられ大人しく椅子に座ると、黒スーツのエージェントミスがロープを使い私の両手両足を椅子に固定し始めた。

「痛い！ ちょっとやめて！ ど、どういことですか！？ 美樹さん！ ふざけるのもいい加減に……」
「お黙り」

柏葉美樹は、私のこめかみに銃を突き付けた。そしてスミスは私を椅子に縛り付けると、淳と安藤さんと同様に猿轡を噛ませた。取り乱す私は呻くばかり。

「この場ではつきりさせてちょうだい」

何のこと……？

「亜季ちゃん、あなたに必要な恋人は一人よ。亮介を取るか、淳くんを取るか……それとも私を取るか」

私って……ええっ！？ 安藤さんと淳は分かるけど、あなたさつき冗談って言ったじゃない……

「さっき言った冗談っていうのは嘘よ。私、亜季ちゃんが欲しくて堪らないの」

柏葉美樹は私の前にもう一つ椅子を置くと、背もたれの上に腕を重ねて置き、足を広げて逆向きに座った。そして組んだ両腕の上に顎を乗せる。美樹の顔が私の目の前10センチのところまで接近している。ドレスの裾からは白く滑らかな太腿が露になっている。この杉本彩と叶姉妹を足しっ放しで三で割らないくらい強烈なメスのフェロモンはどうだ。まさにガイアちゃんの最高傑作である。って今はそんなことはどうでもよくって。

「幸せ者ねえ亜季ちゃん。三人の男女に奪い合いされるなんて」

あのう、「女」はいらないんですけど……柏葉美樹はうつとりとした表情で眺めながら私の髪を撫でた。

「アレ持つてきて」

柏葉美樹は居直ると急に怖い顔付きになり傍で直立不動の姿勢を保っていたスミスに命令する。スミスは機敏な動きでバスルームから黒いアタッシュケースを取って戻って来ると、私の背後にある机の上に置き留め金を外した。そして小さな紙袋を中から取り出し美樹に手渡す。袋の中からは風邪薬のような赤いカプセルが出てきた。美樹は再び顎でスミスに合図をする。彼はもう一度バスルームへ行き、コップに水を汲んできた。美樹が私の猿轡を外す。

「口を開けて」

美樹はカプセルをパッケージから一錠押し出し私の口元へ持つてきた。私は唇を硬く閉じ、顔を背ける。そんな得体の知れないものを飲むわけにはいかない。

「な、何なんですかそれ」

「いいから黙って口を開ければいいの」

抵抗する私に銃を向ける。私は仕方なく少し口を開いた。カプセルを摘んだ美樹の人差し指と親指が強引に口の中に押し入ってきた。続いて水の入ったコップをあてがわれる。唇に水が触れると、口から零れないように無意識に顎が上がる。カプセルと水が口の中に入ると、美樹は私の鼻を摘み口を手の平で塞いだ。息の出来ない苦しさに、思わずカプセルを飲み込む。美樹は手を離すと、再び私に口

を開けさせ、舌の内側にカプセルが残っていないか確認した。

次に美樹はカプセルとコップを持ってツインベッドの真ん中へと歩いていった。左のベッドにいる淳の猿轡を外す。怯えきった目。一体どんな目に遭わされてここへ運ばれたのだろうか。美樹は淳の口を無理矢理開けさせて指を突っ込むと、私と同じようにしてカプセルを飲ませた。完全に飲み込んだことを確認すると再び猿轡を噛ませた。亜季、という淳の声が聞こえた気がした。

淳が終わると右側に移り、安藤さんにも同じことをした。安藤さんは既に諦めているのか、自ら口を開けていた。再び私の目の前に立つと、もう一つ残っていたカプセルをパッケージから押し出し、何と自分の口に放り込んだ。そしてコップの中の水と共に飲み下してしまった。

「さて……と。今私たちが飲んだカプセルは毒よ」

柏葉美樹はちよつと首を傾げて、まるで他人事のように言った。

「全部同じカプセル見たかもしれないけど実は二種類あるの。私と亮介と淳くんはアコニチンというトリカブトに含まれている毒、亜季ちゃんのはテトロドトキシンというフグの毒。両方とも猛毒で、さっきのカプセル一錠なら十分で死ぬわ。でも安心して。苦しまないで死ぬるように成分を調整してあるから」

美樹はにっこりと微笑むと、アタッシユケースからアクリルの透明な板を取り出した。ハードカバーほどの大きさのその板は数字の大きなデジタル時計で、美樹は数字を0：10：00と表示させて机に置いた。

「ストップウォッチよ。個人差があるから正確に十分で死ねるかは分からないけど、一応の目安にはなるからね。亜季ちゃんと私ではカプセルを飲んでから一分くらい時間差があるけど、毒の種類が違うから効果が表れるのはだいたい同じくらいだと思っていいわ」

まるでポーカーを知らない相手にルールを説明するような淡々とした口調だった。

「そしてここにもう二つカプセルがある」

美樹が先程の白い紙袋を逆さまにすると、さらにカプセルが二錠出てきた。それぞれ黄色と青い色をしている。

「この二つは解毒剤よ。黄色はアコニチン用、青はテトロドトキシン用。これを飲めば体内の毒が消えて死なずに済むわ」

柏葉美樹は、パッケージに包まれた二つのカプセルを、宝石でも眺めるように光にかざし目を細めて見ている。

「な、何訳の分からないこと言ってるんですか？ 毒なんて嘘ですよね？ だってさっき美樹さんだって飲んだじゃないですか」

「他に方法がなかったの。こうするしかないのよ。こうなったのも全部亜季ちゃんのせいなんだから。まあそんな亜季ちゃんを好きになっちゃった私たちが悪いのかもしれないけど……ホント、亜季ちゃんいけない子」

言っている意味が分からない。混乱していて頭が上手く働かない。美樹はスミスに合図をして、私の縄を解くように言った。縛ったのと逆の手順で、スミスはあつという間に縄を解く。そして美樹は「もういいわ」とスミスに向かって軽く頷いた。役目を終えたスミスは頭を下げて部屋から出て行った。私は椅子から開放されて立ち上

がり、縛られていた部分をさする。すると美樹は私にそのカプセルを手渡してきた。

「私たちの命をあなたに預けるわ」

「え？　ちょ、ちよつと、これってどういうことですか？」

「亜季ちゃんが一番好きな相手にその黄色いカプセルを飲ませなさい。青いのは亜季ちゃんにしか効かないから今すぐ飲むといいわ」

まだ事態がよく飲み込めず、手元のカプセルをただ見詰める私に、美樹はさらに説明を続けた。物分りの悪い子供に、噛んで含めるようにして。

「いい？　亜季ちゃんは、部屋の中にいる人間のうち二人だけしか助けることができないの。即ち自分自身と亮介か淳くんか私。本当に好きだと思う相手を選べばいいのよ。簡単なことでしょ」

「そ、そんな……選べるわけじゃないじゃないですか！　私は誰も死なせたくない！　淳も安藤さんも……美樹さんも」

「まあ嬉しいわ。これで私もこの二人と対等になったと思っていいのかしら？」

目を見開いてわざとらしく喜びを表しながら私に近付くと、美樹は拳銃を持ったまま私の髪を撫で始めた。毒が回ってもうじき死ぬかもしれないと分かっているにも銃による恐怖心は拭えない。

「ああらごめんなさいねえ、もう必要ないわよねえ、こんな物」

怯える私を見て、美樹は大袈裟に銃をちらつかせ弄ぶ。くるりと方向を変え、ベッドの間へ歩いていくと、腕を真っ直ぐ伸ばして横たわる淳の顔面に銃を向けた。淳の顔が恐怖に歪む。

「迷ってるみたいだから選択肢を一つ減らしてあげる」

言い終わる同時に引き金を引く。止める間もなかった。カチリ、と聞こえた瞬間、私は悲鳴を上げ耳を塞ぎ顔を背けた。

私は死んだ

しかしテレビドラマで耳にするような、派手な銃声は鳴り響かなかった。恐る恐る顔を上げると、美樹はにっこりと微笑みながら私の方を向いている。右手に握られた銃の先からは、小さな炎が立ち昇っていた。

「亜季ちゃん良く分かったわねえ。その通り、これはライターよ。いくら私でも本物の銃なんか持ってないわよ」

やっぱり……そして美樹は銃を私に放り投げてよこした。咄嗟に両手が反応して抱えるように受け取る。先端が熱を持っている。

「あげるわ。プレゼントよ」

こんな状況で、何と底意地の悪い女。どこまで私をおちよくれば気が済むのか。思いつきり引つ叩いてやりたかったが、今はそれどころではない。机のタイマーを見ると既に七分を切っていた。

「まあ落ち着きなさいよ」

美樹は先程自分の座っていた椅子を、窓際に移動させ、長い脚を組んで座った。そして私にも座るように手で勧めた。私は大人しく座った。

「ねえ亜季ちゃん、男なんか放っておいて、私と一緒に暮らさない？　だってどっちにしろ亜季ちゃんは淳くんか亮介のどちらも選べないんでしょう？　淳くんも亮介も同じくらい好きなんだものね。仮に淳くんを助けたところで亮介を見殺しにした罪悪感は一生涯消え

ないわ。それだったら最初から二人の男はなかったことにして、私と新しい関係を始めた方がこの先の人生楽しいと思うけど？」

くそう、勝手なことばかり言って……

「今の亜季ちゃんの心理状態はこうよ。天秤の皿の上に淳くんと亮介が乗っかっている。淳くんを取れば亮介が沈み、亮介を取れば淳くんが沈む。どちらを取っても亜季ちゃんの心のバランスが崩れることは避けられない。じゃあバランスを保ったままにするにはどうすればいいのか」

そこで言葉を区切ると、美樹は一層妖艶な瞳で私を覗き込んだ。

「天秤の真ん中、つまり支柱を取り払ってしまえばいいのよ」

真ん中……？ 美樹は立ち上がると再びベッドとベッドの間へ移動した。時間は五分を切っている。毒のせいかな少し気分が悪くなってきた気がする。

「いい？ 彼らの命を握っているのは亜季ちゃんあなただけど、あなたは天秤じゃないの。天秤はこの私よ」

美樹は私の真正面に立ち、手の平を上に向けたまま右腕と左腕をそれぞれゆっくりと広げた。美樹の身体は十字架のような形になっている。

「右の手には淳くん、左の手には亮介、それぞれの命が乗っかっているの。今の状態ではまだ亜季ちゃんの心のバランスは保たれたまま。でも、淳くんを助ければ……」

美樹は右腕を上げ左腕を下げる。

「バランスは崩れる。逆に亮介を助ければ……」

今度は右腕を下げた。

「ね？ 沈んだ方の手はイコール亜季ちゃんの罪悪感。どっちを助けてもそれは必ず生じるし消えることはない。じゃあどうすればいいか。その答えは」

美樹は両腕を広げたまま私に歩み寄った。

「私を助けること」

ゆつくりと上体を屈め、座ったままの私を抱き締めて顔を寄せると再び唇を近付けてきた。今度は顔を背けその艶めく唇を避ける。

「違うわ。三人のうち誰かが死んでも私の罪悪感は一生涯消えない。でも、一つだけ消せる方法がある」

私は美樹の身体を押し退け、二つのカプセルを握り締めて立ち上がると、急いでバスルームへ向かった。そして。

「全員死ぬことよ」

私の行動を察した美樹が追いつがる。私は美樹の腕を振り払い、青と黄色のカプセルをトイレに落とすレバーを引いた。美樹が悲鳴を上げ咄嗟に手を伸ばす。しかし既にカプセルは水の中で、渦を描きながら勢いよく流れて消えていった。

「バカな子……自分だけでも助かったのに」

部屋へ戻り落胆して椅子に座った美樹が呟く。そう、確かに私はバカだ。三人の中から一人を選べなかったとしても、自分だけは確実に助かることができたのだから。そして例え見殺しにしたところで私に罪はないだろう。でもそんなことはできない。こんな性質の悪過ぎるゲームを考えた美樹は許せなかったが、それ以上に自分だけ、もしくは自分ともう一人だけ生き延びることは私の心が許さなかった。

「あと三分ですね」

観念した私にはもう、恐怖はなかった。痛みもなく苦しみもなく眠るように死ねるなら、そう悪くないんじゃない？ しかも生まれた日に死ぬんだからきりがいいし。美樹に目をやると落ち着きなく指を噛んでいる。さっきまでの心理状態と全く逆転してしまったのがおかしかった。

「あ、そうだわ」

美樹が思い出したように言う。

「この二人とは寝てるのに、私だけ亜季ちゃんとしないうまま死ぬのは不公平だわ。残り少ないけど私とセックスしようよ。二分あればイカせてあげるわよ」

この期に及んで何を言い出すのかと思えば……本当に懲りない人だな。

「お断りします。私、そういう趣味はないので」

私は二人のベッドの間に立ち、二人の顔を交互に見た。猿轡を外し、淳と安藤さんそれぞれにゆっくり口付けた。そしてその場でしゃがむと右手と左手でそれぞれ二人の手を握り締める。二人は何も言わずに私を見ている。私が一言「ごめんね」と呟くと、ぴぴぴぴと背中越しにタイマーが鳴った。意識が遠のいて私は死んだ。

ぼんやりと目を開ける。ここは天国か地獄か。身体を起こして辺りを見渡す。見覚えのある風景。死ぬ間際までいたのと同じホテルの部屋だ。私は淳が拘束されていた方のベッドに寝ていた。しかし淳はいない。安藤さんも柏葉美樹の姿もない。みんなどこに行ったんだろう。まあ死んじゃったらそれぞれ別の場所に行くのかもね。

柔らかな布団の感触が手の平にリアルに伝わってくる。何か……死んでる実感がないなあ。ベッドから起き上がって机を見ると「テレビをつけて」と書かれたメモが置いてあった。私は机の隣においてある、備え付けのテレビの電源を入れた。すると画面に現れたのは淳と安藤さんだった。

「亜季おはよう」

淳がいつもの穏やかな顔で語りかける。おはよう淳。

「どう？　びつくりした？　亜季のこと、やっぱりまだ好きだからちょっと抵抗あったけど……でもオレと安藤さんに隠し事してたんだから反省してもらわないとってことで安藤さんと考えたんだ」

そっか、二人は天国で一緒にいるんだね。元気そうで何よりだ。あ、死んでるから元気ってことはないのか。

「亜季ちゃんおはよう。ごめんね、実はちょっとやり過ぎたかもって後悔してるよ。まあでもこれでお互いチャラってことで。柏葉美樹に手伝わってもらうのは少し抵抗があったけど、他に頼める人もいなかったし、アイツがいた方がリアルかなあって思ったから」

安藤さんおはよう。それにしてもこの二人、さっきから何を言っているんだろう。

「でね、安藤さんと話した結果、やっぱりオレたち亜季とは別れることにした。お互い亜季といたいのは山々なんだけど、三人で仲良くってわけにはいかないしね。かといって一方が身を引いてもう一方が付き合うのはもつと納得できない。だから、いつそのときっぱり別れようってことで話がついたんだ。もちろんこれから友達としてなら遊んだりするよ？ まあ亜季が嫌なら会わないけど。でもそのときも三人で会うのが基本。お互い抜け駆けは禁止ってことで」

別れる？ 別れるも何も死んでるじゃない。

「というわけで、せっかくのゴールデンウィーク、アゝンド亜季ちゃんの誕生日を祝して今日はこれからドライブに行こう！ ホテルの下で待つてるから。早く来てね」

そこで映像は終わった。頭がぼーっとしている。一体どうなっているのだろうか。とりえず部屋を出てエレベーターに乗る。死後の世界にもホテルがあるんだなあ。フロントを通り過ぎ、外へ出ると正面に満面の笑みで手を振る二人の男の姿があった。まだ事情が飲み込めず、ふらふらと近付くと、安藤さんが車の中から小さな立て看板を取り出した。そこには楽しげな字でこう書いてあった。

「ドツ
キリ大成功！」

天国のホテルでお目覚め

騙された、とようやく気が付いた私は力が抜けて膝が折れ、一気に崩れ落ちた。二人が慌てて支えてくれた。後部座席に乘せられて、しばらく私は泣きじゃくった。

「ごめんね亜季ちゃん。まさかそんなに泣くとは思わなかったから……」

運転しながら安藤さんがミラー越しに謝る。私はただ首を振った。

「だから死ぬっていう設定はやめようって言ったじゃないですか」

「いやでもさ、こういうのは中途半端が一番ダメなパターンだから」

「そうですけど、毒殺っていうのもなあ……」

「今さらそういうこと言うなよ。淳くんだって賛成したじゃないか」

二人が口論を始めてしまった。

「やめて二人とも。全部私が悪かったんだから。泣いてるのはね、悲しいんじゃないって嬉しいの。安心したの。生きててくれてよかったって。二人が……四人全員が死ななくて良かったって。ただそれだけ。本当に本当にごめんなさい」

私は頭を下げた。自分だけ幸せに浸り、二人の男を苦しめたのだ。このくらいの罰はちょうどよかったのかもしれない。

「亜季……」

淳が箱ティッシュを手渡してくれた。涙を拭き鼻をかむ。安藤さん

の車に乗ると、泣いてばかりだ。

「でも、美樹さんの迫真の演技、凄かった。チョー怖かった」

私は涙目のまま笑顔で言った。

「やり過ぎなんだよアイツ……まあでも美樹がいなかったら成功したかどうか」

安藤さんが苦笑い。

「私、銃で脅されて本当に犯されるかと思っちゃった。で、美樹さんは？」

「とつくに帰ったよ。最初はさ、オレと安藤さんだけでやろうって話だったんだ。オレたちが誰かに拉致されて、亜季がどっちか選ばざるを得ない状況を作る。そこまでは考えたんだけど、その先、上手い展開が思い付かなくて。で、真也とか沙耶ちゃんに知恵を借りようって言ったら安藤さんが反対したもんだから」

「何で？」

「何でって亜季ちゃん、自分の親友にまで騙されたって分かったら人間不信になっちゃうって。しかも悪役だよ？ 美樹の役が沙耶ちゃんだったらどうよ？」

沙耶が銃で私に迫る……そんなに悪くないけどなあ。でもそれは今だからそういえるのか。

「それにドツキリってバレない演技力が必要だしね。そう考えると柏葉美樹以上に相応しい人物はいないってことになったんだ」

「ーかあれ、演技じゃなくって九割方本気だったと思うんですけど。」

「オレは会ったことなかったからさ、知らない人に頼むのもどうか
と思ったんだけど。安藤さんにどんな人が聞いても『とにかく凄
いから』の一点張りで」

「で、会った感想は？」

「うん、強烈だった。あれはもう人間じゃないよね」

「あははは、淳もそう思ったでしょ？」

「しかもドツキリの話をしたらすっかり乗り気になっちゃって。あ
の台詞とか全部自分で考えたんだよ。オレのこと撃とうとしたとき
は本当に殺されるかと思った。まじでびびった」

「え？　じゃああのときの淳の顔は演技じゃなかったんだ」

「オレも隣で見てて、自分じゃなくて良かったって思った」

安藤さんが本当にほっとした表情を浮かべた。

「あははは……あ、ねえ、結局あのカプセルの中身って何だったの
？　私、タイマーが鳴った途端に意識がなくなったから本当に死ん
だんだと思った。その後起きて、部屋で二人のビデオ見てるときも
『死んでるのにこの人たち何言ってるんだろ？』って変な感じだ
ったんだ」

「亜季ちゃんまじで？　天国のホテルでお目覚めか……カプセルは
ね、オレたち三人が飲んだのは小麦粉。で、亜季ちゃんのだけ睡眠
薬。睡眠薬なんて効き目に個人差があるからね。本当に十分で効果
が出るか心配だったんだけど……美樹に『十分で死ぬ』って暗示を
かけられてたから、タイマーの音がちょうどいい催眠効果になった
んだろうね。あんなに上手く眠ってくれるとは思わなかった。それ
に、効かなければ効かないで、あの場でドツキりってバラすつもり
だったし」

そうか……柏葉美樹にしてやられたってわけか。あの女優やれば

いいのに。それこそもつたいない。

「じゃあさ、あのエージェントスミスは誰？」

「エージェントスミス……？ ああ、サン格拉斯の男ね。あれは美樹がそこら辺で適当に拾ってきたみたいだよ」

事も無げに安藤さんが言う。拾ったって……恐るべし。

「最後の質問。私が薬を捨てたのは想定内？」

淳と安藤さんが顔を見合わせる。淳が口を開いた。

「もちろん。まあ捨てるかどうかは別にして、誰も助けないっていうのは初めから分かった。だってどっちか選べないからドッキリを仕掛けたんだし」

まんまと騙された上に見透かされているのがちよっぴり悔しいので反撃。

「でも本当はね、淳か安藤さん、どっちか一人助けるつもりだったんだよ」

私のその言葉で男二人は顔色を変えて騒ぎ出した。

「え？え？どっちどっち？ オレ？ 安藤さん？」

「お、オレの方だよ？ 亜季ちゃん？」

「ふふふ、絶対教えない！」

車はやがて高速道路をひた走る。どこかのインターで降りると空が

高くのんびりとした風景となり、やがて海が見えてきた。見覚えがある景色。

「今日は寝なかったね」

車を降りた安藤さんが伸びをしながら笑う。

「ここ、どの辺なの？」

「茨城。高速使えば割と近いから、昔はメンバーとときどき来てたんだ。夜中に流木集めて焚き火やつたりね。ここから海岸沿いに北に行くと大洗の水族館もあるよ。でもゴールデンウィークだから混んでるだろうな」

その横で淳は裸足になり、ジーンズを折り曲げて奇声を上げながら砂浜へ走り出した。それを見た安藤さんも負けじと走り出す。そして波打ち際まで行くと二人は追いかけて追いかけれ転びそうになる。なーんで男の子って海を見ると駆け出すんだろ。屈託のない笑い声が人気のまばらな海岸に響いた。そして二人は肩を組み海に向かって仲良く叫んだ。

「亜季のバカヤローー！」

昨日は人生最悪の日を過ごした後、二人の元恋人と最高に楽しい時間を過ごした。決して忘れることのできない、ある意味スペシャルな誕生日となったわけだ。元カレが同時に二人もできるなんて滅多にない経験だろう。

それにしても趣味の悪い悪戯を思い付いたもんだ。文字通り寿命が縮んだよ。まあ、これに懲りて私もしくはらくは大人しくしよう。

怒らせると怖いんだな、男も。

バイトまで時間があるので家でごろごろしていると、メールが来た。淳からだ。

『亜季、渡したい物があるんだけど……今から会える?』

なぬ? もう二人では会わない約束なんじゃないのか……? すると一分も経たないうちにもう一通。今度は安藤さんから。

『亜季ちゃん、実は渡したい物があるんだ。ちょっとでいいから会えないかな?』

ぬぬぬ!? こやつら一体どういうつもりだ? まさかまだドツキリの続き? とりあえず二人に返してみる。淳には『それって安藤さんは知ってるの?』、安藤さんには『それって淳は知ってるの?』で送信。さてさて何て返ってくるんだろう……お、淳の方が早い。

『あ、いや、安藤さんには内緒にしておいて欲しいかな……なんて』

続いて安藤さん。

『いや、ほら、ちょっと会って渡すだけだから、わざわざそこまで言うこともないかなって』

なんともまあ歯切れの悪いこと。これってさ、いわゆる「抜け駆け」ってヤツですね。ということは、二人とも私に未練ありまくり……? 私は時間をずらして二人別々に会うことにした。一応まだドツキリの疑いが完全に晴れたわけではないので、用心して行こう。

結局最後に笑うのは

「あ！ 亜季！」

駅に行くといつもの場所で淳がそわそわと落ち着かない様子で待っていた。

「どうしたの？ 淳」

「ハイこれ。誕生日おめでとう！」

淳は小さな紙袋を手渡してきた。周りを見渡すが怪しい感じはない。安藤さんも柏葉美樹もないようだ。ドッキリではなさそうだな…… よっしゃ。ちよつと揺さ振ってみるか。

「あ、ありがとう……でもいいの？ 私もう淳の彼女じゃないよ？」

ゆっくり瞬きしながら目だけ上に向ける。淳は背が高いので、「上目遣いの顔」のベストな角度を作りやすく効果覲面だ。

「え？ あ、そ、そんなの気にしなくていいって。友達にだってプレゼントは贈るでしょ？」

「優しいんだね淳……私、あんなひどいことしたのに」

「ほ、ほらそれはもう、あのドッキリでお互い恨みっこなしってことになったんだから」

「うん。分かった。ありがとう」

ここで抱きついてみる。

「わわわちよつと亜季……」

「嫌？」

「いいい嫌じゃないけど……」

「友達同士だって抱きついたりするよ?」

で、ほっぺにチュツと。

「!」

「嬉しかったらキスくらい普通でしょ? アメリカじゃこんなの挨拶代わりなんだし。じゃね! わざわざありがと!」

真つ赤な顔で呆然と立ち尽くす淳を置き去りにして、私は一度家へ戻る。二度手間だがさすがに淳のプレゼントを持ったまま安藤さんに会うわけにはいかない。再び駅へ向かい、淳がいないことを確認すると、改札を通り電車へ乗った。さいたま新都心駅の改札を出ると、正面に安藤さんの姿があった。

「こんにちは」

「来てくれたんだ」

「どうしたんですか?」

すつとぼけてみる。

「これ……誕生日プレゼント。一日遅れちゃったけど」

「ホントですか? またドッキリじゃないんですか? 蛇とか飛び出したりして」

「ちち違うつて、ホントにプレゼントだから!」

「冗談ですよ。じゃあ遠慮なくもらっておきます。ありがとうございます」

私は丁寧にお辞儀をする。

「ねえ亜季ちゃん、なんで今日は敬語なの?」

安藤さんは少し苛立っている。敬語は別に計算していたわけではないが、予想外に効果があったようだ。

「え？　だってそりゃあ、私もう安藤さんの彼女じゃないですから。年上なのにタメ口利いたら失礼でしょう？」

俯いて少し悲しげに言ってみる。

「そんなこと……亜季ちゃん」

呼ばれて顔を上げた瞬間、安藤さんの唇が私の唇に触れた。手から貰ったプレゼントが零れ落ちる。安藤さんはそのまま私を抱きしめる。私はされるがままになっておいた。

「やっぱり無理だよ……別れたくない」

耳元で囁かれて脳に快感が走った。やっぱりいいわ、この声。安藤さんはゆっくりと私の身体を離すと、ごめん、と言って立ち去った。

バイト終了後、沙耶から電話。

「どう亜季、淳くん連絡ついた？」

あ、沙耶に報告するの忘れてた。

「ついたよ」

「やっぱり修羅場？」

「うーんどうだろ？　あの二人、さらに仲良くなってるみたいだし」

昨日のホテルでのドッキリを沙耶に説明するのは少々骨が折れるので、やめておいた。柏葉美樹の話なんか始めたら、いつ終わるか分かんないしね。

「それで、今後はどうするの？」

でも、その後のことは報告することにした。

「ええ〜！？『二人きりで会わない、亜季と会うときは三人で』って誓った次の日にもうお互い抜け駆け！？」

「そうなんだな〜これが。さっき二人からプレゼント貰っちゃった。おまけに安藤さんには真昼の駅前で熱烈なキスされちゃったし」

「あららら……淳くんの方は？」

「私が抱きついてほっぺにちゅーしたら固まってた。あと手紙。プレゼントに入ってたんだけど『安藤さんに嫌われてもいい。ピーグールのライブに行けなくなってもいい。だからもう一度傍にいて』だそうです」

「懲りない男どもだな。それで、亜季は何て？」

「うーん、そうねえ、まだどっちにもはつきりとしたことは言っていないけど、会いたいって言われれば会ってあげてもいいかな〜」

「うわ出たよ……でもさ、安藤さんと淳くんはお互いが内緒で亜季に会ってるって知らないんでしょ？それがバレたら今度こそ修羅場なんじゃない？」

「そのときはそのとき。しかもそれに関しては私は関係ないしね。私のために目の前で殴り合いとかしてくれたら結構感激かも〜。あ、明日は三人で会うことになってるんだけど、二人ともどういう風に私に接してくるんだろうね〜。凄く楽しみだな〜」

「お前というヤツは……結局亜季の一人勝ちってわけね……あ、ねえプレゼントって何だったの？」

「えつとねえ、淳がピアスで安藤さんがネックレスでした。明日はこれを両方着けていくんだ」

「両方って、それヤバくない？」

「だってせっかく頂いたんだから、次に会うときに着けていくのは礼儀でしょ？」

「小悪魔が大悪魔になった……」

五月三日の憲法記念日。昨日の夜にどこに行こうか三人で相談した結果、デイズニースーに決定。連休で絶対人が多いから嫌だって言っただけど、淳のヤツがどうしてもって言うもんだから。それに安藤さんも嫌いじゃないらしい。

思えば淳とは一度だけランドの方に行ったただけだったな。枕元に鎮座する等身大プーさんはそのとき淳に買ってもらった物だ。だがのんびりしていると混むことは確実なので、朝早めに出ることにした。天気も良いし、私は昨日二人から貰ったアクセサリーを取り出して浮かれ気分。ピアスを着け終えたところで電話が鳴った。淳か安藤さんか……しかし。

「ハロ、亜季ちゃん、昨日はごめんなさいねえ」

「み、美樹さん……」

私の心は晴れ模様から曇り空へ。

「私は嫌だって断っただけど、亮介と淳くんに脅されて無理矢理やらされて……全くあの二人も人が悪いわよねえ。でもスリルがあつて楽しかったでしょ？」

「は、はは、そうですね」

何が無理矢理だ。ノリノリ全開でやってたくせに。それにあなたは脅すことはあっても脅されるなんて有り得ないでしょう。

「ところで亜季ちゃん、もうあの二人とは別れたんでしょう？ 昨日帰り際に私の前で『きっぱり諦める宣言』してたものね。そうなのと残る恋人候補は私しかないってことよねえ。ねえ亜季ちゃん……せつかくのゴールデンウィークなんだから旅にでも行かない？ 北海道とかどうかしら？ 月並過ぎる？ 近場の温泉でもいいわよ、草津とか箱根とか。もちろん最高の隠れ家のお忍び宿を取るから安心して。とにかく早く亜季ちゃんと二人つきりになりたいの。じゃあこれから迎えに行くから」

……はい？

「ああ、準備なんかいらないわよ。手ぶらで構わないわ。必要なものは途中で何でも買ってあげるから。楽しみだわあ。亜季ちゃんと貸切の露天風呂に入って、美味しいお料理食べて、その後は……うふふ、早く見てみたいわあ、浴衣姿の亜季ちゃん。もちろん脱いだところも……なんてね！ じゃあね、もうすぐ着くから」

切れた……はいいいい！？ まさか柏葉美樹は本当の本気で私のことが好きなのですか！？ もうすぐ着くって……マズい！ もたもたしてたら本当に箱根もしくは草津に拉致されてしまう！

私は急いで仕度を済ませると、逃げるように家を飛び出した。すると後ろから中流階級の住宅街の狭い道路に不釣り合いな、大きな黒塗りのリムジン登場！ 必死で走るもすぐに追いつかれ、中から出てきたスミス×2にあっけなく捕えられてしまった。後部座席に押し込まれる私。そこにはこれまでにないほどの満面の笑みの柏葉美樹が座っていた。

「じゃ、行きましょうか」

「淳！ 安藤さん！ 助けて~~~~~！」

「あ~~~~は~~~~は~~~~！」

しかし私の叫び声は空しくもリムジンの分厚い窓と扉とエンジン音に阻まれた。結局最後に笑うのは、エロスの化身だったのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2902h/>

安藤さんはB型でした（改訂版）

2010年10月8日13時36分発行